Pfr. Dr. Max Christlieb.

キリストリーブ博士

基督教要領講義小序

此冊子は實に吾人が過般世に公にせし科學的神學叢書の第二編なり吾人が此叢書を出だすの微意他なし、日本精神界現時の趨勢を觀て聊か其需要に應せんと欲してなり、客歲北米ニューヨルクに開かれし宣教師大會に臨で某氏が『日本の教界兩約書と讃美歌集とを除くの外基督教文學書を以て任するに足るもの殆んど是なし』と謂へりしは全く無根の過言に非ざりし也特とに理論的神學書に於て最も然りとす、

我普及福音教會の機關として過去十三年間發行し來りし『眞理』が日本教界唯一の科學的基督教雜誌として如何に能く基教の立場より哲學神學の諸問題を縱橫議して而も倦まざりしは世既に定論あり更に此に贅せず、其は日本精神界發展の大流に向て隱微の裏一點細滴の貢献は確かに其の之れありしと云ふも敢て誇大なる吾人の妄言に非ざるを信ずる也、

然り而して吾人は現時の大勢に覩少しく思ふ處あり彼の神學上重大なる問題を考究し且つ論辯理證するの必要は此の後彌よ益々甚だしきを知る、隨て之れを世に公表するの機關も亦自ら面目を更めざる可らず、從來の如く雜誌に依る時は勢

ひ間々比較的簡短の内容を以て滿足せざる可らざるが故に舞臺頗る狹隘窮屈なるを感ずる也是れ吾人が新世紀の劈頭に於て斷然雜誌の定期發行を革め之れに易ゆるに長編の叢書を臨時に眞理社より出版するの止むを得ざるに出でたる所以なり其の叢書第一編は故牧師哲學博士リッテル氏の遺著『有神疑義』にして此編即ち其第二冊とす然して第三編はシュミデル氏の『奇蹟新論』にして是れ亦既に上梓したるを以て不日讀者の眼に觸るに至らむ、

然して吾人が特に大書して江湖の讀者諸彦に預告せんと欲する處はかの著名なる學者ハルナック博士が我叢書の爲めに興味ある著述を寄せむとの約束を與へられたる事是なり同博士の預約の書目種々ありと雖も就中讀者をして快を感せしむるものは其巨大なる歷史眼に映じたる『エルサレムより江戸城に至る基督教の歷程』の如きは蓋し最も光彩を放つ處のものたるべきか其他高識諸賢の靈筆になる倫理、宗教、神學、哲學及び聖書論等續々上梓して以て讀書社會に紹介せむと欲す、諸彦幸に吾人の微衷を賛して益々愛讀せられむ事を敢て序とす

東京礫川の寓居に於て

ハンス、ハース

基督教要領講義目次

序論……三—一二

第一章、基督教は宗教なり

一、宗教とは何ぞや

1. 序論……一三—一七

イ、宗教の字義を論ず

ロ、先哲の定義

ハ、定義の價値、

2. 問題の解釋……一七—二七

イ、余の定義

ロ、余が定義の解釋

ハ、宗教の心理的作用

二、宗教は在り得べき乎又必要なる乎

甲、宗教は在り得べき乎……二七—三三

1. 神即ち宗教の有すべき必要なる性質

2. 人間即ち宗教の主觀の有すべき必要なる性質
乙、宗教は必要なる乎……三三―三七
三、如何なる宗教在りや
甲、宗教の分類……三八―四六
乙、宗教の統計……四六―四八
丙、總ての宗教に共通する要義……四八―五三
丁、宗教の主なる形狀……五三―六四
四、基督教とは何ぞや
甲、神……六五―六九
乙、人……六九―七〇
丙、神と人(宗教的關係)……七一―七四
丁、人と人(道德的關係)……七四―七七
第二章、基督教は神に對する關係なり
五、神ありや
甲、此問題に答ふるを得べき乎……七八―八六
乙、有神證據論の性質と限界……八七―八八
丙、有神證據論相互の聯絡……八八―九〇
丁、有神證據各論……九一―一一三
イ、世界的證據論
ロ、意匠的有神論
ハ、人間的證據論
ニ、道德的證據論
ホ、宗教的有神證據論
六、吾人は如何にして神を知り得るや
天啓の本躰……一一三―一二三
甲、超絶說
イ、超絶的天啓
ロ、包合的天啓論
丙、啓示の分類……一二三―一二六
丁、聖書と啓示……一二六―一三五
七、吾人は神を如何なる者と考ふべき乎
甲、問題……一三六―一三八

乙、方法……一三八—一四一
丙、神の本躰……一四一—一五四
一、幼稚なる「ティスムース」二、「ティスムース」
三、凡神論　四、批評的「ティスムース」
五、人格と絶對
丁、基督教に云ふ神の概念の歴史的發達……一五四—一六五
戊、神の性質……一六五—一九九
イ、形而上的性質　ロ、心理的性質
八、吾人は如何にせば神との關係を生するに至る乎……二〇〇—二〇五
イ、神人の關係に付ての諸說　ロ、神人の關係の可能
ハ、神人關係の現實　ニ、信仰
第三章、基督教は歴史的宗教なり
九、準備

甲、宗教の歴史的性質……二二四
乙、イスラエル歴史の攝理的性質……二二五—二二八
丙、イスラエルに於ける宗教の發達……二二九—二五〇
一〇、成立……二五〇—二八五
耶蘇の自覺心
一一、基督教の發達……二七〇
一二、教會の發達……二八五—三〇八
三〇八—三二〇
第四章、基督教は倫理的宗教なり
一三、基督教倫理とは何ぞや……三二一—三三〇
（倫理とは何ぞや——倫理は在り得べきや——如何る倫理主義あり
や——なも合せ論ず）
甲、人間の天性……三三一—三四〇
乙、基督教の個人主義……二四一—三五四
丙、社會に對する倫理……三五四—三七六

附、吾人は何故に基督敎會に加入す可き乎

基督敎要領講義目次 終

序

此の書物が今世に出でんとするに當り余は一言して置き度いことがある、即ち此の書物の成立のとで今玆に書物となつて居る此の講義は元來博士キリストリーブ氏が學生等の爲めに基督敎の要領を四ヶ月程の間に講了して了る積りて、忘れもしない明治卅年の十一月九日に開講して毎週一回づゝ講義をせられたのであつたが夏休みがあつたり、又博士の思想の豐富なるなどが原因となつて中々四ヶ月で濟まなくつて、博士は終に我邦を去らるゝ三日前即ち明治卅二年の三月十四日迄に都合四十餘回講義をせられたのであつたが、それても講了が出來なくつて中途より最初の組立を變じ、第二の部即ち基督敎倫理と救濟のとに就ては詳論せられなかつたのである、これは甚だ殘念であるが致し方がなかつたのである。

博士の講義の席上で余は毎に之を通譯したがそれを佐方たき子女史が速記し後

之でを校正して余が編輯して居た「眞理」の附錄として載せ來り、今度完結したので
ある、斯樣な成立ちであるから章節の分け方或は假名のふり方など甚だ不完全な
處もあるが、これは讀者諸君の寬容を願ひ度いのである、余の翻譯とても席上で耳
から聽いて口から出した即席仕事であるから決して完全とは思はないが博士の
意見丈は誤り譯さなかつた積りである。

明治卅四年二月末日

譯者　三並良識す

基督教要領講義

序論

基督教を研究する爲に必要な事を、今日より凡そ四ケ月の間に演說して了はうと
思ひますげれ共其間に言ふ事は種々の六ツケ敷事柄もありまするから、充分述べ
盡すことは出來ず只要領を摘んでお話するのみである事は言はずとも解つて居
る積りであります、併し要領と申してもお解り惡い事の無い樣に、此のお話に關し
て必要な事柄は、極く短く且つ明に辯明致す積りです。メコデ此の講釋をする前に、
一言申して置かねばならぬ事がある、其れは是より述べまする所は、唯自分即ち私
の考であつて、決して「那邊（ナカ）」の敎會の、敎理を代表すると云ふ譯では無いと云ふ事で
あります、然し今お話する事は、從來獨逸の傳道會から、日本へ送つた人々の、敎へた
所と大躰に於て毫も違う點は無く、又當時獨逸に在る所の、自由神學者中の有名な
る、代表者の見る所と、其大躰の上は一致して、居る積りであります。

扨此の講釋を始めるに就いては、其大躰を別けて、五ケ條に仕樣と思ひますが、其五
ケ條及び之に屬する、詳細（コマカ）い別け方と、其れに關する若干の說明とを次に申し上げ

て置き度いと思います。

第一章、基督教は宗教なり

一、宗教とは何ぞや

二、宗教は在り得べき乎又必要なる乎

三、如何なる宗教在ありや

四、基督教とは何ぞや

第二章、基督教は神に對する關係なり

五、唯一の神在りや

六、吾人は如何にして神を知り得るや

七、吾人は神を如何なる者と考ふべき乎

八、吾人は如何にせば神との關係を生ずるに至る乎

第三章、基督教は歷史的宗教なり

九、準備

十、成立

十一、教義の發達

十二、教會の發達

第四章、基督教は倫理的宗教なり

十三、倫理とは何ぞや

十四、倫理は在り得べき乎又必要なる乎

十五、如何なる倫理主義ありや

十六、基督教倫理とは何ぞや

第五章、基督教は救濟の宗教なり

十七、吾人は救濟を要するや

十八、基督は救濟者なりとは何の意ぞや

十九、基督教は吾人に何を要求する乎

二十、吾人は何故に基督教會に加入すべき乎

第一、基督教は宗教なりと云ふとから先づ言はねばなりませぬ。ソコデ之を論ずる點を、四ッに別けてお話仕様と思ふので、其一は宗教とは何ぞやと云ふ事でありますが、此處では宗教に就いての、種々な定義がありますから、其れを擧げ且つ論じ、又宗教問題は大問題であるとを、大思想家の云ッた言を基礎として辯明し、最後に宗教に就いて、自分の定義を與へ、而して其一ッ一ッの細い事を說き且つ宗教は心理上、ドウ云ふ成り立ちの者であるかと云ふ事を、論じて見樣と思ひますが、之を爲すに當つても、主なる宗教哲學上の學說を引いて、毎時辯明する積りであります。

其次は宗教は在り得べき者であるか又必要なる者であるかと云ふ問題であつて

て置き度いと思います。

第一章、基督教は宗教なり

一、宗教とは何ぞや

二、宗教は在り得べき乎又必要なる乎

三、如何なる宗教在りや

四、基督教とは何ぞや

第二章、基督教は神に對する關係なり

五、唯一の神在りや

六、吾人は如何にして神を知り得るや

七、吾人は神を如何なる者と考ふべき乎

八、吾人は如何にせば神との關係を生ずるに至る乎

第三章、基督教は歷史的宗教なり

九、準備

十、成立

十一、教義の發達

十二、教會の發達

第四章　基督教は倫理的宗教なり

十三、倫理とは何ぞや

十四、倫理は在り得、べき乎又必要なる乎

十五、如何なる倫理主義ありや

十六、基督教倫理とは何ぞや

第五章、基督教は救濟の宗教なり

十七、吾人は救濟を要するや

十八、基督は救濟者なりとは何の意ぞや

十九、基督教は吾人に何を要求する乎

二十、吾人は何故に基督教會に加入すべき乎

第一、基督教は宗教なりと云ふとから先づ言はねばなりませぬ。ソコデ之を論ずる點を、四ッに別けてお話仕様と思ふので、其一は宗教とは何ぞやと云ふ事でありますが、此處では宗教に就いての、種々な定義がありますから、其れを擧げ且つ論じ、又宗教問題は大問題であるとを、大思想家の云ッた言を基礎として辯明し、最後に宗教に就いて、自分の定義を與へ、而して其一ッ一ッの細い事を說き且つ宗教は心理上、ドウ云ふ成り立ちの者であるかと云ふ事を、論じて見様と思ひますが、之を爲すに當つても、主なる宗教哲學上の學說を引いて、毎時辯明する積りであります。

其次は宗教は在り得べき者であるか又必要なる者であるかと云ふ問題であつて

此の問題の下では、神に關する種々な概念を、假りに論じて置く積りであります。例へば無神論とか、凡神論とか、二元論とか、或は有神論とか云ふ者は神に就てどんな說を立てゝ居り、又如何に宗敎と關係して居るかを論じ、又人間は他の動物と違ひ宗敎を持つて居るが、其れはなぜ之を信ずる樣になるのであるか、人間の宗敎に關する性質をも明かにし、又宗敎が必要であるか、必要で無いか、宗敎の無い人民、或は國民があるかと云ふ事や、又は學問の有る者は、宗敎が無くてもいゝか、宗敎の無いと云ふ樣な問題を攻究するのであります。

道德があるかと云ふ樣な問題を攻究するのであります。

其三は、如何なる宗敎があるかと、云ふ事で、此の條下では、宗敎の種々な分類を批評した上、自分の分類をも云ひ、又種々な宗敎の統計をも擧げて、お話する積りでありますが、此の場合に當つて、殊に注意仕樣と思ふのは支那の佛敎抔の事を考へて見ても、世界の宗敎中で、一番信者の數の多いのは、矢張基督敎だと云ふ事であります。其他總ての宗敎に特有な性質があり、又種々な性質がある。其性質に就ても論じ樣と思ふので、例之種々なる神とか、又は靈躰の者とか、或は自然の靈とか自然を神樣の樣に思ふとか、其他鬼神論とか、魔術とか犧牲とか、或は宗敎上の儀式祈禱神聖なる場處、祭日のとなど、又は僧侶、神の默示、聖書神學、敎會、道德、罪などの諸點でありますが、又宗敎には種々な形狀がありますが、其主なる者を云へば多鬼神論とか、精靈敎とか、其他拜物敎多神敎、一神敎と云ふ樣な宗敎で、其はドンナ者であるかと云ふ事を述べ且つ宗敎の起りは如何なる者であつたかと云ふ問題をも論ずる積りであります。

其四は基督敎とは何ぞやでありますが、此を論する場合には基督敎の宗敎と、其倫理道德の大躰を摘んでお話仕樣と思ふので、基督敎信者たる我々は、一ッの神を信じまするが、其神は絕對の者である、併し人格を俱へ、道德的の性質を有つて居り、我々は之を父と云うて、拜し、又我々人間は神樣に似寄つて其うつしに造られた者で人間は、皆此の神の子であり、それ故に我々人間は相互に兄弟であるとやら神と人間との關係は基督敎の說く所が宗敎的にも倫理的にも一番純粹であり人間と人間との間の事即ち道德に就ても、純粹なる自律であり、又利他主義になつて居ると云ふ事を概略申すのであります。固より此等の事は、此の講義の全躰の要點ですから委敷は追々論ずる譯であるけれ共、先づ最初に其の大躰を申して置くのであります。

ソレカラ第二の要點として基督敎とは神との關係であると云ふとを、言はねばならぬ。之れも四ッに區分して論じますが、先づ第一に問はねばならぬものは神は果して在るかと云ふ事であります。此處では無神論者又無神主義を把つて居る、自然の說明を批評し、且つ所謂有神證據論と云ふ者を論じて之をも批評し、而して其價値はどれ丈けあるか、即ち神は眞に在るか無いかと云ふ事を證據立てる能力が、其れにどれ丈けあるかと云ふ事を、哲學の立脚地から考査仕樣と思ひます。

其次は、吾等は如何にして神を知り得るかと云ふ問題でありますが、此處では默示

或は天啓はある事が出來るか、或は其れが事實であるか如何と云ふ事をも話し、之を哲學上から見た意味は、ドンな者であるか、又た基督敎が敎へる天啓の意味は如何なる者なるか、或は聖書や敎義の威光はドの位ある者であるか、などの點を批評する積りであります、其三は我々は神に就いてトウ云ふ考へをなさねはならぬかとの問題でありますが、これは全躰神に就いては考へる事が出來る者であるか、出來ぬ者であるかと云ふ事や或は「アントロポモルフィスムス」神人同形論と云ふて神を人間の樣に想像するとがあるが、其の是非を論じ、又種々神に關する概念があるが、其れをも論ずる積りであります。殊に凡神論や有神論のことから、神は人格を俱へた者即ち「ペルゼーンリヒカイト」なり、或は絶對なりと云ふ事及び基督敎で神の性質の事を云ふが其云ふ所は正しくあるか、或は左樣で無いかと云ふ事を論じ度いと思ひます。

尙其次即ち四は我々はどうしたらば神と關係するとが出來るか即ち交るとが出來るかと云ふ問題でありまして、此處では信仰とは、ドンな者であるかと問ひ、而して後に哲學上から、人間の本躰は如何なる者だかと云ふ事を研究して進んで人間は神と交る事が出來べき者であるとと、祈禱の事を論ずる積りであります。第三の要點は基督敎は歷史的の宗敎であると云ふ事でありますが、此の事を論ずる時に當つても、四つの區別を仕なければならぬので、即ち其一は、基督敎は「イスラエル」に於ける準備と云ふ事を先づ第一に述べる積りであつて、此處では進化思想を宗敎の上に應用するのでありまして、遂に基督敎が出來上たのであるが、其歷史上の進步の間に基督敎がドンナ工合に準備せられて出來上つたのかと云ふ事を最近の舊譯聖書研究の結果に照して考へ樣と思ひます。其二は基督敎は基督生存中にドウ云ふ有樣に出來上つたかと云ふ事で、此處では「ナザレ」の耶蘇の人物は如何であつたか、耶蘇の宗敎上の意識即ち其の悟りはドウ云ふ樣に發達したかを申しますが是れも最今の新譯聖書の結果を基礎にして、お話する積りであります。其三は基督敎の敎理の發達と云ふ問題であつて、此處では基督敎の敎義は希臘哲學の影響を受けて、漸々に成り立つて來た者でありますから、其有樣を述べ、且つ敎義を一々批評しながら極く必要な極く大切な敎義の宗敎上の價値は、ドレ丈けあるかと云ふ事までも結論仕樣と思ふのであります。其四は敎會の發達と云ふ事で、此處では宗敎上の團躰、即ち敎會なる者の、根本的の性質は如何なる者であるかと云ふ事を論定し而して基督敎が發達する間に、出來上た敎會が色々になつて居る、即ち希臘加特力敎會があれば、羅馬加特力敎會もあり、又た「プロテスタント」敎會もあるが此の種々の敎會に就き其れ々々の性質を話し、又宗敎及ひ敎會等の關係や、或は敎會と國家との關係をも述べる積りであります。

扨其次は第四の要點になりますが、其の題は基督敎は倫理的宗敎なりと云ふので、こゝで先づ問はねばならぬ事は倫理とは何ぞやと云ふ事である。即ち倫理道德に關する主なる問題に就いて論じなければならぬ。其次は倫理及び道德は、在り得べき者であるか又必要な者であるかと云ふのであります。此處で論ずべき事は、人間の意思は自由な者であるか左樣で無いか、並に眞心とは如何なる者であるかと云ふ問題を攻究するのであります。第三は倫理の學說には種々なのがあるが、其れにはドウ云ふのがあるかとの問題に就いて云ふ積りであります。ソレデ種々な人が主張した倫理學上の主義に就き、其大躰を話さうと思ふので即ち個人主義とか、利他主義とか、又は厭世主義とか樂天主義とか其他佛敎や儒敎の倫理は、ドンナ者であるかと云ふ事をも述べ且つ之を評論する積りであります。

其四は基督敎の倫理とは如何なる者であるかと云ふ問題であります、此處では先づ基督敎の倫理の理想を擧げて云ひ、猶其れをこまかくしては夫婦の關係家族或は社會上の關係、政治上並に國家の關係に至るまで基督敎の倫理を應用して云ふ積りで殊に現今の日本の狀態の事を主にし而して基督敎を此處に適用して論じ樣と思ひます。

次の要點即ち第五は基督敎は救濟の宗敎であると云ふ事で、之を云ふ時には先づ第一に我々は救濟を要する者であるかの問題が起ります。此の問題を出して而して

は、ドウ云ふ者であるかを論ずる積りであります。其二は基督は救濟主であると云ふ事は如何なる意味にてであるかと云ふのであつて即ち基督は救濟を人間に與へ樣と約束をしましたから、其れはドウ云ふ意味であるか又一個々々の人間が耶蘇基督に對する宗敎上の立ち場は如何なる者であるかを示し、又基督の人物が、人世にドンナ影響を與へたのであるかをも云ふ積りであつて是は基督信者になら うと思ふ人の爲には實に必要なる問題になつて來るのであります。其三は基督敎は、我々からドウ云ふ事を請求するのであるかの問題で、此處では基督敎信者にならうと思ふ者は如何なる事をせんければならぬかと云ふ事を極く分り易く、有形に表はして、お話する積りなのであります。其四は吾々は何故に基督敎會に加入せんければならぬかの問題で、此處では形式上基督敎會に加入する價値や意味や又は洗禮のことを述べ樣と思ひます。之れは恰度私の演說の一番終了であるのみならず、此の講演の目的が此處て解つて來るのでありまして、即ち此の演說の目的は唯學理を述べるヨリでなく、人々の智識を開いて行かうと云ふのみでなく、實際上の目的がありまして、其目的は一個人々々々々を基督敎信者に仕樣と云ふのでありますが、其れが此處で解つて來ます。

偖て以上掲げました要點々々を論ずる時に當りまして私は勿論、獨逸の傳道會社

の者が、代表して居る、自由主義の基督教は最高なる宗教であると云ふ、自分の爲には、動かす可らざる前提があります、が其前提から割り出して行く様になるであらうと思ひます、しかし是れも人類が今日迄に達して居る所の、最も高い眞理は、其大躰に於て基督にありと云ふ、前提から出て行くに違ひありませぬ。併し基督教の歴史上の現象を評論する時には、極く自由に申しますし、又基督教以外の宗教を論ずるにも、不偏不黨の考を以て遣る積りであります。其れ故此の話を聽いた人は、基督教信者になると決心せぬまでも、之に因て客觀的の智識を得る事が充分出來る様にする考へであります。

第一章、基督教は宗教なり

一、宗教とは何ぞや

1、序論

イ、宗教の字義を論す

前回に於ては全躰の講義でどんな事を申すか、大躰を摘でお話して置いた。其の中で第一が「基督教は宗教なり」と云ふ標題であつたが、此標題の下に四ッの疑問を起した。即ち第一「宗教とは何ぞや」第二「宗教は在り得べきものか又必要なものか」第三「如何なる種類の宗教があるか」第四「基督教の特色」と云ふのでした、今其の一ッ、即ち「宗教とは何ぞや」と云ふ事を取つてお話する積りである。併し此の問題は非常に複雜でありて、昔しから學者たちが之に答へて居る數も寔に澤山ある。私がコッチへ持ッて來て居る書籍ばかりの中にでも、宗教の定義を與へてある所斗りを抜いて、見たらば、凡七八十もあらふ、そう澤山あるのを悉く引き出して、此處で私が批評するかと云ふ譯ではないが、其の中で大切なの斗りを抜いて、如何なる事を云ふて居るかを論じ、且自分の意見をも申し上げる積りです。

先づ「宗教とは何ぞや」と云ふ疑問に答へ様と思ふと其詞を見るべきですが、歐羅巴では宗教と云ふ詞に、皆同じ字を使ッて、獨逸でも英吉利でも佛蘭西でも、同一の字を用ゐて居る。ですから其字は如何なる意味であるかと云ふ事を申すのは、其定義

に入る順序です。ソコデ言葉の意から申すと、此の宗教即ち「レリギオン」Religion と云ふ詞は、ラテン」語であつて、ソレハドウ云ふ詞から來ッたかと云ふと、是は動詞にすれば、集めると云ふ詞で、何でも必要なる者を、皆一ッ々々落さぬ様に、集めると云ふ意味を持ッて居る、それから謹愼に何かをすると云ふ意味になる。即ち宗教者とは、神を尊敬し神を拜むに際して、これに必要なる事柄を一ッも漏さずに集めて、それから神を拜む儀式をするのに謹み深いと云ふ意を行ふ者だと云ふ意味である。だから詰だと云ふのが、其原意に適當して居る。斯様な事から尙日本の宗教と云ふ詞に移ッて申すと、日本では或は宗教とも宗旨とも云ひ、又は宗門と云ふ詞もある。けれ共此の宗教とか宗旨とか云ふ詞は、敎へと云ふわけであッて、寧ろ學理の意味を持ッて居る。故に羅馬人が云ふて居つた詞と、日本の詞とを對照して見ると、一方は實際的の意味を持ッて居り、一方は學理的の意味を持ッて居る樣な氣味がある。斯くの如く同一の事を名付けるのであるけれ共、其名の附け方は、或は實際的なのもあり、或は學理的なのもある。ソレデ猶後の人々が、此の「レリギオン」と云ふ事に就き、如何なる觀察を下して居るか、是れから陳べませう。

ロ、先哲の定義

私は古人或は今人が如何なる定義を、宗教に下して居るかを見ん爲めに種々其れを集めたが、往昔極く宗教心の盛で在つたイスラエルの人民が拵へた、或は其中に成り立ッた聖書の中には宗教の定義と申す者は一ッもない。これは少し奇だと云はねばならんが、定義などをこしらへなかッたのは此の人民は宗教の實際の方面を進歩させた者であるから、學問上に目立ッ事を仕なかつたのが一ッの理由でせう、其後基督敎に至りて、其古るい時代の人が宗教は如何なる者であると云ふて居るかを見ると、「宗教とは神を知り之を崇拜する者である」と斯う云うて居るが、是れは極く廣くて、那處にでも當てはめる事が出來る。だから單簡で通俗で、好い定義であらうと思ふ。其後羅馬の有名なる學者、セヂカは之を少しく變じて、定義を下し、「宗敎とは神を知り、且之に眞似う事なり」と云ふて居る。又基督敎の神學の進んだ時に、彼の煩瑣哲學が下した定義は、「宗敎とは吾人が思索、意志、行爲に於て神と合一せりと感ずる意識だと云ひ、それからカントは「吾人が道德的義務は神の與へし命令なりと悟る是れ宗敎なり」と申しました。又英吉利人でカイエルト(Caiert)と云ふ人は、「宗敎とは有限の意志が無限の意志の中に沒入する事である」と云ふて居る。又獨乙の神學者、プライデレル(Pfleiderer)は、「宗敎とは世界を支配する勢力と、一致せんとを求むる生活(實際上)の關係なり」と云ふ定義を下して居る。次に英吉利で今日鏘々の名ある神學者マルチノー(Martineau)は、他の方面から觀て居るが、其定義は「宗敎とは世界を支配し且つ人世と倫理的關係を有する神の靈と其意志とを信する事なり」と申すのであり、獨逸の哲學者のロッチェー(Lotze)は三種の感情に據つて宗敎の定

義を下し第一「宗教とは不可知の靈を怖れ慰籍を求むるものなり」第二「奇異なる理なる者を理解せんが爲に、世界の工造者を推理するに至る道徳的感情なり」と云うて居る。次にセレー(Seeley)と云ふ英吉利の學者は「宗教とは習慣となりて變ぜざる嘆異の感情なり」と云ふ定義を下して居る。又ミル(Mill)は總ての利己的願望を超脱し人の認めて最高なる秀逸崇高となせる理想的「オブエクト」對稱に對する强力嚴正なる感情及意志の傾向なり」と云ひ。ソレカラ二百年程前に活きて居つた有名なる哲學者スピノザ(Spinoza)は「宗教とは實際上の方面より觀れば神の訓戒に對する服從であり若し學理上から高尚なる宗教に當てはめて云へば神に對する智識的の愛である」と云ふて居る。又前世紀より今世紀の始めにかけて有名なるシュライエルマッヘル(Schleiermacher)は、他の人と大變に違つた定義を下して居る。ソレハ「宗教は吾人を規定し吾人の規定し能はざる勢力に對する實際的依賴の感情である」と云ふので。又ヘーゲル(Hegel)は之と反對の側から定義を下して宗教は有限なる靈が其本躰は無限の靈であると識るを云ふのであると云ふて居る。又フィテー(Fichte)の定義は「宗教は最高者を知る事であると云ふて居る。次にヴント(Wundt)は(理想的にして人間の情の冀望する所と、要求する所とを、完全に滿足せしむる事を得る存在者に關する觀念と感情なり」と云ひ。フォイエルバッハ(Feuerbach)は「宗教は

人が實在すと考へたる願望である」と云うて居るので、是れは實在ではないが、人間が然う考へると云ふのである。又彼の批評家のストラウス(Strauss)は宇宙に對する感情或は宇宙と人間との觸接即ち不滅生活なり」と云ひ。次に獨逸人にして英吉利に往つて居るマックスミュルレル(Max Müller)は人間の道徳的品性を養成し得る力となりて顯現する無限を知覺することであると云うて居る。

八、定義の價値

以上の定義を合して見ると丁度十九あるのですが。尚引かうと思へば幾等でもある。偖て斯う澤山あるのを知りて何の益があるか……此等の定義を下した人は。皆有名な學者であるけれ共、皆な宗教の事に就いては頗に考へて居るのが解る。是等の非常なる哲學者は毫も宗教を無益者視して擯斥し土芥視して居らぬのみか、之に非常な注意を注いで宗教の何者なるかを研究して居るのは、則ち宗教の實に大切なるものなる事を示して居るのである。則ち今申した多くの定義は其證據である。又此定義を一寸見ると其うちには各相反對して居る樣であるが、決して然う云ふ譯ではない。是れは只だ種々な方面から、觀察を下したので、其觀察の多樣多面なる事を、表はして居るのである。

2、問題の解釋

イ、余の定義

それで私は宗教にドウ云ふ定義を與へるかと云ふと、「宗教とは有限の靈たる人間が、無限の靈たる神に向つて人格的に向上、解脫する事なり」と云ふたらばいゝと思ふ。

ロ、余が定義の解釋

偖て此の定義を委敷解せむと思はゝ、此の定義に在る一つ々々の事柄を考へて見なければならぬので、宗教の主となる者は、何であるかと云へば、即ち人間である。併し此人間は如何なる者としての人間ぞと云ふと、有限なる靈としての人間なので、有限のとは、即ち總ての事に就き、制限を感する義である。人間が此の世の中に在る時には、種々なる方面より制限せられ、自分の自由勝手にする事の出來ぬ樣になつて居る。人は自然の勢力の爲めに色々に制せられて居るので、其自然の勢力に對して人は如何ともする事の出來ぬ場合が多い、それは或は人の倫理上の不完全なる點より來る事もあり。或は死と云ふ事もある。是れは人間と生れた者は何人も受なければならぬ。斯くの如く人は種々なる方面に向ひ制限を持つて居る其制限せられて居る事があるから或は不愉快もあり、或は恐怖も起る。そこで人々は此の制限に就き、何も思つて居ぬかと云ふと、決してさうではない、ドウかして之を脫出仕樣と云ふ熱望がある。然らば自己の力に依ッて此の制限を脫出し得るかと云ふと自己

の經驗に據るに決して然う行かぬ。ソレ故或る者に對し、此の場合に救助を求める此の或る者が宗教の「オブエクト」即ち拜む神である。拜む神は無限の靈であるから、此の無限の神に救助を求め、其力に依つて制限を離れ、自在任意なる者とならむと希望するのである。併し唯さう人間が救助を喚ぶのみであるか、唯コレハ人間の希望丈けであるかと云ふと、然うでは無い。眞に人は其希望を達し、制限を離れて自由を感ずるとが出來るのである。故に宗教心の盛なる者は凡べて今申した束縛制限即ち死或は其他より離れて自分は既に自由の天地に逍遙する者なりと考へ、或は感ずるに至るのである。又宗教と云ふ者は、單に斯樣な者であると云ふ理屈ばかりを考ふる者もあるけれ共ソレが中心點では無いので自分自身は眞に自由であると感ずるに至るのが大切なのである。故に諸君が鳥度宗教の書物を讀み、快く感じ、又は其理を悟られても、まだ〳〵宗教上の向上、解脫をするのは人間全躰がするので、即ち人格的にするので唯智識が然う云ふ事を考へるのみで無く、人間の智も情も意もみんな神の處に行ッて仕舞ッた樣な心持になり其感を以て世の總べて己を制限する者より離れる意味なのである。今陳へた通りであるから宗教には人間が主である。其人間は有限なる靈である、併し其靈と云ふ事に就いては、人の考へも色々とあるだらうが兎に角自己の靈と云ふ事は、文明人も野蠻人も皆な共に考へる所だから、是れは那處にも適する詞であ

る。又神と云ふ事は、何人が考へても、如何なる宗教でも、ソレハ靈であるとして居る自己よりも非常に力の強ひ勢の強ひ靈躰だと考へて居る。そうして此の自己より も勝ッて居る強ひ者に依つて、有限を脫して無限界に入らんとするのである。だから前の樣な定義を與へて置けば如何なる宗教にも適し、且つ其本躰をも得て居る者と思ふ。ソコデ此の定義を今一度くり返すと、宗教とは有限の靈たる人間が、無限の靈たる神に向つて人格的に向上、解脫する者であると云ふのである。

私が今與へた定義に就き、爰に一ッ注意して置き度いのは宗教と云ふ今の定義にある事柄を事實であると認めて戴きたいのである。ソレハ固より宗教では神を信ずるが、然う云ふ者が果して在るだらうか、若し無ければ斯んな事を云ッても、ソレハ虛言になりはせぬかと云ふ疑問が起る譯であるけれど、も、其事に就ては尙後に細かに論ずるから、此處では私が宗教に就き與へた定義を一ッの事實であると認めて戴きたいのである。ソレハ何も無理を云ふのではない、天下の事實が左樣なので兎に角宗教と云ふ者は必ず神を信じて居る」又其神を信するに至るのは自己の有限なる事を知ッて無限の神に依り、自由を得む事を求むるので換言すれば安心立命を得るのである。是は事實だから、此處では其事を認めて置いて戴き度いのである。然らば此の宗教は人々に入ッて如何なる作用を爲して居るかと云ふ事を次に論じやうと思ふ。

八、宗教の心理的作用

宗教に就いて前に種々な人の定義を陳べ、私のをも出して置いたが、然らは宗教は人の精神を、如何に働かして居る者であるかと云ふ問題が起る、是れは往昔から隨分と學者間の議論になッて居るので、或は宗教は心理學で分ける知、情意の其知丈けを働かして居る者であると云ふ說もあり、或は情丈けであると云ふ考へを立てた者もあり、又は意のみだと云ふ說を爲した人もある、併し私は是等の說を皆偏頗なのであるが、最も有名なのは彼の哲學者のカントである。カントは「宗教とは我々の道德上の義務は神の訓戒であると悟る事だ」と云ふ定義を下して居る、即ち人が爲さねばならぬ所の行爲は、神の人間に命じた者であると、認めるのだと申して居る。併し宗教をこう云ふ風に解したのはカントのみでない。宗教を意の方面に置くのは、往昔の羅馬人も然うであつたので、前に集めると云ふ字から宗教と云ふ詞が來たと申したが、即ち神を崇拜する爲めに用ゆべき事柄を集めると云ふ事なので、神に對して人が爲す所の行爲であると考へてゐたのである。其他基督教の起つた源の「ユダヤ」教でも、矢張宗教は人の意志にありとして居たのです。「ユダヤ」教では神の訓戒を守ッて、ソレを愚く爲さへすれば、則ち宗教の責任を全うして居るのだと考へて居たしかのみならず基督教の發達の間にも、彼の「カトリック」教と云ふがあつて、「カトリック」

教では神に對して種々な處作をするのが宗教であると考へて居る。即ち行爲に重きを置いたから、意志の一方に偏してしまつた。之とは反對で。宗教は意志に非ずして、感情の方面に在ると考へた者もある。此の世紀の始に居た、シェライエルマッヘルと云ふ人は「宗教は絶對的の依頼を爲す感情である」と云ふて居る即ち人が神に對して限りなく絶對的に服從を爲し、依頼を爲しツレに依つて、此の世の制限を脫し、其以上に立ツて、超然として居る事の出來る感情が宗教であると云ふ考は考へたのである。併し尚之に反對して宗教は單に知に關する者であると云ふ考へを仕た者もある。其人はヘーゲルでヘーゲルの定義は前に出して置いたが、今一度くり廻せば、宗教とは有限の靈が自己の本躰は無限の靈であると知ることだ」と云ふて居るので即ち觀念に重きを置いて居るのである。併し私は以上三ツの說はどれも、皆偏頗な議論だと思ふ。只だ行爲にのみ重きを置き。ソレさへすれば、宗教的の人間になるかと云ふに、まだソレでは宗教的の人間だと云ふ事が出來ん、宗教と道德とは違ツて居るのである。又感情もあるけれ共併し宗教は唯だ感情ばかりだと云ふとは出來ん。感情とは或は愉快とか或は不愉快とか云ふのであるが、其れは人々によりてマチ〳〵になつて居る「又其マチ〳〵な感情に據ツて宗教が成り立ツて居ると云つたらば、行爲と云ふ事は那處に在るかと云はなければならぬので、然うするとこれが善いか悪いかと云ふ事を問ふの必要も無くなつて仕舞ふ。又

ヘーゲルは宗教は觀念のみで成り立ツて居る者だとするけれ共其觀念は果して當を得た者であるか、正鵠を得た者であるか、又は得ざる者であるかと云ふ議論を仕なければなん乃ち觀念のみで成り立ツて居ると云ふ事は出來ぬ樣になつて來る。故に是等の議論即ち知から成り立ツて居るとか、情のみであるとか意志であるとか云ふ樣に、一ツ〳〵別けて仕舞うのは共にまだ全躰を盡した者で無いと云はなければならぬ。

ソレカラ又宗教は、果して理に適ふた者か、將た適はぬ者かと云ふ事に就いて疑問がある、是は考へが二ツに別れて居て、或者は「宗教は人の妄想である」と云ひ、又之に反對して「宗教は眞理である」と云ふ者もある。宗教は單に妄想だと云ふ說を採る者は「宗教は智慧の無い者とか、我は婦女子とか、又は子供なとの爲めに出來たのであつて、其他の者に必要は無い、若し深く之に入りて考へて見ると、些少の理屈も無い、單に人の妄想に止るのである。惡く云へば人を愚に仕樣と思う者の造り出したものである」と云ふ樣な事を唱へて、宗教の本躰には理と云ふ者は、毫も無いと說く者が、世に鮮なからぬのである。是れは唯だ俗說と見るべきものでない學者の中にも其說を代表して居る者が、若干あるが、其中で最も汎く斯說を唱道した者は、羅馬人で思想家の名あるルクレチウスである。ルクレチウスの考へる所によると、宗教は恐怖心から成り立ツて來た者で、人間が種々な事を恐るゝ、其恐るゝ心が神を生み

出した」と云ふて居る。ソレと同じ説を英吉利の哲學者のユームも立てゝ居る。ユームは「人間は自然を見又は自然の種々な變化極りなき勢力に對して、恐れを抱く者で其恐怖から免かれる目的で神を拜するのであるが、併し世に神と云ふ者が眞に在る理由は無い」と云ふので。即ちルクレチウスの説と同じ事である。又獨逸にも然う云ふ考の人がある、それは彼のフォイエルバッハである此の人は「人間は幸福ならん事を求むる者である然らば如何にしてそれを得るかと云ふに幸福になる事は自分の力では出來ない、故に神に依ッて之を求めやうとするので神の觀念は、人の願望が生み出したので即ち自己の精神中より、拵へた神を人は拜むで居るのである、だから其神は實際存在して居る譯では無い、此れは願望の幽靈である」と考へた、且ッ「人間の迷ひは斯樣な愚なもので人間が此の迷ひに居る間程、愍むべき者は無い、故に宗教を悉く打破らなければ、人間の眞の性質は現れて來ない。眞理を害する事宗教の如く甚敷ものはない」と云ふて居る。又是と同じに宗教を考へたのは、ランゲーである、此の人は宗教は妄想ではあるが、併し人に利益のある妄想であるから、信じて居る事が出來れば其方が宜しい」と云ふて居る。之に全く反對で「宗教は只だ主觀的なるのみではなく客觀的にも實在せる基礎を持てる者である」と云ふ人も多い。其中近來の人の説を擧ぐれば二ッの説明がある。一ッは學説上の説明で今一ッは實際上から來た説明である。ソレハ「人が信ずる宗教は事實である、眞正の根本がある、然らばドゥして人間は宗教を信ずる樣になるかと云ふと、是れは學理の上から來たので、實際より來たのでは無い。學理を進めて、宗教に達するのである。學理の研究より、神を拜む事を發明して、ソレを拜する樣になるのだ」と云ふ。是れはエドワルド、フォン、ハルトマンの説明である。又實際上から説明をする者は「人間は此の世の中に於て種々なる罪惡の中に陷ッて居る。又陷らずとも罪惡に近附く樣な、誘ひを受くる者である。故に此の世の中に居ッて段々善くなつて行く事を求めねばならぬ。即ち人間が自己を完全にする事は必要である。其完全にする事を求めて遂に宗教に達して來る。併し其宗教と云ふ者には、無論客觀的に實在する基礎があつて、決して空想。妄想では無い」と主張する。

今迄種々の説を集めて陳べたが、併しソレは皆偏して居る。けれ共全く採るに足らぬと云ふ譯ではない、若干の眞理は皆有つて居る。例へば宗教は意志であると云ふけれ共「單にソレのみでないが、併し宗教の中には意志も在ると云ふ事は認めなければならん。宗教を信ずる者は、行爲も正しくせんければならん。若し宗教を奉ずる者に、此の事が無かつたらば、眞の宗教者と云ふ事の出來ぬのは何人も認めて居る或は感情のみと云ふ説かあつたが、決してそれのみではないけれ共感情も亦宗教の中には、缺く可らざる部分を占めて居る者だとは云はなければならん。宗教を奉ずる者は、唯善い事を爲すとか、或は神を知るとか云ふのみでなく一種の心に平和

とか、或は安心立命とか、快活とかの感情を持つて居る。是れは宗教に欠ぐ可らざる事柄である、又ハルトマンは「宗教は智識である」と云ひ「通俗の形而上學である」と云ふが、其考へにも若干の眞理を含むで居るので、世界とか神とかに就いて考へると云は毎時宗教と離るべからざる關係をなして居る。ソレデ宗教では智情意を一ッ々々に分けると不正當に成るが之を合せて觀れば正當になつて來るのである。故に宗教は單に智や意や情斗りに在るのでなくて、全躰に亘つて居る。

私共は世に在る宗教を心理上解部して其作用を考へるけれども、是れは我々の思考が不完全で心の作用の全躰を語る事が出來ぬからである。又他から妄想と見られる場合も少なからぬのであるが、是れは吾々人間が有限であるから談話を云ふにはいつも比較を取つて偶像的にするので、よし精神上無形なとを云ふのでも偶像的若しくは比喩的たるとを免れない、例へば神は智慧がある者なりと云ふけれ共、其智慧がドンナ者であるかと云ふとを考へるには人間と比較しなければ云ふ事が出來ん。ソコデ万人に勝れる者であると云ふが、是れより外には何とも云ふ事が出來んからである。教に若干の缺點があるのは自然の理由である。又人間の詞は智慧が考へる丈けしか云ふ事が出來ん。コレモ不完全な證據である情のとなどは其儘云ふとは出來ん。例へば神の愛と云ふが其愛は如何んな者であるかを他人に示さうと思ふても之を知らぬ者に對して云ふ事は出來ない。愛とは父を愛するとか、母を愛するとかの愛情であると知つて居る者に云へば、直ぐ明かに解かるが、父をものともせず母を愛せざるものには、説明をする事が出事ん。恰度盲者に色を説明する事が出來ず。聾者には音樂を説明する事が出來きぬ樣な譯で人間の説明は限られて居るから説明して直ぐに其れ丈けが宗教の全躰だとは云へん。又宗教の心理的作用でも區別すべきものではない、區別するのは便利上からであつて、宗教は、人間の全躰を圍繞て居り、人間の精神の全般に亘つて居る者である。故に往昔の基督教の聖書の中には、定義を與へては無いが、神が人間に求める所は全心を獻げるとだとあつて智を求めるとか、情を求めるとかはない、人間の全躰を求めるとか云ふてあるが、是れは最も正當な理である。又歴史上より宗教を考へても、心理上より如何なる作用を爲して居る者だかと云ふ事を考へて見ても、私が前に申した「宗教とは有限の靈たる人間が、無限の靈たる神に向ッて、人格的に向上解脫するとである」と云ふ定義は正鵠を得て居ると思ふ。

二、宗教は在り得べきか。又必要なるか

甲、宗教はあり得べきか

此の前の時に「宗教とは何ぞや」を云ふ題で、お話をしたが、今日は其れに引き續き、「宗教は在り得べきか、又必要なるか」と云ふ事に就きお話を致す積りである。が「宗教は在り得べきか」と云ふのは、少しく適當で無い樣に見へる、何となれば斯の如き疑問

を起さゝるも、元來宗教は此の世の中に在るのは事實である。然るに其れを捕へて在り得べき者なるや否やと問ふのは其處に若干の不都合なる點があると云はなければならぬ。併しながら此の問題を掲ぐたる理由は、實際世の中に行はれて居る宗教と云ふものは、果して道理のある者か否かと云ふので、此の疑問を出すのは、適當の事である、前回宗教の定義を話した時、既に諸君が聽かれた通り、彼のフォイエルバッハは「宗教は實際在る者である。けれ共宗教は、人間の迷想である」と申して居るが、果してフォイエルバッハの說は眞理であるか。又よし私は宗教を奉じて居るとしても、是れが自身のみで主觀的には、何の理由も無きわけであるか、或は然らざるものか、其等の點は如何なるわけであるかと云ふ事を先づ論ずる積りである。

1、神即ち宗教の對象の有すべき必要なる性質

そこで宗教が成り立つには二つの無ければならぬ者がある。即ち一つは神一つは人間である。是は前に宗教の定義を論じた時「宗教とは有限の靈たる人間が無限の靈たる神に向ひ、人格的に向上解脫する者である」と申したとに據るも神と人間とは宗教の成立上是非共無からざるべからざる者である。然らば其神が果して在るや否やと云ふ問題は今爰に論ぜず次に云ふ積りであるが、兎に角宗教の成り立つ爲めには、此の二つの者が必要である。若し神が無いと云ふ彼の無神論から

云へば、徹頭徹尾宗教は成り立ち得ざる者で、又宗教の成り立つ必要があれば、從つて神も無ければならぬ。然かるに之れを無しとすれば、宗教は亡ぶるに至たる。今私は宗教を奉じて居るが、玆に何人か參つて「お前の奉ずる宗教は神を信ずるものであるが、實際左樣な者は無いのだ」と數へてくれた時に、私が「成程然り」と悟る場合があれば、ソコデ私の宗教心は亡ひたので、既に自分が無いと悟つた者を、信ずる事は出來ぬ。然し或は說をなして「無神論を根據とする者も、實際は宗教を造るにあらずや、佛教即ち是なり」と云ふかも知れん。けれ共是は或者の誤解である。佛教は今日の形狀に於て、決して無神主義ではない。何となれば那處の寺院に行つて見ても、彼等の神として拜する物を置いて居らぬ處はないのが其證據である。成程昔に溯つて釋迦が教へを立てた時を考へると、其時は無神論であつた、否無神論と云ふより寧ろ神のとには毫も關係しなかつたと云ふ方が宜しい。神があらうがあるまいが、無頓着であつて斯かる事を問ふ必要が無かつたので、人間は自身で救濟を受け得る者であると云ふて居つた。故に此の教は其時代に於ても學問のある人間即ち僧侶仲間の者は解するとを得れど、外の者には通じなかつた。此佛教は理論にたけた印度人の中に出來た一派の哲學と見て宜しいのである。又哲學の一派を爲して居る間は是れで不都合がないけれ共通俗の宗教となるには、神が無ければならぬ、其れ故其以前から在つた神々を一時佛教の中に引き込んで仕舞つたので其以來佛

教は神を拜む樣になつて居る。之を見ても神無ければ、宗教と云ふ者は、成り立つと
が出來ぬのが解る。
宗教の成立する爲には、神が必要である事は、只今云つた通りであるが、然らば其神
の性質はドンナ者でなければならぬかと云ふ問題が起つて來るが、其れは人格を
有する者でなければならぬ。若し此の神に人格がなかつたならば宗教も亦た成り
立ち得ない。何となれば宗教は、神と我との關係を附けるものである此の關係が附
くには、我が「ベルゼンリヒカイト」即ち人格を有して居る如く神も亦人格を有せね
ばならぬので、若し先方が人格を有して居らぬならば、關係の附く理が無い、故に彼
の凡神論、極く矛盾無き凡神論では、神に人格がないと云ふから、それではドウして
も宗教は成り立つ事が出來ぬ。凡神論の說では吾人も神も共に同一の者だと云ふ
から、宗教的の關係が成り立つ理がない。此の凡神論の主なる代表者は西洋に於て
はスピノザ、及びハルトマンで、東洋では印度の婆羅門教である。何故凡神論では宗教
が成り立たないかと云ふと例へば私が人を愛すると云ふも、其者が若し人格を有
して居らなかつたらば相互の關係の附け樣が無いから愛するとが出來ん。或は私
と私とは關係を附けるとが出來ん然るにハルトマンは基督教は愛を說くが、之を
實行するには、凡神論が適當だと申して居るが、それは誤つた話で、私が私を愛して、
愛の一致が出來て仕舞へば、其愛は止んでしまうから是れは謬つた言と謂はねば

ならん。
斯くの如く人格的の神が必要である。けれ共唯其れが在つたのみでは、まだ足らな
いので、此神は極く人間に近い關係を有して居る神でなければならぬ。けれ共神と
云ふ者は人間に近い關係を有する者でないと謂ふ學說もある。即ち神は世界以外
に超然絕在すと說く「ディスムス」(Deismus)は其れで、其說によると、「神は在る、けれ共
それは人間に何の關係も無く超然として居る神に向ひ、人間が關係を結ぶ事の出來ぬ理は、
とは何の關係も無く超然として居る者である」と云ふのである。併し人間
明白である。此の超絕神論を說いた哲學者はグリイキのエピクール(Epikur)と云ふ
人の外尙澤山あるが、是は哲學論としては、成り立つて行くかも知れんが、宗教を造
る事は出來ぬ。ソコデ神には人格が有り、人間と近い關係があるとした所で其神は
一神であるか多神であるかと云ふ疑問が起る。併し宗教は一神でも多神でも、成り
立ち得る事は、歷史の明に敎へて居る所で即ち一神論を主張せる宗教もあれば多
神論を稱へて居る宗教もある。けれ共此の兩者の中で孰が優つて居るかと云へば、
一神敎の方が無論優ッて居ると謂はねばならん。前に人と神との關係をお話した
から、其れに就いて申して見れば二人の人格が關係して居るのと
澤山の者が關係して居るのとは大な差異があつて其關係の密なるは無論二人の
方が優つて居る。或は佛敎は一神敎よりも遙に世の中に廣まつて居て基督敎又は

「モハメット」教が、佛教程に蔓ッて居らぬのは則ち其宗教に力の少ないとを示して居るのだと云ふ者があるけれ共、其は間違で佛教よりも一神教の方が遙かに廣がつて居る。又神が濟山在ると其神と神との間に爭闘が止まないで、兩方から互に制限仕合ッて爭ふて居る、メコデ限り無き權を有ッて居る者はない。併し一神教の神は、無限の靈で世界を統一して居るとか出來る神である。此點より考へても、遙に一神教が優つた地位に居ると謂はねばならん

2、人間即ち宗教の主觀の有すべき必要なる性質

宗教が成り立つ爲には、神には如何なる性質がなければならぬかと云ふ事は前に述べた通りであるが、今度は宗教が成り立つ爲には人間に如何なる性質が必要であるかと云ふとを考へ樣と思ふ。人間が神に向つて關係仕樣と思ふならば、之に向ひ得る丈けの能力が無ければならん。即ち此の能力は人間が靈性を備へるとであるる。若し人間に靈性が無ければ神に向ッて人格的に關係して行く事は出來ないから人間以外の動物が宗教を奉じ得るや否やの疑問も是れで答へねばならん。ハルトマンは其宗教哲學の發端に於て、「動物は宗教を信ずるや否や」との問を出して居るが、若し私に人が斯く問ふたらば、私は直ちに他の動物は靈を有して居るか如何と反問仕樣と思ふ。若し動物に靈があれば宗教もある、靈が無ければ宗教もない。併し動物が靈を有するや否やと云ふ事は、今日爰に論定はしない

只人間が靈性を有するばかりでもいけない。其他に宗教を求むるの需用が無ければならぬ。人間は有限であるから束縛を受けて居る、然し靈であるから此の總ての束縛より脫せんと欲する、需用と願望が起る。其れが爲にまた宗教を奉ぜむと思ふの心が起つて來る。是れは何人も經驗するとで獨逸人の俚言に「Noth lehrt beten」と云ふことがある、即ち「困難は祈禱を教へる」と云ふことゝ全じ意味なので、之に據つて考へても、人間は宗教を奉ずる需用があるのは明である。

乙、宗教は必要なるか

更に進んで宗教は必要なるかと云ふ問題を論じ度いと思ふ。併し此の問題は、前に陳べた、有限の靈たる人間は宗教の需用があると云ふとが若し誤つて居らぬとすれば、宗教は人間の本性に出づる者で苟も人と生れた以上は之れ無くてはならぬと云ふ論結を爲すも敢て謬つては居らぬ。併し斯く云ふても猶ほ人間に宗教は要なき者だと云ふ論者があるから果して其言が眞理なりや否やを確めて置かなければならんが、先づ議論の根據を歷史に取らうと思ふ歷史的に觀察するにも、二つの區別がある。第一古來世界の國民は宗教を有つて居つたか。第二、一個々々の人の中で、宗教を有せざりし者があつたかと云ふ事である。

今より恰度四十年程前の事であるが、宗教排斥の聲が歐羅巴に高かつた時には、宗

教の無い國民も在る」と云ふた人があつた。是れは人類學者や或は世界を旅行した人の中でそう云ふ說を立てたのが元となつて、して見ると成程人間は宗教無くともすむとが出來ると云ふ聲が高くなつたのである。併し此の說の根據は一時の誤解であつたのだと云ふ事は、今日明かになつて居る最早人類學者として旅行せし者でも「無宗教の國民がある」と云ふ如き斷案を下す者は無くなつた。元來左樣な事を云ひ出したのは、或る處に行きて、野蠻の人民に向ひ、お前は宗教を奉じて居るか」と問た時に、彼等が「知らぬ」とか「無い」とか答へたから、起たのである。だが此の答はあてにはならん。何故と云ふに宗教の事は秘密にするから、めつたに口外はせんものである。けれ共實際は到る處の國民は皆んな宗教を奉じない國のないとは直に明かに解るのである。

扨國民としては宗教を有たぬ者は無いが、然らば一個人としてはどうであるかと云ふに、或人は云ふ、宗教は匹夫匹婦の奉ずる者で吾々學識有る者には其の必要が無い」併し果して斯かる說が至當であるや否やと云ふ事は論じなければならぬ。世の中には成程宗教を排斥する者があるが、けれ共其排斥するのは、現在の宗教が自己の氣に入らぬと云ふて斥けるのが多い。實際其心中をたゝいて見ると善き宗教を何かして得たいと云た熱望がある。故に現在の宗教に向て反對を唱へる者あるを見て直に此の論者は宗教不必要を主張する者だと、判斷を下す事は出來ぬ。又或は

或人を批評して「彼は宗教を奉じて居らぬ彼は宗教に反對する奴だ」と云ふともあるが、是れは自分の信ずる宗教を奉ぜざるの人を批評するに用るともある、けれど自分と宗教を異にする人なりとて直にメレを無宗教者であると云ふ事は出來ぬ何となれば是れは先方が奉ずる宗教は、我が氣に入らぬと云ふ狹い心から起るとなので、こんな狹隘な批評は注意してせん樣にせなければならん。又或る人士即ち宣教師杯は「モンゴリヤ」人種は、宗教に冷淡である、之を土芥視して居る」と云ふ者もあるが、(蒙古人種とは支那日本朝鮮等の國民が屬して居る人種である)又斯樣な理由から日本國民は、宗教に冷淡だと云ふ者もあるが果して然るや否や私は信ずる事が出來ぬ、如何となれば日本には多くの教派が行はれても居り又互に相論じ互に相競ふて居る、宗教に冷淡なる者に斯の如き事が出來るだらう歟……又諸君が一寸淺草にお出になつても、或は西京の諸方を遊覽せられても、神社佛閣に幾多の人が參詣して居るのを見られるだらう。此の有樣を見ては、日本の人民を稱して、宗教に冷淡なりと云ふ事は出來まい。如何なる田舍の村落に行つても、必ず神社か佛寺がありて之に參詣する者あるを見る、是れ此の人民の宗教に冷淡ならざるを表はして居るのである。併し若し果して宗教に冷淡なる國民がありとすれば、其れは人種として劣等なる者と云はねばならぬ、蓋し古來世の文明を進めた人種は如何なる種類の者なりしやと云ふに、印度ゲルマン人種と云ひ、セミチック人種と云

ひ、皆世の文明を進めた者だが、此人種は宗教にも亦熱心なりし事は明な事實である。又今日亜米利加で以前に此處に住居した人民の遺蹟を尋ねて見ても皆宗教に關する莊觀な物が殊ッて居る。シテ觀ると宗教は人民をして一大進歩を爲さしむる、一ッの動力になつて居るとがわかる。だがら宗教を信ずる天性は、何人も備へて居るが、それのみならず國民を發達させ様と云ふ事は人間の希望であるが此の點より見ても人間には是非宗教が無くてはならん者である。之に續ぎて尚必要なる問題がある即ち宗教無くとも道徳が行はれ得べきや如何と云ふとてある此の問題に就きて、基督教の神學者等は、徹頭徹尾宗教が無ければ道徳は行はれぬ者だを斷論して居るけれ共其れには若干の極端な點があると私は考へる。先づ此の問題を攻究せんと欲せば之を二ッに別けねばならぬので即ち國民として宗教を奉ぜざるも道徳が行はれ得べきが、又一個人としては如何であるかと、斯く二ッに別けて問はんければならん。國民として宗教を奉ぜざる者は無いから國民の道徳も宗教に關係せぬ者は無いわけである。早來如何なる人民も其徳性を涵養したる所以の者は、皆宗教と相連關して居る、併しながら一個人とし云と事が違ふ。私は自分は宗教を奉ぜざるも自身の道徳丈は守ッて行く事が出來ると思ふ。と云へ是も熟く考察を下さねばならぬ事なので、成程今日の私にはそうする事が出來る、が之に就ては又自分の生れた世界を考へねばならんとがある。即ち私が生れた世界は、私

に如何なる教育を與へたか、私の育てられた周圍はドンナ有様であるか云ふと、其周圍其教育は皆宗教的の者でした。即ち歐羅巴で云ば基督教の社會である私は其凡べが宗教的の事柄に包まれて居る即ち宗教的の文明國に生れ、其中に育てられたなのである。だから今日は私一個人としては、宗教を離るゝも道徳を維持する事が出來るが、絶對的に如何であるかと云ふ事を、斷言する事は出來ん。絶對的に出來んと云ふのは私は宗教的教育を受けたからである。然らば絶對的に宗教に關係無くても、道徳を養成し得るかと云ふ問題が起るけれども、其れは今日經驗する事が出來ぬから、何共答へ様がない。唯だ一般の人民には、宗教を離れて道徳のみを固持して行く事は出來ぬと云はねばならぬ。故に若し宗教を社會から放逐して仕舞へば其道徳も竟に倒ほるゝならんと私は信ずる。又彼の唯物論の如きは道徳と如何なる關係を持つて居るかと云ふに、彼は之を維持し得ざる者で即ち唯だ世の中には物質あり、勢力ありと云ふ如き說で吾々に道徳を強ふる事は出來ぬ。若し此の世界の中の吾々も、物質と勢力であるとすれば、私が如何に情慾を逞くするも、之に制裁を加ふる者は無い。唯物論は道徳を吾々に教へる事は、爲し得ないが、彼の理想論であると、宗教に近い丈けソレ丈け道徳を進めて行く力を持つて居る。

二、如何なる宗教在りや

甲、宗教の分類

今から宗教とは何ぞやと云へる問題中の一々條たる「如何なる宗教が在るか」と云ふ事を申したいと思ふ。此の事を論ずるには、先づ世の中に在る、宗教を順々に數へ擧げ而して其特色を簡單に陳べねばならぬ。然らば如何なる仕方で之を爲すかと云ふと、國に據ッて數へ擧げるのが、一番簡單である。即ち歐羅巴には斯樣な宗數がある、亞細亞には斯ふ云ふのがある、或は亞非利加にはこれ、濠洲（オースパラリア）にはあれと數へ擧げれば、極く單簡である。併し其れでは唯だ單簡な丈けで極めて學術的で無いと謂はねばならぬ。だから我々が世の中に在る宗教を數へ擧げ樣と思ふと、是非之を分類せねばならぬ。偖分類をするに付ては、如何なる標準に據るべきかと云ふ議論が續いて起る。併し此分類は私が今始めてする譯ではない。既に社會學者や宗教家等が試みて居る。或る者は正しき宗教と正しからざる宗教と云ふ樣に、單簡なる方法で分類して居る。即ち一ッの宗教は正しいが、他の者は誤ッて居ると分類したのもあるが、其れは甚だ不完全であると謂はねばならぬ、ト云ふ理由（わけ）は此分類法により て譬へば佛教者に向ひ、「何れが正しき宗教であるか」と問はゞ、必ず「佛教が正しくて他の者は誤謬である」と答へるに違ひない、又基督教の者に同じ疑問をかけたならば、「基督教は眞理であるが、他の者は間違ッて居る」と云ふであらう。故に此の分類は

學術上信用し難い者である。此の他猶之に類似した分類法がある、ソレハ天啓を受けた宗教と、自然的の宗教と云ふ樣に分けるのである。天啓を受けた宗教と云ふのは、即ち、其宗教の眞理は神の人に授けし者なり」と云ふの意で、自然的宗教とは、「神が眞理を人に教へたのではなく、自然に出來た宗教だ」と云ふ理由なのである、併し此の分類も甚だ誤ッて居る、私の考ふる所に據れば、如何なる低度の宗教にしろ、若干の天啓、神の示しと云ふ者が、其中に含れて居るに違ひない、ソレ在るが爲に宗教は生じて來た者であると思ふ。故に此の分類も甚だ要領を得ざる者で、要するに正とか不正とか、天啓を受けたとか受けぬとかと云ふ樣に分つのは、一つの前提を動かすべからざる者と定めて居て後のことであるが、是れは信じ難い。

他の分類法によると國民的宗教と世界的宗教との二ッに分ける。是れも甚だ簡畧な分け方である。國民的宗教とは、或る國民にのみ限られ其境界を越へて外に蔓ッて居らぬ者を云ふので、元は或る國民中に出來た宗教ではあるが、併し其國境以外に傳播した者を世界的宗教と云ふのである。之を日本の佛教と神道とに譬へは、佛教は世界的で神道は國民的の者である。ソコデ世界には世界的宗教が三ッある。佛教、基督教、「モハメット」教である——、併し此の「モハメット」教には世界的宗教たる性質は半分しかない、全くの世界的宗教とは云はれない。何ぜと云ふと、基督教は最初ユダヤに起ッたのであるが、其境界を越へて遂に世界に廣まつた。佛教も印度に起つ

たが、矢張其境域を超へて世界に廣まつた「モハメット」敎も其如くで、支那にも在れば亞非利加にもある、けれども其半ば世界的たりと云ふ所以は「モハメット」敎は元來亞拉非亞に起つたのであるが、傳播するにも、何時も亞拉非亞の習慣風俗を引き伴れて往つて居る。即ち其國風を脫する事をせんので、例へば支那の人でも此の信者になれば、アラビヤの風俗を學ばぬばならぬ。又今一ッは敎義ソレ自身の上から見ても、半世界主義と云はぬはならぬので、即ち彼の「コラーン」は「マホメット」敎の聖書であるが、此の聖書は是非亞拉非亞語で讀まぬばならぬとなつて居る。勿論歐羅巴では飜譯書もあるが、其れは其宣敎師の手に成つた者ではない、學術上の研究の爲め他の者の手に成つたのである。之に反して基督敎でも佛敎でも、他の國の詞に譯し用ゐられる樣になつて居る。斯樣な理由があるから「モハメット」敎には世界的と云ふ意味が欠けて居ると云はぬばならぬ。

此の國民的及び世界的宗敎と云ふとに就いては、近來物故した、和蘭陀の學者キューネンと云ふ人が、立派な書物を書いて居り、又其各自の性質、特色等も論じて居ッて、有益なる書物がある。併しながら此の分類にも欠點があると云はぬばならん。即ち國民的宗敎と云ふ內には隨分澤山な宗敎が混じて居る、だから倘ほ之を分類せんければならん。すると又非常の混雜が生じて來る。ソコデ私は國俗的宗敎及び個人的宗敎の二ッに分けたら宜しからうと思ふ。然らば國俗的宗敎とは如何なる意

味だかと云ふと、此れは誰れが其宗敎の開祖であるが、明かならぬ者を指し、又個人的宗敎とは、其開祖の判然知れて居るのを云ふのである。斯く二ッに分ければ極めて明瞭であらうと思ふ。併し爰に一ッ注意して置かぬばならぬ事は、國俗的宗敎にも開祖があつたのであるかも知れぬ。唯だ歷史に傳はらんから、之を穿鑿する事が出來ぬのかも知れんが、兎に角其宗敎の成り立て居る順序が、或る一個人の說敎によりて、其宗敎が出來たのでなく、國民の中に漸時形成せられて之を信ずるとが民俗となつて居る。此の種の者に名附けて國俗的宗敎と云ふのである。又個人的宗敎とは、如何なる者であるかと云ふと、前にも申した通り、是れは其開祖の明に知ッて居るのであつて、例へば佛敎は何人が唱へ出したかと云へば、其れは佛陀が說いたと判つて居る、又基督敎はエスが開始め「モハメット」敎はモハメットが唱へたので、斯く開祖の明瞭なる宗敎を、個人的宗敎と云ふのである、併し爰に開祖と云ふのは、其の人々が宗敎を發明したと云ふ意味では無い、寧ろ舊い宗敎の改革者と云ふのが正しい、即ち以前から其國民が奉じた宗敎を改革せんとした結果遂に新らしい者が出來上つた。例へば佛陀は最初から新らしい宗敎を立て樣と云ふ考へではなかつた。舊來の宗敎を改革せんとして說敎した結果、佛敎が出來たのである。又基督も「ユダヤ」敎を改革仕樣と思ふて敎を宣べたのだが、遂に新規の者が起ッた。又マホメットも其通り舊い亞拉非亞の宗敎を改革せんとして、新らしい者が出來た。即ち舊

來其國民間に行はれた宗教が基礎となり、其處に新規な思想が一ッ加はつて來たのである。其加はつたものは則ち其宗教の開祖が悟つたものなので、換言すれば天啓を受けて之を悟つたのである。然らば此の天啓は何處から來たか。天涯から聲があつて、命じたのであるか。否々然うではない。凡べて天啓と云ふ者は、何事に因らず其の心中に感じ悟ッて開祖は新らしい道を唱へたのである。

扨佛教も基督教も「モハメット」教も皆其開祖が判つて居る、儒教も道教即ち老子の教も同じ事であるが其開祖の人物が知ッて居らぬのは彼のツォロアステルである。此の人は何時の頃に生れて、如何なる働きをしたのだか他の人の如く判然して居らぬ。例へば孔子は基督以前四百七十九年に死し、老子は五百二十二年に佛陀は孔子と同年位に死んだ事が判つて居る。げれ共ツォロアステルに至つて確然分明て居らぬ。ソコデ我々が知ッて居る宗教者の中で、何人が一番古い開祖かと云ふと、其れはモーゼである、今日の神學者の說に據ると、此の人も自分が新宗教を造つたのではない、矢張舊宗教を改革したので、是れは基督前一千三百年の頃存在せし人である。スルト今日分明て居る開祖の中では極めて古るい人であッて日本の年代に直すと、神武天皇前七百年頃に當るのである。

今申した通り國俗的宗教と個人的宗教とに大別するが、此の國俗的宗教を再び二

ツに分ける。其一は其拜む神の組織が立つて居ないので、此れはポリデモニスムース」(Polydämonismus＝多鬼神教)若しくは「アニミスムース」(Animismus＝精靈教)である、此の神には特色と云ふものが一ッもない。幽靈然と彼處に現はれ此方に顯はるゝ神を拜んで居る宗教を總稱して、多鬼神教と云ふので、斯樣な宗教は通常は文明ならざる國民が信ずる者で、其の外に如何なる國民の奉じて居つた者が、之に屬するかと云ふと、古代のバビロン人又はアラビヤ人等の奉じて居つた宗教はこれである。又日本の神道の神も之れに屬するのである。何故神道を此の中に加へたかと云へば、其神々は若干人の性質即ち人格を持ッて居るに相違無いが、併し此の神道には所謂八百萬の神があつて、數へられぬ程澤山の神が拜まれて居る。だから其神各自の働きが判然と定まつて居らぬ。只祖先が神になつたと云ふ、所謂祖先崇拜教の如き者であるから此の中に入れた理由である。今一ッは即ち神々に組織がある宗教で。此の宗教も亦二ッに大別する事が出來る。如何なる標準に依ッて之を分けるかと云へば、即ち神學的になつて居るのと、なつて居ないのとの二ッにするのである。神學的になつて居ないと云ふのは、神の職務を定めたり又は任じたりする、坊主とか、神主とか云ふ者があつて、理屈から割り出したのでなく、自然に神の性質も出來れば其職も定まつて居るのである。ソコデ此の神學的でない國俗宗教を復た其の所屬の國民によつて三ッに大別仕たら宜からうと思ふ、其一ッは「インドゲル

マン」人種なので古代の印度、希臘、羅馬等の人民が信じて居つた宗教である。第二はシリヤ人、アッシリヤ人、フェニチヤ人等即ち「セッチック」人種の奉じて居ッた宗教である。第三は其他を總括するので、古代の支那人の宗教とか又亞米利加の古るい宗教即ちペルア人とか、メキシコ人とかの奉じて居つた者である、神學的になつて居るのは、即ち坊主とか神主とか、或は神學者抔が居つた、其れ等が種々才覺した宗教で、是れは埃及人の奉じて居つた者及び印度の婆羅門教である。ソコデ此の神學的になつて居る宗教には特色がある。是れは哲學上の思想を大分に含んで居るので、勿論多神教で種々の神々を拜みはするが、此の多神教の裏面には凡神教が這入ッて居るのは、即ち坊主とか神主とか、或は神學者抔が居つた、其れ等が種々才覺した宗教で、是れは埃及人の奉じて居つた者及び印度の婆羅門教である。ソコデ此の神學的になつて居る宗教には特色がある。是れは哲學上の思想を大分に含んで居るので、勿論多神教で種々の神々を拜みはするが、此の多神教の裏面には凡神教が這入ッて居る。固より凡神教の考へは一般の人民には解らんけれ共其宗教を論ずる者即ち神學者には、其考へが盛んである。

次に前に申した個人的宗教、即ち分類の第二に屬する者の事を云はんければならん。是れは「印度ゲルマン」人種の中に出來た者が二ッ在る。其一ッはツォロアステルで、今一ッは佛陀である。又「モンゾリア」人種に屬する者とは——若くは支那人に屬する者とも云うても宜しい——者も二ッある。それは孔子と老子である、併し此の孔子や老子の說いた事は宗教であるか無いかと云ふと、是れは一問題である。併し何故之を爰に入れたかと云へば、孔子の教へた所は、道德倫理のみであるが、其說いた所が丁度祖先を崇拜すると云ふ宗教的基礎の上に立ッて居る倫理であるから、其點より見

れば宗教と云ふても差支無いと考へる。勿論孔子は神とか佛とか宗教に關係ある事は言はなかつたので、御承知の通り「鬼神は敬して之を遠ざく」と云ひ、又「生を知らず焉ぞ死を知らむ」と云ふて、宗教に屬する事は擯斥して居る。又た是等の開祖が其教へを說いた時分には餘り哲學過ぎた爲に、後世の人は之を解する事が出來ず、其れが爲め儒教は極く通俗な妄信と一所になつて居るのは支那今日の情態である。又今日の支那人民の中に行はるゝ宗教の中で一番妄信で無學なのは何であるかとふ云ふと、彼の道教である。次は「セミチック」人種の中に起つた宗教であるが、此の人種は實に宗教思想に富んで居つた。——一寸おことわりをして置くが、此の人種の中に起つた猶太教や基督教の事は、後に細詳く論ずるから、此處では略さうと思ふ。——又マホメットの事に就き、一寸申して置くが、此の人は宗教を創立した者の中では、一番近世に屬するので、其教へは二ッの特色を持ッて居る。其の一ッは一神教である。今一ッは世界的宗教に屬するとである。しかし此の一神教は何邊から來たかと云ふと是れは「ユダヤ」教或はモセスの宗教から出たのであるからマホメットが發明して、亞拉非亞から起つたのではない。マホメットは神のとをアラーと稱して居るが、其神に關する說の大半はユダヤの神から出たのである。けれ共其教を組み立てたのは、固よりマホメットが自ら考へ而してそれを說いたのである。尙一ッの特色は世界的の性質を持ッて居とであるが、併し此のとに就ては前にもお話をしたが此

の「マホメット」敎の持てる世界的性質は、一躰國民が殺伐で他の國を略奪するとを好む性質があるから、其れに伴つて自然に出來た性質である。

乙、宗敎之統計

今迄は宗敎の分類に就て宗敎の種類を色々お話したが、此の事を餘り委敷論ずることは、此處で爲難くもあり又私の講義の大躰に適合せんから先づ玆に止め、今から宗敎の統計のことを少し計りお話仕樣と思ふ。偖て「此世の中に在る宗敎の中で一番信者の多いのはどの宗敎であるか」と云ことは人の毎々問ふ處で又之に答へて「佛敎である」と云ふのも通例である。が此統計は實に當てにならぬ。此統計に據ると支那人は大概佛敎信者にして計算してある。併し私は從來果して支那人が皆佛敎信者であるか疑つた。依て此事を問ひ合せた所が、支那に三十年の間も在留して居る、宣敎師ドクトル、ファーベル(Faber)と云ふ人の答へに『お前が支那人に向つて「支那人は儒敎の人であるか」と問ふて見い。然うすれば彼は必ず「自分は儒敎信者だと答へるにちがいない。併しお前が「佛敎信者であるか」と問ふたらば「然り」答ふる者は、佛敎の坊主のみで、其他は必ず「否な」と云ふに違ひ無い』と云ふた是れのみならずハッペル(Happer)の云ふ所に據ると支那人中佛敎を信ずる者は、凡二千萬程しか無いとの事である。支那人を三億五千万の人口として、此中から二千万を引いて見ると三億三千万は儒敎信者であると云はねばならぬ。又通常の統計では日本人も悉

く佛敎信者に算へてあるが是れも如何であるか疑は敷い。尤も私がいつも不思議に思ふのは、日本人は何の衝突も無く二つの宗敎を奉じて居るとである例へば小供が產れれば、神社に宮參りを爲し、人が死れば坊主を賴んで、葬禮をしてもらう。是れは實に不思議です。が統計を取る時に當つて、日本人は悉く佛敎信者とすべきであるか、或は然らずして其中に神道者が如何丈けあると仕樣か。眞とに統計を取る事は、困難な業で正しくは出來まい。又モニヤ、ウィリアムス(Monier Williams)と云ふ人が、新に取つた統計に據ると、一億万丈け佛敎信者がある。尙ほ是れに日本人を五千万として算へた處が、一億五千万位しかない。又歐羅巴で宗敎學者が此の事を論ずる時に作る統計例之比較宗敎學者のソーセー(Saussay)のを見ると五億萬の佛敎信者がある。シテ觀れば世界の人口の三分一よりも多い數になる。それから基督敎信者は四億三千万、「モハメット」敎徒が一億二千万、猶太敎徒が八百万、其他の宗敎に屬する者の總計二億三千万と云ふ樣になつて居る。然し之をモニヤ、ウィリアムスの統計に正して見ると佛敎徒の五億万から澤山引き去らんければならむ。すると基督敎信者が四億三千万、印度敎を奉じて居る者が、二億万であるは儒敎者であつて、前云ふた通り三億三千万と云ふ數で、一番多くなる。其次る、併しウィリアムスのとソーセーのとは、少し違つて居るが、ウィリアムスのでは一億へば佛敎信者は一億ばかりになり「モハメット」敎徒が八百万(ソーセーのでは一億

二千万とあるが)で其の他を合して三億程ある。勿論から云ふと基督信者は世界人口の三分の一、儒教徒は四分の一、印度教を奉ずる者が七分の一、と云ふ様な統計になる。勿論斯様な統計は、確乎とした事を擧げ難いから、若干の誤謬があるかも知れぬ。又佛教信者の數も計算の仕様で大に違つて來るが正確には私が勘定する事が出來ぬ。兎に角斯かる統計が出て基督教徒を多數だとすると、それで基督教がエライと云ふ事を論結する様ですが其んな考が私にあるのではない。數の多いのを以て眞理とする事は出來ぬ。しかし注意すべきことは基督教信者の數は、今より五六百年前迄は眞に少なかつた。けれ共其數が年々增加して來た。が他の信者は數が減じて行つた。他の者は衰へるが、基督教信者は增して來た。是れは見落す事の出來ぬ現象である

丙　總ての宗教に共通する要義

前に述へた通りで宗教の種類は隨分多いが。此の多い宗教の中に如何なる事柄が共通して居て、どの宗教にでもあるかと云ふ事を、少し考へて見た。い。扨どの宗教にでも必ず神と云ふ者がある、其れは一神のもあり、或は多神なのもあらうが、神は是非在る。又此の神は唯だ男性のみでない、之に對する女の神もある。又精靈、鬼神の様なものもある。此鬼神とは、如何なる性質の者だぞと云ふと、自然の靈、即ち山川河海等の靈とか、又は祖先の靈で此の自然物を鬼神と見るのは何故かと云ふに、其物に

鬼神が居ると云ふ考へから出たのである。更に一歩を進むると種々なる宗教中に屢々見る所の自然を神として拜する事となる。即ち之を拜する理由は自然力を神と見るからなのである。例へば雷は自然力である、けれ共其れは何か大きな音をさせる者即ち人間見た様な者があつて働作をするのだとか、或は電光の如きも、人の様な者が居つて石を投げるとか、物を擊つとかする拍子に、光が出ると云ふ様に考へた。其他風も自然力であるが、是も或る者が風袋を持つてゐて、吹かすのだと考へた。此の如くに、自然の力は人間見た様な者があつて其れが働かせて居ると考へ、而して之を拜んで居る。此の考へからして所謂ミイテン(Mythen)即ち神話が出來たので、其れと云ふは自然の種々な變遷の順序を人間的な神の歷史として物語る所の者である。神話は諸國に似た様な話が多くあるが、併し之に據つて元は一つであつたのが、漸々諸國に渡つて來たのだと、結論する事は出來ぬ。今何人も能く知つて居る話を一ッ二ッ云ふが東方から一人の豪傑が起ッて來て、十二の國中を渡り、而して其處で種々な働作を仕たとか、或は十二の大事業をして其後西の方の國へ行き、其處で火炙りに遇うて死んだと云ふ様な話がある。是れは自然の出來事を人間的の神話にしたのであるが。之を考へると、東から出た豪傑とは大陽なので、十二の國に往つたとか事業をしたとか云ふのは、天文の十二宮を順々に渡ッて行いた事を云ふので、其者が火炙りに遇うて死んだと云ふのは、西に大陽が沒する

時には、所謂夕燒で西天が赤くなるのを譬へて云ふたので。猶例を他に取ると、一ツの善い柔和な神があり、又之に對する悪の神があつて、其柔和な神が悪の神の爲に打負かされて、死んで仕舞ッたが、やがて復活したと云ふ神話がある。是れも亦た自然の有樣を神話して話したので、其柔和な神と云ふのは春夏及び秋の事で、其れが實に非常な寒さに遭ふて、其れに打負かされて仕舞ッたが、併し復た春が復へッて來て芽が出たり、花が咲ひたり、好き時候になる之を復活と云ふた。即ち自然の順還を說いたものだ。かく自然界の有樣を神の物語りにするのを「ミィテン」即ち神話と云ふのだ。併し何處の神話にも通じて居るのは、其れに道德の思想が無いとだ。さらばと云ッて不道德な事のみでも無いが、概して云へば善い者もあり、悪い者もある其理由は元來自然の力は善い事をする時もあれば悪い事をする折もある。譬へば火に付て云ふと或る時は必要で善い働きをする、け れ共亦或る時には人の害になる樣な事をする。だから火の神を、道德的に考へて行く事は、到底出來ぬ。

右の通り神話は道德的でもなければ不道德的でもない、ト云ふのは自然の力が其れと同じであり、此の自然力を神にしたのだから、之が道德的になつて居らぬのは當然である、又此の自然を崇拜する中で、殊に妙なのは動物を崇拜する事で、是は如何なる所より來て居るかと云ふと、今日の學者も未だ其解說を得ない。或は動物は猛いから、拜む樣になつたのであらう、即ち龍の如く獅子の如き者は猛勢だとか勇

敢だとか云ふて尊ぶから來たのである其云ひ、或は又或る民族は自分の祖先が動物であつたと云ふ說を持ち、而して其祖先を神の如くに考へる所から、動物を崇拜する樣になつたのであると云ふ說もある。崇拜する神の形狀を製して之を拜む習慣もある。此の神像には或は人間の形狀をなして居るのもあるが、人間形の方が多い、併し其れは通常の人間よりも大きく造つてあるとか、又は手、足、眼等の如きものゝ數を幾倍にもしてあるのが普通である。其れは人間よりも勢力が强く勝つて居ると云ふ事を示す爲に、左樣に造つたのである。其の中にも極く妙なのは、神の力を借りて或る業を行ひ、又は或る目的を達せんとする事で魔術、卜易の類である。彼の門に神形を書いたのを貼つて置くとか、或は何かの名を書いて貼つて置く抔と云ふのも全し事で、又た社寺等には彼の神籤と云ふ者があるが是等は皆な神慮を測り知らんとする手術である。尙宗教の中にて屢々見る事は犧牲即ち生け贄を捧ぐることである。是は宗教上の儀式を執行する爲めの者であるが、何故斯かる事が起つたかと云ふと、是れには二つの解釋がある一つは儀式を仕たり、犧牲を供へたりするのは、神の機嫌を取り、其れで自分の利益を得んとするのだ、即ち利己主義から出たのだと云ふ解釋である。併し斯の利己主義的解釋の外に、猶一つの解釋がある、其れは犧牲を用ふるのは、神と一緒に食事を爲し、自分も神の仲間に入るのだとの考へより出た者で、或は神の爲さる所爲の眞似を

すると云ふ考もある、例へば水を濺ぐ儀式がある、是は神は雨を降らせ、水を濺ぎ給ふが故に、人間は其補助をすると云ふ考へから起つたのだと、解釋する事も出來る。此の他祈禱と云ふ事もある、是は宗教上の所作の中で最も大切な者で、若し此の祈禱無くば、宗教は成り立たない。故に基督教では之を重んじて居る。自己の求むる所を願ひ或は感謝を言ひ表はす爲に祈禱をするのであるから、宗教上實に大切である、又宗教上屢々見るのは、格段に神聖なる時、場處等を定めるとで、其は或る森とか山とか家とかは、特別に神の氣に入つて居るから、其處に行くと、神の働きが特に表はれると云ふのである、又此の神聖なる時と云ふのは、一ッは自然から取り、一ッは歷史から來たので、或時は殊に國民が神に向ッて感謝すべき時だと云ふのである。ソコデユダヤ人民の中で習慣になつて居たのは、歷史より來たのであるが、基督教のも矢張歷史から來て居る。又宗教あれば、其れに結び附いて司祭とか僧侶とか神主とか云ふものがある。又此れには色々な階級が出來て、高いのもあり低いのもある。

前にも申した如く、宗教は何時でも神の啓示即ち天啓を受けたと云ふ事を主張する。そこで殊更に神の啓示した言葉を書き載せた書物が出來て居る、即ち聖書がある。是は支那で云へば經書、佛教では「スートラー」、基督教では「ビーベル」である。それから又其天啓を學術的に說明して來る、其れが爲めに宗教には神學が出來て來る。又

宗教には信徒の團躰が出來る、即ち教會又は其種類の者が設立せられて居る。尙又之あるが爲めに一種の倫理が行はれて來る、即ち其宗教の眼から見ると或る行爲は善いとか悪いとか定められるのである。之を定めるには或は會議によりてしたのもあれば、然らざるのもあるが、會議的に定められたのは、倫理上より考ふると不都合な事でも、是は神の氣に入つて居るから宜しいとした事もあり。又たとへ倫理に合ふた事でも、之れは神の慮に叶はぬから悪いと考へた事もある。或は倫理上善でも悪でもないとを悪としたともある。例へば水を火にかけてはならぬと云ふのはそれである。然し之が發達して來ると眞に倫理上より見て、悪い行爲は神の氣に入らぬ故、爲すべき者で無いと云ふ樣になつて來る。此れは倫理的宗教の場合である。而して多くの宗教中、倫理と密接して離す可らざる關係をなす宗教は、基督教に若く者無しと、私は考へる。

丁、宗教の主なる形狀

今からお話するのは宗教の形狀と云ふとであるが、尤も其中唯だ主なのをつまんで述べよう。扨主なものと申しても此處に彼樣な宗教が在る、彼處に斯かる者が行はれて居る杯と、歷史的に云ふはけではない。すべての宗教を通觀した所で其形狀を區別すると、どう云ふ有樣で宗教が成り立ッて居るかと云ふとを陳べ、其々之に定義を下さうと思ふ。勿論宗教の進化發達の有樣も順序も解かる樣に下等な者か

ら段々高等なのを述べる積である。

メコデ之を五ツに別ける事が出来ると思ふ。第一は「アニミスムース」(Animismus) 精靈教又は「ポリデモニスムース」(Polydämonismus) 多鬼神教。第二は「フエッチシスムース」(Fetischismus) 拜物教。第三は「ポリテイスムース」(Polytheismus) 多神教或は「ダアリスムース」(Dualismus) 二神教。第四は「ヘノテイスムース」(Henotheismus) 唯一神教。第五は「モノテイスムース」(Monotheismus) 拜一神教。第五は「モノラトリー」(Monolatrie) 拜一神教である。

此の五ツに分けた宗教の形狀の中で、最も一般に廣がつて居るのみならず、最も古いのは多鬼神教である。多鬼神教では死んだ人間であるか、或は外の不思議の躰の者か、其れは何でもいゝが、其者がある物躰中に住むで居ると考へた。其物躰と云ふのは何でもかまはん、木石、山川、何むでもそう云ふ物の中に神が住居し居ると信むじて之を拜むだものである。然し多鬼神教の性質は、此の神に其々人格が十分に備はつた者と考へなかつたとである。

又「アニミスムース」即ち精靈教は何んな宗教かと云ふと、人躰を肉躰と靈魂とに區別するとをして、此の肉躰から離れた靈魂を拜む宗教である。然らば其靈魂と肉躰とを、如何にして人間が分別するに至つたかと云ふと、恐くは夢から起つた者であらう。夢の中では吾々が種々な事を見たり聞いたり、爲たりするが、其夢でするのは、那邊で遣つて居るかと云ふと、床褥の中ではあるが、然し妙なとがある。例へば今私

は日本に來て居るが、夢では獨逸に往つて、種々な事を遣るとがある。扨翌朝起きて私は妻に向ひ「自分は昨夜獨逸に往つた」と話したらば、妻は笑ツて「昨夜貴君は此處にゐたでは無いか」と云ふに違ひない。又自身でも醒めて見れば、獨逸へ往つたとは愚はないが之を未開の人間に當て嵌めて考へると、翌朝起きて「獨逸に往つた」と云ふ其時に、妻が「お前は昨夜此處に居ツたではないか」と云ふと、忽ち前後矛盾が起る、ソコデ再び考へて「成程吾が躰は此處にゐたに相違ない。然し獨逸に往たのも誠だ、スレバ是れは身躰の中に一ツの者が在ツて、ソレが獨逸に遊んだのに違ひない」と考へる。是れ肉躰と靈魂とを區別する階段を生じたので、其れより又人間の靈魂は死後にも存在すると信ずる樣になツたのであらうと思ふ。今私の親は死んで居るけれ共夢には其形容を見たり、或は談話したり、又は種々なる事を共に仕たりするのは度々である。併し親の肉躰は如何して居るかと云ふと、最早腐敗て居る。ソコデ「昨夜は私の親が來てソレと談話を仕た」抔と云ツたならば、今の人は皆な之を笑ふに違ひ無い。併し太古の眞に未開の時代に、斯かる事があつたれば、是は眞に親が來たのでなければならぬと考へる。併し親の身躰は既に亡くなつて居るから來樣がない。すれば來れのは親の躰中にあつた靈魂が來たに違ひないと考へて、身躰が亡くなつた後にも、靈魂は存在すと信ずるに至つたのである。尤も晝に夢中のみ斯樣なとがあると信ずるのみならず、目の覺めて居る時でも矢張斯樣な事があると信ず

る者は澤山ある、即ち怪物が出るとか、幽靈が出るとか云ふて、之を見たと云ふ人もあり、其れを信ずる者もあるのはそれだけれ共是は一寸見ると智慧が足らぬからだと思はれるが、然うでない、哲學の一派では幽靈抔を信ずる輩があるので、彼等は實に學問をして居るが、又或妄信を持ッて居る、即ち學問上で云へば、彼の「スピリチスムース」である。私は斯かる事を信せんが、此の死躰を離た靈魂は、如何なる勢力を持ッて居るかと云ふに、彼は肉躰を離れたが爲め、反て自由自在なことが出來るから、中々強ひ勢力を持つて居ると信仰する者もあるのみならず親や、祖父は其生前より既に尊敬した者だから死後にも其靈魂を崇めねばならぬと考へて、之を拜するので、其他師匠とか主人とかは生存中、自分が殊に敬服恐懼せし者故、死んだ後も矢張尊敬せねばならんと考へる。又斯樣な事から靈魂の社會に階級を附ける事も始まつた。又殊に自分と近しい者、即ち我が家族の者などの靈魂は特別に崇拜するのは人間自然の情である。自分は他の人に對しては余り利害得失を感ぜざりしも、我が家族とは密接の關係を持つて居たから、死後も特別に尊敬せねばならぬと云ふ點より、祖先崇拜教が生じて來た。即ち死者の靈魂を拜するのである。又之と同じ關係から死人を汚れた者だと信仰するとをも說き明かす事が出來る。即ち死人があれば家屋が汚がれるとか、之れに觸るれば身躰が不淨になるとか云ふのは、宗教上一ッの信仰であるが、これは最早躰中に靈魂が亡くなつたから、遺ッた骸は腐れて

仕舞ふ、故に我が家族たりとも、腐るべき死者は、不淨な者である、併し其れより出た靈魂は外で生活して居るがら、是れは崇拜すべきである。が遺躰は不淨であると信仰した第二の宗教の主なる形狀は「フエッチシスムース」即ち拜物教である。もとは拜物教が宗教の最初の形狀であつたと云ふ說を立てた者もあつた。けれ共今日は其の誤謬なる事を知たから、最早有名な學者の中で斯かる說を唱ふる者は無くなつた此の拜物教と云ふ事に「フエッチシスムース」と云ふ語を當てたのは、如何なる理由かと云ふに、或人の說に據ると、是は元來佛蘭西のデブロス(De Brosses)と云ふ人が斯の學術語を造ッたので其れには斯う云ふ理由がある。往昔ホルトガル人で野蠻の國を諸處經廻て、其見聞した事を書いた者がある。即其旅行記中に「野蠻の國民中には宗教上に一種妙な風があッて、何に限らず物を取ッて家の內でも或外でも其れに構はず之を置いて拜む習慣がある。例へば石片でも衣服の破布でも何でも嫌はぬ、何故ソンナ物を拜するかと云ふに、其物の中に魔力が這入ッて居るから、之を崇拜せば、必ず利益があらうと信じて居る」と云ふことが書てある。此の魔力と云ふ詞をホルトガル語で「フエッチッソー」(Feitiço)と云ふから、ソコデ此の「フエッチシスムース」と云ふ字を造へて來たのだ。是れ即ち此語の起原である。偖て此の拜物教の何者なるかを說き明すには例を擧げて云へば、極く單簡ですぐ其性質が解るから一寸其れを話さうと思ふ。此れはレッキーと云ふ人か言ふて居るが、或る船が歐羅巴を出

て野蠻國に行き、某港に泊つた、所が其船中に、一つの古い錨が載せて有つた、然るに或日其野蠻國の酋長が、自分の屬徒を大勢伴ふて、船に來り彼の錨を奪うて去つた。スルト不思議な事は錨を奪つた翌日酋長は急病に罹つて死んだ。メコデ土人が思ふには、彼の死んだは錨を奪つたからだと。吾人の眼より見ると、錨を奪へる事と、死せし事とは無論何等の關係も無き譯である、けれ共野蠻人の論理では、左樣は考へなかつた或は基督敎で云へば、其れは大惡業を爲した故、神が之を罰する爲めに殺したのだと見るかも知れんが、野蠻人の考は然うで無い錨の中に魔力が居つて、酋長に報いたと見たのだ。是は何故左樣に見へるのかと今一度考へると、爰には宗敎と哲學が結合した形蹟を持つて居る、尤も宗敎と云ひ哲學と云ふても、孰も極く初歩ではあるが其哲學はドンナのかと云へば、原因結果を極めるとで、即ち錨を盜んで持つて來たが、次いで酋長が死んだ、其死は錨を持つて來た爲めで盜むだは原因、死んだは結果だ。然し何故盜んだ爲めに死んだかと云ふと、此處が宗敎の說明で、魔力が錨の中に在つて、其れが殺したに違い無いと信じたのである。即ち死んだ結果の因りて、其原因を求め、而して死せしめた者は神であると考へたので、其の如く人を殺す樣な恐ろしい魔力を持つて居る者は、猶外にも非常の事を遣るに違ひない、寧ろ之を拜むに若かずと思つて彼の野蠻人は錨を拜んだ。拜物敎の成り立ちは先づ斯の如きものである。拜物敎と多鬼神敎との區別を云へば、一方は自然の物躰を

拜むけれ共拜物敎では、一度人間の手の細工を經た物を拜むのである。

拜物敎は右の通りであるが、尙其意味を擴めて云ふ人もある。其は如何なる說かと云へば、佛敎抔では種々の物躰を神の如くに思ひ、其中に魔力が居ると信じて拜むで居るとがある。例へば是れは佛の齒だとか、或は坊主とか聖人とかが着て居た衣服である抔と、ソレ等を一向尊崇する。が其理由を尋ぬると、是は古の非凡の人の遺物だから拜すると云ふに違ひない。基督敎でも同じ事で、是は耶蘇の懸つた十字架の破片だ抔云うて大に之を尊敬し、其前で遣れば祈禱がよく聽かれると云ふて、信仰する。尤も若干の學問を有する者は、唯だ非凡なりし古人を敬するのだと考へ、樣が通俗では其齒、爪、衣服等の中に、魔力が在ッて拜めば願ひを聽かれるとか、非常な御利益があるとか信じて居る。之を以て觀れば純然たる拜物敎である。これにも原因結果の思想及、宗敎上の思想が一に混交して居る。佛敎や基督敎抔が斯樣な形狀になつたのは、昔の宗敎の形狀に近か附いたのであるが、昔の拜物敎は宗敎の進歩の最初である、今のは宗敎が腐敗した爲め此の樣になつた區別がある。

次は多神敎である。是は如何なる者だかと云ふに、特別なる性質を有し、自然の現象、自然の物躰と結合せる神々を崇拜するのである。而して其の多鬼神敎と異なる點を擧くれば、前者の神は如何なる自然の現象物躰とても結ひ附くが、多神敎の神は格段な自然の物躰、現象等と結び附くと考へる。即ち珍奇なる物又は極く大切なる

物で、殊更或る一定の性質を持てる物と結合するのである。例へば大陽、嵐、雨抔の如き格段の現象中に在る神を崇拝むので、詳く云へば大陽は天に在る神が大きな車を挽いて居る、其車には一ッの明鏡が懸ッて居る所より、非常の光を發するのだとか、或は嵐は疾く走る神だとか、又雷は天神が矢を射るのであるとか、劍を振るのだとか槍を使ふのだとか想像して神と自然物とを結合し、崇拝するのである。斯の如く多神教は格段なる現像特色を有する神を信拝する者で、多鬼神教が山川草木等の幾千万とも數知れぬ者の中に其々神が在ると考へるのとは違ふ。併し多神教にも種々なる神あるが、何故に斯く多くの神を區別するかと云へば、それは神の作用の目的によつて分けたのである。又其神の數も多鬼神教よりは少い、固より實際では此の多鬼神教と多神教とは並び行はれて居るから、宗教が混雜する、此の二教の分ちは斯様になるのである。併し大陽、嵐、雨等一種特色ある者ば區別し易いげれ共天地の如く漠然たる者に至つては、然う行かない。茲に宗教の一進歩として、神々の中より男女兩性を分かつ事が起つて來る。即ち此の神ば男子だとか、此の神は女子だとか云ふ扨て此區別を附けたのは何に因るかと云へば、強力なる者は男神、然らざるは女神となつて居る、只男神女神と二つに分つのみでは未だ足らない。已に男女兩性の神があれば、其々特別な性質及び相互の交際を想像する様になる。ソコデ神の歷史が起つて來る。即ち此の兩神相寄つて結婚するとか、子が出來るとか云ふこれも穿鑿して見れば、元來は自然の現象から出た神々のことで、自然の現象を眞寫して神の歷史としたのである。例へば地球を女神の如く考へ、支那でも地は陰なりと云ふ。女は子を產む此の地球も子を產む其は如何んな子だと云へば、例へば植物就中人間に必要な穀物かと豆とかの如き物を產むのである。併し女神一人では其れが出來ない、人間でも男女兩性があつて、初めて子を生む如く配偶男が無ければ、神も產む作用が出來ぬ。故に此の男神は大陽だと考へる。大陽は萬物を照らし其れが爲めに植物も發育する、之を考へて地に配する男神であるとも云ひ、又大陽は晝は出て働いて夜は寢てしまう、男子も晝の間は外に居て働いて居るが、夜に入れば家に歸つて妻の側に寢る、其れが爲に子が出來る双方同じ事と考へた。或は男神を天とする事もある、即ち天は雨を降して地を濕ほす、爲めに植物が發生する之を男女兩神相寄つて子が出來る事に譬へた。通常大陽は男性と考へて居るが、獨り破格なのは日本の神道で天照大神が女性であるのと、獨逸で大陽を女性にして居るのである。けれ共其他國の語では皆之を男性として居り、之に對して月は女性即ち女神としてある。又此の多神教の一部類として、所謂二神教の宗教がある、此の二神教には二ッの分ちがある、其一は男女兩性ある爲に此の宗教が出來て居るのと、今一つはペルシヤ人中に行はれて居たので、其れは善惡の二神を立て居るのである。是は進歩した者で、殆んど多神教中に算入すべき者ではない。多神教の特別なる

性質は、神の處作に不道德があることで。何故神が不道德な事をするかと云ふ、通常二ツの理由があるので、即ち自分の勢力を濫用するため不道德な處行を爲すのと、男女兩性間に於て淫するから不品行になるのである。元來多神敎は自然の現象を寫した者であるが、自然の現象には固より善も無く惡も無い、然し之を有りの儘に正しく寫して、神々の仕た事にすると、即ち之を歷史にすると不品行、不道德となる者がある。だから多神敎は道德的になつて居ない日本の古事記を見ても、此の例は御承知であらうと思ふ。

次に進步して來る宗敎は、一神を拜む者である。此れも亦二ツに區別せねばならぬので、其一は「ヘノテイスムース」即ち拜一神敎で、今一ツは「モノテイスムース」即ち唯一神敎である、併し是は元來マックスミュルレルの術語である、或は他にはミュルレルの說を攻擊する學者もある、兎に角ミュルレルは印度の書に在りては神を拜む人が拜む神に對して、毎時汝と云ふ語を用ゐて居る。即ち汝に斯かる事を願ふとか、汝の德を讃めるとか單數の詞を使ッて、只一ツの神しか無いやうに云ふて居るけれ共、これと同時に他に神がないとは云はぬので、例へば今日某神に向ッて願ふ時は、汝と云ふて其れのみを指して拜むで居るが、又明日になると他の神に對して讃美する時には、矢張り汝の一語を使ッて拜して居る何となれば其は或る一神を拜する、其場合に當ッては、他に數々神ある事を知ッて居る。けれ共其拜する場合には、一ツ

の神しか拜んで居らぬ。此の種の宗敎に「ヘノテイムース」即ち一神を拜する宗敎と云ふ名を附けたのである。マックスミュルレルの說では、斯の中より眞に唯の神を拜する宗敎が發達して來ると云ふのである。さりながら歷史上より見ると發達しては居らぬ。是は印度の宗敎の形狀であるが、尙他の形狀もあるのでそれはセミチック人種即ち亞拉非亞、イスラエル等の民族中に起つた宗敎で、即ち是等の者は吾が信ずる神は一つの外あらざれども、其他に澤山の神があるとは考へて居た。即ち他國人は他の神を拜する者と考へて居た。此の我一民族が拜む神は一つであると思うてゐたのをも矢張り「ヘノテイスムース」と云ふが。併し印度人のとセミチック人のとは理由が違ふ、其異なる者に同じ詞を用ゐるのは、宜敷無いから、一つの神を拜む宗敎、即ち「モノラトリー」と云ふ語を使ふ方が適當だと云ふ說もある。此の一神を拜む事は、明かにセミチック人中に起つた。其れは神を呼ぶに使ふた名稱に由つて知れる、例へば神を主とか君とか云ふ其語で知れる。是れより漸々進步して詰り天地間には只一つの神しか無い、即ち唯一神敎「モノテイスムース」と云ふ者が起りたのである。其起つた處は猶太で、此の事は此の人民の特色である。如何なる有樣で起つたかと云へば、基督前に出た豫言者が、經驗に因り歷史に因り、眼界の廣まるに因つて詰り此の天地間には唯一神しか無いと云ふ思想を抱いて來たからだ是は丁度基督前七百年頃、日本では神武天皇の時代に當つて居る。彼の豫言者がかき遺した書

籍に據れば彼等は以前の人とは違つて、天地間には唯だ一神のみあると云ひ、他の神を名附けて無き神空しき神と云うて居る。斯様な發達は孰れの國民中にも生じて居らぬが唯イスラエル人民の特色として唯一神教が起つたので、此の一神教こそは基督教の眞意である。

前に述べた「アニミスムーズ」より宗教發達の階級を考へて見ると、發達の極點に達したのは、唯一神教で、即ち最終は基督教で、基督教は宗教發達の階級を考へて見ると、發達の極點に達めて居る事が解る。其他の者も發達はして居る、或る點に於ては然うであるので、總躰の上で、宗教上の總ての事柄を綜合して發達したのは基督教である。總ての宗教の發達は基督教で合して居る。

四、基督教とは何ぞや

「基督教は宗教なり」と云ふ標題の下に、四ッの疑問を起して置いたが、其の中で、宗教とは何ぞや、宗教は在り得べきか、又必要なるか、如何なる宗教が世の中に存在して居るかと云ふ三ッに就ては既に論じて、しまつたから、此の度は其第四、即ち「基督教とは何ぞや」と云ふ問題に就てお話を仕様と思ふ。元來基督教とは如何なる宗教であるかと云ふことを論ずるの講演全躰の目的であるから此の事は出來る丈け委敷述べる積りであるが、併し此處では種々な宗教を論ずる中の一項として、基督教とは如何なる宗教であるかと云ふことを論ずるのだから極大要のみを摘んでお話しをする積りである。尤も是れで基督教の大躰は、お解りにならうとは云ふが、其細かなとは後で十分に述べるわけである。

偖て摘んで云ふと、宗教には四個の要點がある。第一、神、第二、人間第三、神と人間との關係、第四、人間と人間との關係である。此の四ッには又其々學理がある。其學理は宗教上缺ぐべからざるもので、如何なる宗教にも是れがなければならん。基督教でも亦是れが必要である。

甲　神

第一神に就て、基督教は如何なる考へをなして居るかと云ふに、基督教は唯一神教である。抑も世間に存在する多數の宗教には、神が澤山にある、男神あれば、女神あり、其他色々あるが、基督教では、世の中に神は唯だ一ッあるのみで、其外に神はないと云ふ說を採つて居る。

勿論「ユデヤ」教或は「モハメット」教も唯一神教ではあるが、其の觀念は基督教には及ばない。而して其神の性質は絶對的であると云ふのである。然らば其絶對とはドンな事を云ふのか、其れを委敷云へと問ふ人もあらうが、人間の思想で絶對とは斯様な者だと說き明す事は、出來得可らざるとである。併し强て其れを說明すれば、絶對とは人間の如く限られて居らぬ、即ち無限であると云ひ得る丈のものである。然らば、如何に限られて居らぬかと云ふに、神は自然に因て限られて居らず、自然の上に

立て居る。此自然は則ち神の造れる物で、神は造物者なり、と云ふのは、之れが爲である。

斯く神は造物者であると云ふと、次で然らば神は自然を唯だ一度造つたのみで、其後は毫しも之れに關係しないか、との問ひが起るが、決して然うでは無い。既に造つた物を放棄せず、常に之を維持して居るばかりでなく、彼方此方に働かせ支配して居るのである。然し神の支配は丁度時計師が時計を造り、旨く其れが動て行く樣に工夫はするが、時々は「ゼンマイ」を卷いたり、針を彼方此方に動したりする樣にするのではない。神の自然を維持し、之を支配するのは、外から手を出してするのではない。自然其れ自身が神の意に隨つて運行して行く樣な設計がしてあると、基督敎では考へる。又神の働きは世の歷史の上、其變遷の中に大に現はれて居る。又神は間時や、空間によりて、限られて居と云ふ事がない。吾々人間は此方に居れば、彼方には居らぬ、此處に在れは彼處に無い、けれ共神は場處又は時間に就て限られることのない絕對者である。併し諸君が基督敎の說敎或は祈禱の詞に「天に在ます神……」と云ふ事をお聽きになるともあらうが、是れは昔「神は地球を超えて天上に居る」と云ふ想像をして居つたので、即ち神の居る場處は定つて居ると考へて居つた時に出來た言葉であるが、段々思想が發達して來た今日では、是れは只比喩的に云ふので、或る一つの座が設けてあつて、其處に神が居ると考へるのではない。時に

就いても場處に就いても、神は限りない者である。のみならず能力に就いても亦神は限りがない。或人は「神は往昔から存在して居る物質を利用して、世界を造つたものだ」と考へるが、基督敎では然う云ふ事は云はない。神の能力は限りないものであるから、其能力で物質を造り、世の中を造つた者だと考へる。斯う云ふと哲學染みて來るが、宗敎でも思考を凝らした時には、哲學的觀察が無くては濟まないから、爰に哲學上の思考が若干混つて來る譯である。

其外にも猶ほ神はドンナ者であるかと云ふ事に就いて、哲學上の思考が出で來る。即ち神ば人格的の者であると云ふのも矢張哲學上の考察である。神は心がある者である、人格的の者であると、斯う云ふと「ソレハ神を人間の樣に考へたものでは無いか」と云ふ批難が起るかも知れぬ、けれ共此の人格的と云ふのは譬喩であると思つて貰らはぬばならん。要するに人間の言語は、其云はんと欲する事柄の本躰を全く言ひ現はす事は出來るものでない。人間の言語は種々な想像や譬喩を澤山集めてこしらへて居るもので、ドンナ事を言ふにも、其れ以外に出ることは出來ない。故に神に關する事を云ふにも、限られた精神を有つて居る人間が、限りのない神聖な神の本躰を其儘に言ひ表はす事の、到底出來ないのは、明かな譯である。然らば神を說くに譬喩の詞を用ふとすれば、如何なる詞を以てすれば宜しいかと云ふに、人間に出來得べき丈け、高尙なのを用ゐるより外に致し方が無からうと思ふ。或者は神

を考へて「裁判人の様な者である」と云ひ、或は「神は勢力である」と云ふ者もある。是れも亦世の中に在る、ある者を取つて喩へたのであるが、最も高い所の者を取つて云ふには、人間自身を比較に取るに若くは無いと思ふ。人間は宇宙に在る物の中で、一番高い本躰を有つて居る者だから、高い神を自分に比して話すより外に途が無からうと思ふ。若し我々が神を想像し、神を譬ふるに動物を以てすれば、其は實に卑い低い觀念である。然らば神は人格的即ち「ペルゼンリヒ」であるとは、ドウ云ふ譯かと云ふと、自分自身を知る、即ち自分の意識が有ると云ふ事である。人間が自分の意識を有つて居る如く、神も意識を有つて居て、有心者である

斯く云へば或は「ソレハ擬人論の傾向をもつて居る」との非難があらうが、併し前にも申した通り、譬喩は免れぬので、仕方が無い。譬喩にすれば、最高なる者を取らなければならぬ。

若し神に意識の有る者とすれば、其は道徳に適ふ所の者なるか、將た適はぬ者なるかと云ふ問題が起つて來る。此の問題に就いても基督教は、神は最も高い道徳を有して居る者である即ち神は道徳的のものなり、と主張するのである。最も高く、總べて罪或は人間的の弱點を、悉く棄て去て居る者である、其完全な者即ち總べての罪より離れて居る者を名附けて、基督教では「神聖」と稱へる。故に神は神聖なりと云ふ。今まで話した神の性質は、絶對と云ふ事を取り除けて了へば、舊約書に出て居る神

の觀念である。「ユデヤ」教の神の觀念であるが、新約聖書に表はれた神の性質は何ぞと云ふに、是は神を父とする事である。神を想像して、父とする事、此處が基督教と他の宗教と、大に異なつて居る所であッて、謂はゞ基督教が宗教の中で最大進歩の點に達した者だと云ふのは、此の考へを基督が始めて說かれたからである。吾々に最も關係深く、親密なる者を比喩に取らんとすれば、父と云ふより外には無い。是は殊に日本には適した事であつて、親子の關係を極く嚴格に說いたのは、儒教から來た日本の道徳であるから、此の喩は日本に持て來ても、差支がない否甚だ適して居る。又吾々が歐羅巴で父と子の關係を云ふときには、「子は弱い者であり、馬鹿な者、助けの無き所の者であるが、其れに對して父は强もあり、賢くもあつて、子を導き敎て行く事の出來る者である」と云ふ方面を重にして居る。然う云ふ關係を、神は人間に對して有て居るのである。乃で基督敎が說くのは、父が子に對して、極く嚴格な支配をするとではなく、心切な點を云ふのである。愛情を云ふのである。基督敎では「神は愛なり」と云ふので是れは神と人間との親密なとを示して云ふとである。

乙　人

前に述べたのは、神に關する性質であるが、然らば基督敎は人間に關して如何なる考をして居るかと云ふに、人間は神の像に造られた者で、神の姿である。と云ふので ある。斯くすると、「人間は創始から神の樣になつて居るのか」と云ふ問題が起るかも

知れんが、然らでは無い。神の摸擬と云ふのは、人間が將來如何なる事を仕なければならぬかと云ふ責任を云ひ表はすので、然らばドゥ云ふ責任を有つて居るかと云ふと、一口に申せば「完全になる」と云ふ理で、基督は「汝等は天の父の完全きが如く完全かる可し」と云うて居られるが、是れは人間は全完でなければならぬと云ふ事である。さらば如何なる風に完全でなければならぬかと云ふに、二個の事柄が生じて來る。一ッは人間は其道徳性を磨き上げて、完全になつて行かぬばならぬと云ふ事、今一ッは神が人間を此の世の中に置いたのは世の中の事は人間の力に依つて、漸々完全になつて行かぬばならぬと云ふ目的を有つて居られるだから人は益々完全にして行かぬばならぬと云ふので、是れは舊約書の創世紀にも示してある。即ち「生めよ繁殖よ、總ての物を治めよ」と云ふ句がある。併し完全になるのは、人間自身の自然の力で出來るとかと云ふに、限りある人間の力で、之を遣り遂げる事は出來ない、神の助けを要する。だから人間は神の子であると云ふので、恰度親が子に注意して、助ける樣に、神は人間を助けて、完全になるやうにするのである。然らば如何なる場合にも或は難義に遇ひ、困苦をする時にも、神は人間を其中から救つて其難を免からしむるかと云ふに、左樣ではない、神の祐助とは人間の道徳性を發達せしめて行くことを云ふのである。又何故祐助を與へるかと云へば、即ち神は愛であるから、人を保護されるのである。乃で人間は神の子であれば、人間同志は兄弟である。私と私同樣に他の者が、同じく或る人を父として居れば、それは兄弟である。其如く吾々が一つの神を父として居れば、人間は互に兄弟たる事は、自然の結論である。此の事は基督教の倫理の土臺であつて、此の點から演繹して、種々の倫理上の關係を定めるのである。

丙　神と人(宗教的關係)

斯く申す中に、神と人間との關係、人間と人間との關係は含まれて居る譯であるが、神と人との宗教上の關係に就ては、基督教は全く他の宗教に異なつた有樣を發見したので、此の點に於て、基督教は實に特色を有つて居る。其は如何なる理かと云ふに、基督教で云ふ人間と神との關係は、全く純粹なる宗教的關係であるが、他の宗教では純粹の宗教的關係を爲して居らぬ。即ち神と人間との關係が種々穢されて居る、ドゥ云ふ樣に穢されて居るかと云ふに、彼の魔法で反て神を人意に從はせる樣に考へるのもあり、或は儀式によりて、神と人との關係が成り立つと云ふのもある、或は神に犧牲を捧げる、何々の犧牲を捧げる時には、神は人間に對して斯く々々の報酬を仕なければならぬと思ふのである。古るい印度の宗教にも澤山然う云ふ風習かあつて、彼の「ウェダ」の歌の中にも隨分左樣のとが見える、即ち人間が神に犧牲を捧げる術を知つてさへ居れば、神は人間の求むるとを何事でも仕なければならぬと云ふ觀念がある。之を約めて云ふと、「テウルギッシ」(theurgisch)で、其意は神を無理

に壓制すと云ふとであるヾソレは基督敎にあるぢやァないか」と云ふ人があるかも知れない、成程歷史を繙ひて見ると、基督敎にも其樣な形跡がある、殊に基督敎では祈禱を捧げて、神に無理に强ひて願へば、其力で神は願の通り仕なければならぬと云ふ考を持つ者が無いではない。此事は彼の羅馬加特力敎で、甚敷行はれて居る。けれ共是れは基督敎の一派であつて、是れが基督敎と云ふのは詳言せば私が尙一言加へて置かねばならぬのは、今お話しする基督敎と云ふ所を述べるので……（勿論他に私が自身で基督敎は斯樣なものであると考へた所を述べるのである。或る一派の者は私と同じ考案を持つて居る者が無いとは云はない、其他基督敎に就ては種々な觀察があり、流派があるが、其れ等に就て私は此處で說明を仕樣とは思はぬ。勿論私共も神を拜むが、犧牲を捧げるとか、偶像を造るとか云ふ事はせぬ。聖書の中に「神は靈なれば之を拜する者も亦靈と眞を以てすべし」と云ふ語がある、其精神を採つて居るので、禮拜式は執行するけれ共、ある儀式によつてせねばならぬとか、ある姿勢を取つて拜せねばならぬとか云ふ事はない。精神が眞實であれば、其れが神に事ふる最も良き形式であると思ふ。併し形式の事を喧ましく云ふのは、加特力敎のみならず、所謂新敎即ち「プロテスタント」にも無いとは云はれぬ。殊に英吉利の國敎は儀式に拘泥して居るが、吾々の唱へる自由基督敎では然う云ふ事を言はない。

人間と神との關係は、純粹に倫理的であると。其意味はと云へば、他の宗敎では神と人との間に、種々な儀式があつて、例へば斯の日には格段に神を拜せねばならぬとか、神に事へるには、斯く々々の衣服を着なければならぬとか、或は又斯樣な食物を食べてはならぬとか、云ふ樣な式があるが、吾々は左樣な形式、即ち食物や衣服や日坏を以て神に事へるのではない。只倫理的の精神を以て、神に事へるのであると申せば、神は摑む事も出來ず見る事もならぬ、之に對して倫理或は道德の精神を持つて、ドウして事へる事が出來るかと云ふ問題が起る。が吾々が神に事へるのは、即ち同胞に事へると云ふ事になるので、譬へば爰に父がある。其父は甚だ富んで居る。其時子が、何卒此の父の氣に入るやうな贈物を仕たいと思つて、品物を整へ之を遣つた所が、父は之を見て、我が家には斯樣な物は澤山あるから貰らう必要が無い、併しお

前に其れ丈けの心得があるなら、他の者に施して呉れ……」と云ふのと同じで、即ち父に盡す分を外の兄弟共に及ぼすと云ふ譯になつて來る。基督も嘗て「我れ何を爲さばかぎりなきいのちを受くべきや」と云ふ問に答へて「汝は神を愛さなければならぬ、神を愛するとは汝の隣を汝自身の如く愛するとである」と謂はれた。又基督敎は「ユデヤ」敎から出たのであるから、其儀式習慣等を取つて居る者のみなので、他の神に事へる儀式は皆排付して居る。彼の十戒と云ふが舊約書にあるが、其十戒は道德上の規律を定めたもので、其れを基督敎は採つて居る。神と人間との關係は宗敎であるが其關係は又斯の如く純粹に道德上の者である

丁　人と人(道德的關係)

偖人間と人間との關係は則ち倫理道德であるが、之に就いて基督敎は如何なる說を爲すか。第一に基督敎は純粹なる自律說である。第二に純粹なる利他主義である。自律即 autonom には heteronom 即他律が對して居る。乃ヂ此の他律と云ふ意味は人間が行ひをするのは自分でするのでは無い、他に命令者があつて、命令するから據なくするとと云ふ事、自律の方は何人も命令は仕ないが、自分で考へて行を爲すとを云ふのである。例へば今爰に二人の者があつて、同じ道德を行うて居るが、一人は自分の主人が「斯く〳〵の事をせねば罰するぞ」と云ふから已むを得ずして之を遣つて

居る。今一人の者は種々善行を爲して居るが、其れは「自身で爲すべきものである」と考へて、誰も强ひないか行つて居る。すると何方が道德上の律に叶つて居るかと云へば、勿論後者である。自律と他律との區別は先づ斯樣なものである。基督敎は純粹な自律說を採るのであるから、自分が撰んで道德を行つて行くのである。然らば惡事をするのも、自分が撰むで遣るのだから差支は無いかと云ふに、其れは道德上の律に適つて居らぬ故、仕てはならぬのである。然し基督敎の此說には一ッの自家撞着が起つて來る樣に見える、何となれば、基督敎信者が何故道德を守つて行くかと云ふと、「是れは神が人間に命じた者だから行ふ」と言ひはせぬか成程ソレは尤な議論である。然し此處に意味があるので、抑も人間が此の世の中に來る時に、既に「自身は之を爲さねばならぬ」と云ふ天性を有つて生れて居る、即ち芽の如き物が人間中に在る。然し其芽或は蕾を其儘に棄て置けば花にはならぬが、勉めて自分が養成すると美麗な花が咲く。天性既に此の道德上の律の芽を有つて、人間は世の中に來たのであるから、他者に强ひられずして、自ら發達せしめやうと思はねばならぬ、所が人間は自ら「生れたい」と思うて世に來たのではない、造られて來た者なれど、意識が發達した時初めて之を知るとが出來る。人は神の像に造られ此神の像は人間の意識が出來るより先きに、置かれた芽である。之を自律的に發達させるは、自身の責任である。之を自分で發達をさせるのは他律ではない。又基督敎の倫理說は純粹なる

利他説てある。世には快樂を求むる爲に、人間は道德を行ふのだとか、私慾を全うする爲めだとか云ふ説もあるが、基督敎は之を採らない。善き事をするのは、其善を愛するが爲めたと云ふのが、基督敎の倫理の立場である。又基督敎は此の世の中を棄てぬと云ふのも、其處から出て來るので、世を棄るのと棄てぬとの區別が、基督敎倫理と佛敎倫理との別るゝ所以である。佛敎では「世の中は不潔であるから、人は之を離れねばならぬ」と云ひ、基督敎は「其汚ない世の中を奇麗にして行くのが人間の務めだ」と云ふので、是れが此の敎の道德上の律である。勿論基督敎でも、或る時代には、厭世家即ち隱者、遁者等も起つたが、其れは基督の本主義に背いたもので、諸君が新約書を繙て御覽になれば、そんなことは敎へて無い事が解る。基督敎では地に天國を普及するのが、倫理上の大なる目的である。此の神の律が世の中に行はるゝ樣に道德上宗敎上の力を以てするのを、基督敎では、神は世に對して惠なり、善き者なり。故に人間は其神に服して其意思を行ふて行くと云ふのである。斯云ふと諸君が「基督敎國の人を見るに道德上に於ても、主義上に於ても、其れに反した事がある……」と云はれるかも知れぬ。けれ共其れは事實の上即ち實際は吾々の主義かまだ行はれて居ぬから起ることで、私共は此の理想を立てゝ之を實際に行はれる樣にせんと勉めて居るのである。世の中が進歩し基督敎が發達するのは此理想實行の多少に大關係がある。前に述べた、基督敎の宗敎倫理は、私が獨りに拵へた者では無い、基督

耶蘇の本意はこれであつた其本意が或る場合に彼方斯方で壞されたともある。何となれば基督は右の如き悟りを開いて、口でも述べ、又身で實行も仕たが、其以外の種々な道德説や宗敎説を唱道實行した者が、基督敎へ這入つて來て、どうも舊習を棄てる事が出來ぬ所から、之を基督敎に當嵌めたので、基督の本意が行はれぬ樣になつて居る場合がある。けれ共吾等が神學上の研究、考證で、之を探つて觀ると、大略私がお話仕た樣な者で、之を如何にもして實行させたいのが、私の本意否私のみならず、基督の本意が暗くなつて居るから之れを、元の通りに改め樣と仕た彼のルッテル、レッシングの如き人々の願である。

第二章　基督教は神に對する關係なり

五、神ありや

甲、此問題に答ふるを得べきか

前に總論で、第二の要點として、「基督教は神に對する關係を說く者である」と云ふて置いたが、既に題によりて明かなる如く、基督教は神を說くものである。偖て其の題の下に起つて來る問題は、「一躰神は在る者か」と云ふ事で即ち「若し眞に神在りとせば、之を證據立てるとが出來るか」と云ふ事——、尙廣く云ふと「神の有無を證明する事が出來るか」と云ふ疑問である。元來有神證據論と云ふと、何人でも神が有ると信じなければならぬ樣に、所謂必然の理を以て辨明する事が出來る者だと思ふが、私はそんなとは出來ぬと考へる。併し又其れと同時に神は存在して居らぬと云ふ事も、明かに辨明する事は出來ないと思ふ。考へても見るがいゝ、若し神が存在して居る事が明かに辨明出來て、誰でも之を承認せねばならぬ樣に學理上から證據立てられ得らるゝ者ならば、學問あり、敎育ある人の中に、無神論者のある理由がないのである。然らざる所を以て推せば、左樣でないとが直に解る。例へば「博物學に基いて神の存在を明に證明し得る者ではない」と論ずる人もある、然らば果して博物學が神の存在を證據立て得るや否や、是は疑はなければならぬ。元來博物學なる者は宇宙が在る、其宇宙に基いて議論を立

てゝ居るもので其宇宙は自然に出來た者であるか、或は誰かが造つたのであるかと云ふ問題は研究判斷する者で無い。博物學は只だ現在目前に在る自然を捉へ、其れを元にして其中の理窟を攻究するので、其自然は那邊から來て居るのだかと云ふ事には、無頓着である。又此の自然の理窟法則を、博物學者が種々研究して、原則を作るけれ共、其れが宇宙に存在する所の原則の悉皆であるかと云ふとも、又尙他に澤山の原則もあッて後には研究の結果で發見せらるべき者であるか、其れもまだ分つて居ない。故に今日其れに據り宇宙を外側から觀察して、神の存在を證據立てる事は、出來得さるものである。乃で斯く外部から宇宙を觀察し其に據て神の存在を證據立てるとの不理なるを悟り、更に方法を換へて之を證明せんとする者がある。即ち人間の內心——心の中で實驗する事實に據つて、神の存在を證據立て樣とする論者もある。既に前にも申した事があるが、宗敎は人間孰も有つて居る而して人間は此の世の中の束縛を解脫して、自由を得る事を望んで居る。又た實際宗敎は其自由を得させるのである。是れ神が有る確實なる證據で無いかと云ふ者がある成程人間は宗敎心を有つて居る、其宗敎心には、神の大能が現はれて居る。だから此は甚だ有力なる證據の樣である。けれ共茲に一ッ考ふべきとは之は人間の感情に過ぎないとである。「此の感情は嘘では無いか」とは今より三四十年前に彼のフォイエルバッハと云ふ人が云つた。シテ觀れは「是れは嘘では無い、眞實だ」と云ふ證據が無け

ればならぬ。が之を確實に證據立てる事は困難である私共宗教家の願ふ所は「是は
人間の迷でない、眞理に基いたものである」と云ひたいけれ共、是は學術的に辨明す
る事の出來ざる者である。尤も多數の人間が皆悉く迷うて居ると云ふのは、甚だ不
思議であつて寧ろ事實らしくはないが、併し絶對的に之が迷ひで無いとは謂はれ
ぬのである。故に此の點から神が有ると云ふ事を證據立てる事は出來ぬ。例へば三角形の
三ッの角を合せば、二直角になる事は數學で證明が出來るが、其證據と有神證據論
は違つて居る。若し三角形の角を合せて二直角になる事を信ぜぬ者があれば、信ぜ
ないのは、學問が無いからだと笑うて除ける事が出來るが、有神論の事に至ると、之
を信ぜぬからと云つて其人は愚物だ學問が無いから、信ずる事が出來ぬのだと、笑
ふ事は出來ぬ。勿論基督敎を信じて居る者の中には、有神證據論は實に確實なもの
で之を信ぜぬ者を、或は迷うて居る人、又は仕方の無い人だと云ふ事もあるが、私は
然う云ふ論者と一緒には行かない。自分の考へでは、此の有神論は學術上から必然
の理を以て證據立てる事は出來ぬと思ふ。

神の有ると云ふ事を學理の上から必然的に證據立てる事が出來ぬと云へば、他に何か神
の有る事を辯明する道がなければならぬ。即ち所謂假定說で「神は多分有るであら
う、と云ふ丈けの證據が出來ぬかと」と斯う云ふ問題が起つて來る。神が有ると云
ふ事は、多分本統だ……」と云ふとは出來ぬかである併し是れも種々區別を立て

ゝ話さねばならぬ。第一形而上學から論ずれば、最後の原因が無ければならぬ。物あ
れば必ず因有りと云ふ點から、推して形而上學では、神が有ると云ふ議論を立てる
のである。即ち爰に宇宙があれば、其大原因が存在仕なければならぬ。けれども一ッ
考へねばならぬ事は、原因を探るには如何に仕たらば適當であらうか……。例へ
ば一と云ふがあれば、其原因は二である、三と云ふがあれば、其原因は四であると云
ふ樣に、一、二、三と段々に其原因の原因を調べて行くと、竟に人間の思考は停止して
しまう。併し是れ數に終りがあるのではない、考る事が出來んのである。即ち無限に
溯る譯であるが、其は人間の考の到底及ばぬ所である。併し又「神が有る」と云ふ說か
ら云ふと、今見る所の宇宙がある、其の宇宙は前の宇宙から出來た者とする。詮る所
何から之が出來たかと云へば、神から出來たので、其神は何人が造つたか、誰も造つ
たのでは無い、彼は造物者であるが、造られた事は無い、永遠無窮のものである。かく
云ても矢張無限に溯つて原因を求める事が出來ぬ如く、人の智慧では考へ得られ
ない。

形而上學から云ッても、斯の如き弱點がある事は、記憶して置かねばならぬ。然らば
假定說の方から觀て、博物學は神を如何に論じて居るかと云ふに、博物學上より此
事を論ずるにも亦區別がある。即ち或は有神論には何か自家撞着がありはせぬか、
或はソレが信實(まこと)らしく聞えるか、と云ふ二個の議論である。今より三四十年前には、

博物學者で「神が有る」と云ふ者があると、其れは間違つた話だ、有神論は博物學上採るに足らん」と云ふたので、有名なる博物學者は皆無神論者であつた。併し博物學が神の事を說く樣になつては、既に其學問の範圍を超えたもので無ければならぬ。博物學は目前に在る物を採つて、說明をするもので、其れ自身が何方から來たものかは考へる事が出來ん。此の事に就いては博物學は知らぬと云ふが當然であつて、若し此の宇宙は何處から來たかと云ふ事を知らぬならば、其宇宙を造つた神があると云ふ說に反對する道理は無いのである。或は有神論を保護する事が出來ぬとしても、博物學者は之を批難する事はできん。又一歩を進めて博物學から、假定說として神の有る事を主張し得るかと云へば、勿論私は博物學者ではないから、之を云ふ事は出來ないが、斯學に委敷い人の說を採て申せば、彼のハルトマンです、此の人が云ふた言に「此の宇宙に在る運動を見よ、此の運動は終には止ッて了ふ方向を示して居る、之は何を目的として居るかと云ふに、總て平均を取らうとする傾向を持つて居るので、若し其平均が取れて了へば即ち物か靜まつた秋であるから、其運動は底止仕て了はねばならぬ、若し運動が底止する者とすれば、其始まつた時がなければならぬ、又之が永遠から始まつた者ならば、遠くに底止して居る理である、併し其れが止まると云ふのは、或場合に始まつた事を示して居るのである、シテ觀れば其運動を惹き起す者がなければならぬが、其者は則ち神である」と云ふて居る、是事は

アリストテレース抔も言ッて居る事で、始に原因者があつて運動を起す」と云つて居る、運動の始まると云ふ事に據ッて、神の存在を假定說として取つて置く事は、餘り差支無い理由である。

又有神論は唯だ議論の上からのみでなく、宗敎上、事實の上から考へても、眞理ありそうである、何百何千年の間に、何百何萬人の人間があッたか知らぬか、其多數の者が同一の迷ひを有つて居るとは、寧ろ信ずる事の難い事で此事は何處から來た事であるか、併し私は宗敎があるから神のある者も確實なりとは云はない、只斯樣な事實に據ッて見ると、神があると云ふ方が、本統らしい、比較的正當であると言はねばならぬと思ふ、斯の如き事實に據つて見ると、神を信ずる事は、決して空想なりと冷笑すべきものでないとが明に解る、信ずる者と、信ぜざる者と何方が空想者であるかと云へば寧ろ神があると云ふ方が、比較的に眞正であると謂はねばならぬ、神が眞に在りとすれば宗敎の事實が最も單簡に說明が出來る、神の存在を證明するものである今一つの道がある、其は聖書の中にあッて、神の存在を證據立てゝ居るものであると欲する者は、我が敎ふる所の神より出づるか即ち基督の詞に「神の意思を爲さんと欲する者は、我が敎ふる所の神より出づるか又己より出づるかを知るべし」と其意味は、先づ第一に「神はある」と斯う假定して、而して其神の心の如く自分がなつて行うと勉める者は必ず自分即ち耶蘇が說いて

居る事は、神より來た道であると確信するに至ると云ふ譯である。勿論其れは有神の證據論と云ふ譯には行かん。證據論と云へば原因結果の理法で推し窮めて行かぬばならぬ。併し此宗教上の法に據れば、人が各々自分の心中に神は必ずあると信ずる念が生じて來るにはちがいがない。

右の如く論ずると、有神論は學術と反對して居るもので、教育あり學識ある者は、神を信する事は無いのであるかと云ふ問題を起す人もあらう。殊に此の日本では、學者は神を信ずる者でない、宗教を信ずるのは、匹夫匹婦のする所業であると思ふて居る者も多分にある。併し歐羅巴で見ると、其れと反對で、歐洲を動かして居る、大人豪傑は皆宗教を大切にして居た。歐洲で著名な人は、必ず神を信じて居る。其中極く少數の人は信じて居なかつたが、大部分は必ず宗教を信じて居つたので、其等の人は自分の見識があり、學識があるに拘はらず、神を確に認めて居つた。だから神を信ずる事は、決して學術に反對する者でないと云ふ證據を出す事は固より出來ぬが、其代りに神を信ずるとは、學術上ドウシテも許すべからざるなどと結論する事も出來ぬ。是れ神を信じた所が毫も差支ない理由である。乃で私が諸君に向つて「神を信ぜられよ」と申した所で不都合なことは少しもない。又諸君が之を信じた所で學術に對して恥ぢらるゝ必要はない。學術は吾々に神が無い事を辨明し、又之を確信せしむる力は毫もない。殊に歐羅巴の博物學者の如きも神を信じで居つた人も

隨分あつた。ダルヴヰンと云へば博物學者として誰も知つて居るが、此の人も神を信じて居つた。尤もダルヴヰンは當時の基督教會の唱へる教理を悉く信じては居らなかつたが、神を信じて居つた事は確實である。尙歐羅巴の哲學者の中に就いて調べて見ても……哲學者は理窟を攻究する者であるから、學術の代表者として不都合はないと謂はねばならんが、其人々の中でも神を信ぜぬ者は、極めて稀なので、獨逸の哲學者中で、近世の人で僅か一人しか無神論を說いた者がない。斷然神を排したのはシヨーペンハウエルのみである。殊に中古以前に溯つて見れば、哲學者中無神論を說いた人は一人もない。元來學問を仕て居る者が、無神論を說く事は、無神說を唱へた人もあるが、それ共深く學術を攻究した者には決してない。英吉利の實驗派の學者で著名なるベーコーが云うた詞に面白い事がある。彼の言に「學術の泉で些少の水を飮んだ者は、直に無神論を說くが、澤山飮んだ者は竟に有神論者になる」と云ふて居る。成程吾々が經驗をして見ても其通りで、吾々は幼時より歐羅巴で敎育されたから、最初は神がある事を信じて居るけれ共學校に往ツて生物知りになると、神の事を疑ふ樣になるのが通例である自分等も矢張然う云ふ經驗を仕たが、又段々と學問を深くするに從ひ——私自身は神學者であるが、他の學問を仕た者も、同じ經驗なので——復元に戻ツて有神論者になつて了ふ。生學者は無神論者だか、眞に學問をした者の有神論者たる

事は通常見る所である。故に有神論は學術に反對して居るとか、學術ある者が、有神論を説くは恥辱である抔と云ふ事は無い譯である。

偖何故に右の如く神を信じ且つ神に就て考へねばならぬかと云ふに、是れは人間の内心が請求するからである、内心の必要に迫られるから考へるのである。併し神を人間的に想像するを免れぬ。獨逸の諺に、自分は自分の皮から脱け出る事は出來ぬ」と云ふ事があるが、其通り神を信ずるにも擬人的に考へることを免かれない。だから、最初より之を心得て居らねばならぬ。又此點から云ふと、ドゥしても第一大原因がなければならぬと云ふのは人間の思考上已む事を得ぬ必然の理由で何にも原因の無いに、結果が起つて來る事は出來ぬ。子あれば親あり、親あれば必ず其始祖が無ければならぬと云ふ結論をする必要が起つて來る。例へば此處に机があれば、是は誰かが拵へたのだと云はねばならぬ樣なものである。而して又机になッて居る物質も何時出來たかと云ふ疑問も出て來ると、必ず物質にも始がある、物質は無から出來た物ではないと云ふた方が、人間にはよく考へられる。勿論是は人間の智識が、然う考へる樣になつて居るから、斯の必要が起つて來るのである、何となれば人は神を自分の形狀に擬つて考へて居るからなので、何故然うかと云へば人間は神の形に造られた者であるから、自然斯く考へると云ふべきである。

乙、有神證據論の性質と限界

前回に於て、神の存在を證明する議論に就てお話をした。其時述へし通り、成程有神證據論と云ふものは歷史上ある議論ではあるが、此の議論には色々の故障があッて吾々基督敎信者が信じて居る樣な、人格を備へた神があるとは此の證據論で殘りのない樣に、充分に辨明するとは出來ない。だから此の證據論に余り價値を置き過ぎてならん。さればとて又これは甚だ愚なりとして排斥すべきものでもない。何となれば此の證據論で、神があるとを信じてもさしつかへの無い丈の理由は辨明が出來る。唯だそれが數學の證據論の樣にドウあッても信じなければならぬ程の力、云ひ換へると必然的の證據力を有ッて居ないまでいゝある。若し有神論が必然的の證據力を有ッて居るものなれば、神を信ぜぬ者、即ち無神論者と云ふものは一人もないわけである。然るにさうないのは、有神の證據論と數學のとは其力に相違があるからである。

勿論有神證據論は決して智識に反對した議論ではない、神ありと主張するには、其れ丈けの理由がある。が神の存在を信するのは、唯だ智慧ばかりの働きではない。尚ほ外に一ッのものが是非必用である。即ち自分が意を決して「實に神はあるものだ」と承諾するとで、是れは意志力の作用である。

さて證據論は種々あるが、皆な世の中にある現象に基き或は其如何にも不思議な

點に注目し、之を解釋せんが爲めに有神論を立てたのである。然し是れは人事を推して神に當てはめたものだとの批難もを免かれない。が此の神人を同じ樣に考へると即ち Anthropomorphismus は、人間の思索には到底免かるとの出來ぬものである有神論の前提も矢張之を免かれない。此前提と云ふのは第一の原因がなければならん、宇宙の起源は如何、無から天地が創造できるものであるか、と云ふとで、之れは索より人事を應用して說を立てたのであると云ふのが、有神の證據論である。又現象と眞理と云ふとの區別もあるか之れも矢張神人同形說と云ふべきである。

此の世界、此の現象を解釋するには、如何にすればいゝか。之を說明せんとするには「神あり」と云ふ方が大層容易い又適當であるから五ッある。私は今からお話しやう。で此の證據論の主なものを擧げると、舊くから五ッある。

丙、有神證據論相互の聯絡

今申した通り證據論は澤山あるが、其れを一々詳細く論ずる前に、元來此證據論は相互の間には如何なる聯絡をなして居るかと云ふ事を確めて置きたいと思ふ。往昔からある證據論の中で、第一は「コスモロージッセル、ベワァイス」Kosmologischer Beweis と云ふので、此の「コスモロージッセル、ベワァイス」と云ふ語は、世界と云ふ字から來たので、即ち世界的證據論とでも譯したらよからう、即ち吾々が現に見る所の世界がある、然らば必ず此世界の出來た原因がなければならぬ。故に之を尋ねて見ると一番最初の原

因がなければならぬ、其は神だと云ふのが世界的證據論の立場である。

第二は「テレオロージッセル、ベワァイス」(Teleologischer Beweis)と云ふので「テレオロージッセル」は目的と云ふ字から來たので、是は意匠的證據論と云ふ樣な譯が付いて居る。即ち吾々が見る世には、奇妙、不可思議な組織がある。皆な、ある目的を達するに、適當な手段が用ゐてあるから、斯く誰が目にも奇妙に見えるので、斯く都合よく組織の出來て居る世の中なれば、此の組織の出來た原因が無ければならぬ。目的は考へる事がなければ立つ者でないから、思考力を持つて居る原因が、世の中に在る、と云ふ事を論ずるのである。

第三は「アントロポロージッセル、ベワァイス」Anthropologischer Beweis と云ふので、人間的證據論である。是れは人間の性質から推して來て論ずるので。人間は如何なる者かと云へば、限りがある者だ、けれ共精神的の者である。人間は唯だ身躰から成り立つて居るのみでなく、亦靈魂を備へた者である(併し身躰と靈魂との關係は如何であるか、其れは暫く措き、彼の唯物論者は「人間の精神力は、物質の現象に過ぎない」と云ふけれ共、今日は最早此論は成り立つ事は出來ぬものとなつて了ッたから、是は取るに足らぬ議論として)人間には精神があるが、其れが來つた原因は、ドンな者であるか。原因者其れ自身も亦精神的の者でなければならぬ。併しそれは無限的靈躰であると云ふのを人間的證據論と名附けて居る。是れは人間から推して考へるからさ

う名附けたのである。

第四は道德的證據論である。之には二ッの立論があるので、一ッは人間の道德上の意識に基いた議論で、即ち人間と云へば、如何なる人でも、道德上の意識、良心を有つて居る、之は奪ふ事の出來ない者であるが、然らは良心を人躰中に置いた者、即ち道德上の意識を與へた、原因、がなければならぬ。其れは誰だと云へば神であると云ふのが一ッ、

今一ッは道德上の法則は、世界に現行せられて居る。即ち善は賞せられ、悪は罰せられるのは、世界の秩序である。斯の如く道德上の法則が世界に行る者ならば、其法則を執行する者がなければならぬ。此の法則を執行する者は神である。故に神は當に考へる性質を有するのみならず、倫理的の者である。と云ふのである。

第五は宗教的の證據論で、是は二に分けて論じて居る人もあるが、私は一に合せて了ッた。其一ッは歴史的の證據論で、總ての人間は皆宗教を有つて居る。古今東西皆宗教を奉じて居る。此事實に由つて考へて見ると、「是は或る一ッの原因者があつて、自分と人間とが宗教的の關係をなす樣にした爲めであつて、ソレから宗教が起つて來たのだから……神があつて始めて此の現象が起るのである」と云ふて有神を證據立て、モウ一ッは「オントロー ギッセル、ベワァイス」(Ontologischer Beweis) 即ち實在的證據論と云ふのであるが、是は次に委敷お話する積りであるが、兎に角人間が思想上で構

造する完全と云ふ意義から推して其の實在を結論するのが、此の證據論の立て方である、果してこれらの證據論は、神を證據立てるに足る者なるや否や、若し證據立てると仕たらば、ドレ丈けを證する事が出來るか、又此の論は十分力が無いとしても、宗教上何程必要なる價値があるかと云ふ事を、引き續き委敷論じ樣と思ふ。

丁、有神證據各論

イ、世界的證據論

今から前に述べた證據論に就て、一々論じたいと思ふ。扨世界的證據論と云ふのは此世界がある所から其現象を觀察し、其現象の全躰には、之に對する原因がなければならぬ、と云ふ事に歸納するのである。宇宙に在る一個々々の現象は、其れを調べると其現象の起る原因は他から來て居て、自分で此現象を起す原因を持て居ないだから其原因を順々に探つて行くと、何處で止まるか、其底止する所がない有樣である。即ち無窮の連鎖をなして居る。併し此の無窮な連鎖と云ふ事は、人の思考の最早及ばぬ事になつて來る。であるから、英吉利の哲學者バートは、「原因結果が永い列を成して何處かに向いて往つて居る。此の原因結果の列を合はせて見た時には詰り最終には神の玉座が設けてあつて其れから長い鎖が繋がつて出て來て居る」と云ふた。併し原因を探つて見ると、原因の原因があッて、長い列をなして居て、其れが人間の思考の及ばぬ程に、無限に續いて居ると云ふ事は、人間の考の最早及ばぬ

所である、さて神の有無を考へると原因結果の無限を說くか、或は原因結果は無限でなくして、或る場合に原因が終極に達し、其上には原因が無いか、ドチラかになる前者とすると無神論、後者は有神論になるが、論理から考へると、兩方とも吾々の思考のとゞかぬ樣になッて居る。併し或は「原因の無い原因者を信ずるのは、非常に愚な事で、之を信ずべき理由がない」と論鋒を向けて來れば、私は之に反對して「其れは論理で證據立てる事は出來ぬかも知れないが、原因の無い原因がある事も、此の世の中は原因結果が無限列を成して出來て居るのだ、と云ふ事も、論理上敢て價値の相違はない。同等の權理を持つて居る事だ」と云ふと思ふ。故に通常人が申す樣に「原因の無い原因者は、考へる事が、出來ぬから、然う云ふ者は無い」と云ふべきものではない。此の世の中の原因を限りなく求めて往つたら、ドゥあッても大極の原因に達すと云ふ事を考へるのも、決して非道理ではない。けれ共亦世界は屹度然う云ふ原因のない原因があッて、其れから出來たものだ、と云ふ、必然の理屈詰めは出來ぬことを記臆せねばならぬ。併し通常基督敎の敎師杯が云ふ樣に「最高の原因あるが故に、人格を具へて居る神がある」と云ふ結論は決して出來ない。最高の原因があるとしても、果して人格を備へて居る者であるか、さうで無いかと云ふ事は、原因結果の理法を推すばかりでは、證據立てることが出來ぬ。

併し私共の許さねばならぬ事は、吾々人間の智識は「ドゥ仕ても原因がなければならぬ」と云ふ事を考へる性質を有つて居る事で、何も原因が無くて、何かが出來ると云ふ事は、人間の智慧の許さぬ事である。故に原因者を尋ねる事は、人間自身の智識上、已むことを得ざる譯で、或は原因者を結論するのも、無理ならぬ事である。唯だ「其れが論理上必然である」と云ふ議論が成り立たないまでなので、其れが無理ならぬ事だと云ふ論は立つ。故に宇宙的の證據論に由ッて「神は是非共なければならぬ」と鏡にかけて見る樣に歸納して結論する事は、出來ない。

此の論で、神の存在を證據立てゝ行くには世の中にある規則によるのだが、神と世界の規則の關係に付て二ッの思想がある。其一ッは奇蹟を信ずることなので「第一原因者は神である。其神は世界に對し、如何に働て居るかと云ふと、成程幾許年の前に世界を造つたのではあらう。けれ共神の能力は何時も直接に世界の上に働くので今日にも或る特別なる場合には、世界の運行に干涉し、人間の考へより觀ると、自然の運行に反して居る樣な能きをするのである」と云ふ議論をする者もある。又之に反して「神は第一原因者で世界を造つた。最初に世界を造つた時に、規則的に造ッて置いた。此の世界は其時神が與へた規則で、運行して居るのである。故に此の世の中には、學術から考へて見ると、神と云ふ者がなく、只規則に適うた運行を見るのみである」と云ふ事も出來る。

斯の如く奇蹟を以て、世界の事を說明す者もあれば、或は自然的に說明する議論も

ある。今より二三百年前の宗教家は、「神は不思議な事をする者で無い」抔と云へば、非れは宗教に反する言を爲す者だと、論難仕たに違ひない。實に幼稚な考へを仕て居つた。然し變れば變るもので、今日は「奇蹟がある」抔と云ふのは、神が規則正しき世界を造つた主意に反する事であつて、世界を規則正しく造つた事を許すならば、奇は許す事が出來ぬと云ふ議論が盛になつて居る。私等も奇蹟はないと云ふ考へを持つて居るのである。諸君は基督教を說く、ある者は之を非難する議論を屢々お聽きになるであらう。其人達は「奇蹟を許さなければ、基督教は無くなつて了う……」と云ふが、奇蹟を信じなくとも、世界は神が規則正しく造つたもので、其通り正しく運行して居るものだと云ふのは基督教に反せざるのみならず、反て適うて居るだと私は考へる。

ロ、意匠的有神論

次は意匠的有神論と云ふのであるが、是は今より凡そ二百年前の頃、即ちニュートン(I. Newton)抔の時には特に好んで唱へられた證據論であつた。此の證據論は、此の世の中は非常に目的に適ふて都合よく、意匠を凝らして造つてある。是を造る者は即ち智識に富める神でなければならぬ、と云ひ、吾々が目前に見る所の、疑ふ可らざる程、巧みに造られた物に因ッて、智識ある神の存在を證據立てる論である。此證據論の例に用ゐられるものは、澤山あるが、私は今其中の著きものを擧げやうと思ふ。物

理學の規則に據ると、物が冷たくなれば、なる程、熱躰が冷却すればする程、重くなるのである。是れ冷へれば分子が、澤山に寄り集つて密になつて來るから、重くなるのである。其規則は一般に行はれて居る。然るに其れにも拘はらず、一ッの取除けがある。即ち此普偏の規則にはづれたものが唯だ一ッある。ドウ云ふ理由で然うなつたものか、其說明は出來ないが、是は事實で、即ち水は此の法則に反した事を遣るものである。水は段々に冷たくなれば、なる程其分子が密になつて來る。さうして其冷たくなるに一定の度、則ち攝氏四度と若干になると、最も密に又重くなるが、此度を越へると氷になる。氷になると反て分子は粗になつて氷は水よりも輕くなる。勿論輕くなる理由は解かるが、何ぜ水丈けは他の者とちがつて冷却すると輕くなる性質を持つて居るか、他の物質と同じであれば重くならんければならぬのに、かく輕くなる。實に不思議で其理由が一向解らぬ。けれ共此の目的はよく解つて居る。若し水が氷つて其氷が水よりも重くなれば水中に沈まねばならぬ。然るに水が氷うると、通常の法則に反して水上に浮ぶ樣になつて居る。乃で通常の法則通りに、氷も行くものと仕たならば、此の世界は一多乃至二多の間に、悉く氷になつて了う事は、疑を容れない。即ち極く寒い時には水が氷る若し其氷が水より重ければ、水中に沈む沈んでは其上の水が氷になり、又沈んでは其上に氷が出來て沈むと云ふ樣であつたならば假令大陽が其上を照しても、中々一夏期の間に溶けて了う事は出來ぬ。殊に寒い處で照る所の大陽の

温度では、解かす事が出來ないから、之が續けば終に氷が全世界の海を鎖して了う樣になるに違ひない之に反して水は物理學の法則に背いて居る爲に、氷が張つても忽ち表面に浮くお蔭で……。又氷は其下に在る水を暖く保護して澤山氷らせぬ爲めに、氷結が、非常に厚くならず、溶け易くもある。何故世の中に斯う云ふ事が行はれて居るか、此の特例は只水にのみ存して居るのであるかと考へて見ると、爰には一の大な目的があつて、巧な事が出來て居ると謂はなければならぬ。即ち大な意匠計策があるので、此の計策は誰かが仕なければならぬ。是れは物質でなくて、考へる能力を有つて居る者が爲した大業に違ひなひ。其者は則ち神である、と云ふ結論をするに何の妨げも無い事と思ふ。是は一例であるが、猶他に斯樣な例を並べれば澤山にある。人がよく好んで使ふ例は人間の眼である。此の眼は光に適合する樣に造られて居ると云ふ事から、議論を立てゝ來るのである。

扨て斯の如き事實に據りて、論ずる證據論は、結論に於て毫も疑はしい事はない。又此の結論に對しては、何人も故障を云ふ事は出來ないが、併し此の證據論に就ては前提を非難せねばならぬ。何となれば、果して目的を立てる者がなければ此の都合よきことはドウあつても出來ぬか」と云ふ問を、他の論者は起すのである。何でも世の中に生じた物は、自然の手段で出來上つた結果である。目的を先きに拵へて置いて、結果を生ぜしめたのではなくて、左樣な事が出來たのは、種々な事を遣つた結果で出

來たので。何故然う巧妙な結果が出來たかと云へば、其は偶然に出來たので、即ち偶然が然か爲さしめたのである。とこう論ずる、是れも理屈である、併し偶然にこう云ふ不思議な、巧妙な意匠か出來た、と云ふのも、偶然でなく、智識ある造物主があつて之を造つたと云ふも、差支はない。即ち目的を立てた者があつて、之を實行せん爲に世の中の法則を支配して行くのであると云ふ事は、目的が無いと云ふ議論に劣つて居る所は、毫も無いのであるから、此の「目的があるのではない、只偶然の結果だ」と云ふ說に從はねばならぬ譯はない。併しながら意匠論は、時に屢々間違つて用ゐられる事がある。其れは能く宗教家が前々から申す事で、「世の中は人間の利益の爲だ」と云ふ議論をする者がある。何も彼も人間の爲だ」と云ふ議論をする者人間の便利な樣に、拵へられた者である。けれ共是は當を得ぬ話である。素より意匠論者にも、正當な道を取つて居る者もある。是は「內在的意匠論」(Immanente Teleologie)で「物が存在仕て居るならば、各々其れに適ふた目的がある」と云ふ議論である。此の議論は極めて理屈に適うて居る例へば牛の角がある。是は人間が其角を取つて、美術品を拵へる爲に、出來て居るのだ、と云へば、甚だ間違つて居る。けれ共「牛の角は牛自身が敵を拒ぐ力になる」とか「己れの生存を牢な角を持て居るから、能く其種族を保存仕て行く事が出來る」とか「堅保護仕て行く、目的に適うて居るものだ」と云ふは、少しも差支無ひ譯である。斯く論ずると、又一ッの問題が起る。其れは「目的ありとすれば、其目的があッて、自然が其

目的に對して運行すと云ふのと、自然は法則に束縛せられ、因果の法則が嚴然と行はれて居ると云ふのとは反對せざるか、目的と云ふ事と、自然の法則と云ふことは、相撞着せざるや否や」と云ふのことであるが、多くの科學者は、此の世界の出來事は皆な自然の法則が嚴然として行はれて居る結果で、目的がある爲めに此の出來事があるのだとは云はない。一の次には二、二の次は三でこれを推せば百までにもなるが百は九十九があつた結果で、九十九の目的だと云ふ事は出來ぬ、と云ふ。けれ共之は科學者抔が哲學上の思考を爲し能はざる結果で、目的と自然の規則が嚴行すると云ふことは互に撞着すべき理由はない。只物の觀察點が違ふのみである。結果と云ふのは始より段々と終りを觀察するので、目的と云ふのは終から飜つて始を見る觀察に過ぎない。結果があつた上から、顧みて始を觀察すれば、「此の結果は那邊から起つて來たか」と言はず、始めに溯り、其處に既に此結果を引き起す目的が、置かれてあつた、始より進むだのは終に來る結果が目的なので、あッたと云へば何も不合理はない。一と百との譬喩で云へは、其間の數は手段方便で、一は百を生ずる目的を持ッて居たのだと考へれば宜しい。併し是は觀察點の違へる丈けで、相容れぬ觀察ではない。「カント」や「ハルトマン」の如き哲學者は、目的と自然的と云ふことが、互に撞着せぬ事を言つて居る。勿論意匠論の立方に由ッては、互に衝突する場合もないとは言はれぬ多くの神學者の如く、「神が或る場合には自然の法則外の事をすると」云ふならば、大

に原因結果論には、反對して來る。併し左樣に云ひさへせねば、衝突する理はない。今日も生存して居る、獨逸の博物學者で有名なヂュ、ボア、レモン (Du Bois=Reymond) と云ふ人が「智識の限界と世界の謎」(Grenzender Erkenntnis und Welträthsel) と云ふ問題で論じた事があつて、一時思想界を動かした、其時に「科學の上から、種々な事を說明することは出來る、けれ共生命とか、意識とか、組織躰とか運動とかの如きは、迚も說明し得られない。是等の者を物質で說明せんとするも辨じ得るものではない。因果の理法を當嵌て考へれば、因と果とは同じ性質でなければならぬ。思考のある物は思考のある者を生じ、生命は生命を出す事が出來樣けれど、生命なき者から生きた者、意識なき者が、意識ある者を生ずる事は出來得ざる理由であるから、是等は只自然の法則を以て說明する事は出來ない」と申しましたが、其れは當然の言葉で、原因結果の方面から考へても、此の世の中に意識があり生命があり思考があれば、此結果を來した者には、矢張り生命も意識も考へもなければならぬと、結論するのは毫も妨げなき事で、世界に目的が有るとすれば、考無き者が之を造る事は出來ない。此の本源は考を有する本躰でなければならぬ。私は此の辯明に對し、敢て故障を云ふこと無きのみならず、凡ての辨明中之が勝れて居ると思ふ。併し「目的があるから、之を拵へた者は、人格を備へて居るか」と云ふ問題は、此の論から結論する事は出來ない。けれ共私共は人間の性質に據つて考へれば、思考があるのは人格を備へた者ならざる

を得ない、と結論仕て來る。然し或はハルトマンの云ふ如く非人格的の者かも知れぬ。

然らば之が宗教上に、如何なる利益を有するかと云ふに、神は全能力を有つて居り、全智な者であり、總ての事を知る能力がある者でなければならぬ。殊に宗教上價値ある考は、神は總ての事を、豫め悟る能力を有する者なりと云へる、神の性質で、基督は嘗て、「若し神の御心に依らずんば、汝等の頭の毛一本たりとも、地に落つる事はない」と云はれたが、是は無論頭の毛一本に重みを措くわけではなくて、此の世の中の事は、悉く神の意思に由つて出來ると云ふ說明であるが、又一方から神は然う云ふ性質を備へて居ると論結し得るので、是に由つて觀ると此の世界も人間も、神の能力と其恩惠の方便ならざるはなく、ライブニッツは「自然は神を知るの形狀なり」と云ふて居るが、其議論は、正鵠を得て居る。宜しい。

ハ、人間的證據論

それから人間的證據論に就き、お話仕樣。これは人間を基礎として神の存在に歸納するので、換言せば爰に人間が造られて居るから、其の造られて居る者から造つた者即ち造物者を歸納する論である。偖て今日は以前の樣に精神は自然の物質と同一物だと云ふとを嚴格に固守して居る人はないが、併し幾分かまだ殘つて居るのは彼の物質論で、此の論に由ると、人間はあるも、それによりて精神的の神を歸納す

る必要はない。世の中に在る物は、皆物質より成る物なれば、之に據つて總ての物を說き明す方が宜しいと云ふのである。併し之に就ては一ッの問題が起つて來る「若し物質で總てを說き明かさんとすれば、人間のみが何故思考するとが出來るか」と問はねばならぬ。例へば此處に在る物質即ち机でも、木でも、草でも、考へさうな物ではないか。或は動物も、矢張り人間の樣に考へさうなものではないか。尤も動物は若干考へるとが出來るが、人間とは比較にならない。又他の物躰も動物の如く、何故考へる事をせぬのであるか。人間が考へるのは、其原因がなければならぬ。其原因に歸納せしむるではないか、と論ずる事が出來る。彼の唯物論者の代表者と云ふ可き、獨逸のヘッケルは「人間の中に考へる力がある樣に、他の物質中にも、亦考へる力が這入つて居る」と主張する事を毫も厭はなかつた。併し果してヘッケルの論の如きであるか。吾等が今日實驗する所に由れば、「是は主張にのみ止つて居る」を謂はねばならぬ。此の自然中に在る所の物を觀察するに、思考し得ると云ふ、一の大區別、即ち他の物と異つた大能力を人間は有つて居る。之を觀て批評家としては有名だが、哲學者としては隨分淺薄なりしダビド、ストラウスと云ふ人は、其有名なる著書「舊新信仰」の中に「自然は自分より以外に超出せんと欲したものである」と論したが是餘程不思議な論と云はねばならぬ。「自然は自分の範圍を超えて、外へ出樣と仕た者であつて、即ち自然の事實に止らず、其れより以外に出ん事を求めた者であるとすれば物

質に其れ自身より以外の能力が出來たのである」と云ふ意味である。しかし自然が其範圍を超えて外に出樣と思つたのだ、と云ふけれども、思ふ事の出來るのは、人間の如く、思考する者でなければならぬので、故に物質が思考すると云へば、ソコに思考の能力が這入つて居らねばならぬ。若し其れがあるとすれば、誰が左樣な能力を植え付けたか。私も亦斯う云ふ能力を有つて世に生れ出た者だから、私が同じ思考力を物質の中に入れる事は出來ない。又此の思考は物質とは異なつて居るから、物質が思考する能力を造る譯はないのである。シテ觀れば此の人間の思考力の本原は、私共でもなければ又物質でもない、其他に第三者即ち我よりも、物質よりも以上の者があつて、此の原因となつて居るのだと謂はぬばならぬ。何となれば結果は原因に無い物を含み得ざるは、論理の示す所で、結果に據つて原因の實を推して觀ると、人間に思考力即ち精神を置いた者は、亦精神ならざるを得ない。故に此の人間の本體より歸納して、精神の原因を尋ねれば、必ず精神的の者であらねばならぬと云ふ結論に達する。併し此精神的の原因者は如何なる者なるかと云ふと、此處で定める事は出來ぬけれ共、然うなければならぬと論ずるは、論理に反せざるのみか、自家撞着でもない。

偖て然らは其原因は果して人格を有して居る者か、と云ふに、其は他の問題になるので精神的の原因が世の中になければならぬとすれば、此原因者は人格を備へた

人格的の神が、世の中に有ると論結すべきかと云ふに、其れは出來ない。人格を備へた世界の原因者に歸納するのには、廻道を仕て論結するのである、即ち吾人が知れる者の中で最も高尙なる者は何ぞと云ふに、人間の精神、即ち人格を具へた者、我と云ふ意識を備へたる者の外には無いのである。故に之より世界の事を推し考へて、其原因ありとせば、人間に似た者か、將た其れよりも尙高い者かと云ふのは、適當な理窟であるなれども直に人間と同じ人格を有する神があるとは云はれないが、少くとも之に似た者、若しくは其れ以上の者が、人間の原因になつて居ると論ずるのは少しも差支へない、尤も其神と名附くる者が、何程高き者なるかは、私が爰に斷言するを要せぬのみか、之を爲すのは少し權限を超えた事であらうと思ふ。之に就き英吉利のスペンサー……彼は不可思議論者であるから、或は人が意外に思ふかも知んが、私の云ふ所と類似の論結を爲て居る。其れは、「此の世の中に在る物の本躰は認識する事が出來ぬ。然らば如何にして世界の原因を探つて行くかと云へば、只比考的に論結をするので、之を爲るには、人間を基礎とし、其精神上の事實と、世界の原因者とを對比するのは、少しも不都合でない」と云ふて居る。猶一例を取て申せば、亞米利加の思想家エメルソンは此の世界の原因は、世界以上の者、即ち「ユウベルゼーレ(Uberseele)である」と云ふので靈魂以上の者があつて世界の原因になつて居ると考へた。即人格以上の者と云ふ意味である。勿論原因者は、人間の有する人格とどれ

程比較し得る者かと云ふとは、今日論結する事が出來ぬ。是は、前に述べた通りなれと、兎に角孰れの方面から推しても、世界の原因者は人格を具へて居る者だと云ふて、不都合はない、或は人格以上の者なりとすれば、人格と云ふ性質も其中に在りと歸納するのは、差支ないしかし誰も彼も斯く考へねばならぬと强附る事は無論出來ない吾は斯く信ずるも、人は然らずとせば、仕方がない、若し强附るとが出來れば、滿天下皆人格的者有神論者ならざるはなし、と云ふ有樣でなければならぬ、けれども大思想家すら斯く考へぬのは、其人に他の思考があるからである。

右の如く神は人格若くは其れ以上の者であると考へれば、神と人間との交通が付くべきである。是れ此觀念を宗教に應用して大切なものである。神と人間との交通が出來れば、其親密なる事を言ひ現はさんが爲に基督教では神を「父」と稱へた。是れは、少しも不都合な話でない。又基督教會の教義に「神人秘合」(unio mystica)と云ふがある、是は人間の內心中神と靈魂とが一に合し、極く親密なる關係を顯はす事である、が、其れも成り立つ事が出來る、或は基督教に「聖靈」と云ふ事がある、是も亦人格を具へたる神の靈の意味で、此の事も不都合のない譯になり、又吾々基督教信徒等が行ふ祈禱即ち人間の精神上神と交はる事も出來得べき譯になるので、人格を備へた神と云ふとは宗教上の點より見れば、最も大切な事である。

二、道德的證據論

其次は道德上の證據論で、其立方が二つある、輒ち人が「是は道德に缺けて居るとか、或は缺けて居らぬ」とか感ずる事と、今一ッは「道德上の法則が世界に行はれて行く」事とである。

道德上の標準と云ふものがある、其規律を人間が各自守り、而して之が爲に誰れでも道德上の感情を持つて居る。乃で自ら道德的の者だと感じ、若しくは或る行を爲せば、其れは道德に合ふとか、或は反した事だとか感ずる。勿論是は各自內心に起る倫理上の意識なれど、疑もなく人の我儘に左右し得ざるものであると、猶ほ例へば裁判官の如き者である。私の今日仕た事は、「善い業なり」と思ふ場合もあれば、或は「惡い事だ」と判決を下す時もあるが、其判決は實に公平無私で、自分の欲する所に味方を仕て呉れよと云ふも、容易に味方もせぬが、又望むでも反對も仕ない時もある。此れは少しも動かす可らざる勢を以て判決する。時には自分が己れを辯護せん爲に種々原因を求めて、其聲を弱めんと試むるが、其判斷を弱める事は到底出來ない。私共は此の裁判者を名附けて良心又は良心の聲抔と云ふ。實に毫も假す所なき嚴格な奴が、私共の意識中に坐つて居る。ソコテ「其處にドウして斯かる能力者がある」かとの疑問は起らざるを得ない。時に或る論者は「成程人間の意識中には、然う云ふ者があるか、是は感情抔から出て來るので、其良心の云ふ所、人民に由つて違つて居る、勿論文明人の云ふ事は、大躰同じてあらうが、天下の人民皆同じ良心を持て居ると

は謂はれない、日本で許すべき事も、他國では容さぬ事あり、他國で善とする所も、日本では可(い)とせぬ場合もある。例へば文明國民は、人を殺すを以て、非常に倫理に背いた事として居るが野蠻人民の處に行けば、他國人が來れば必ず殺さねばならぬと云ふ眞心を持つて居る。人を殺すも悪と思はぬのみか、適當な事を仕たと感じて居る。彼の臺灣の如き地の土蠻を例として考ふるも、彼等は他國人が國境中に這入つたのを、殺さりしならば、眞心から賞められる。故に眞心は種々に違うではないかと云ふ論を立てる人もある。併し爰に注意せねばならぬ事は、成程眞心の云ふ事は色々に違ふ場合があるけれ共、眞心の命ずる命令の力は、常に同一の勢力を以て居るので文明人に命ずるも、野蠻人に命ずる所も、動かす可からざる勢力がある。極く簡潔に言へば、眞心の働く勢力は絶對的である。尤も其内容はと云へば、比較的或は相對的と謂はねばならぬ。だから命令の勢力より云へば、絶對なる神が其の原因で命ずるのであると結論するも、敢て自家撞着とは謂はれない。例へば裁判官の宣告を下す如き者で、日本に於て裁判官が宣告するのも獨逸に於て下すのも、方式上違はない最高等裁判所の裁判官が下した宣告は動かし能はざる効力を有ッて居る。併し其判決せる事柄に就ては、或は日本に於てすると、他國に於てするのとは違ふ場合がないとは謂はれない。即ち其事柄は比較的であるが、其方式は絶對的である。然ちば此の絶對的の形を眞心に與へた者は、誰であるかと云ふ疑問が起る。ソコデ

絶對の神が與へたのだと云へば簡單な譯なれどかく答ふるも、何人にもソレを信ぜしむる程に、此の論に効力がない。だから他の異論者も起るので、「人間は眞心を有つて居る、けれ共之は絶對の者が與へたのでなく何千年以來受けた教育の効力より生じた者なり」と論ずる者もある。私は勿論此の説に從ふ事もせず、又信じもせぬが、絶對的に「然らず」と云ふ丈けの理由を有たぬ。故に斯く主張する者があつても如何共する事は出來ぬ只有神證據論を之れに對峙せしめて云ふに止り、絶對的に之を打ち破る事は無論出來ぬ。

第二説は世界に道德上の規律がある事より推して、道德上の規律を立てた者に歸納する證據論であるが、爰には一ッの先決問題がある。と云ふは、世界に道德上の秩序なる者が存在せるや否やを先づ定めなければならぬが、世界の秩序は一歩も倫理道德を離れて居ない、との證據を立てる事は出來ない。だから先づ實に斯樣な道德上の秩序が存在して居ると信じて居らぬはならぬので、然らざれば此の證據論は倒るゝに至るのである。

世の中の人は、善は必ず賞せられ、悪は必ず罰せらるゝと云ふが、果して然うであるか、或は世人の經驗する所に由れば、悪を爲すも罰が直に來て苦む事の無い場合もある乃で或は勿論外形上の罰は來ぬが、併し内心上の罰は必ず免れ得ざる者で、例へば人を欺くとか、物を盜むとか、金を胡魔化すとか仕た時には、必ず其人の心中に

不愉快を感じて苦む者で、コレは決して免れ得ざる者だ、と主張するが、果して是等の者が毎時も悪いことをした時には心中快々として不快を感じて居るか、コレも疑はしい點がある。成程道德上の敎育を受けて居る者なれば、些少の悪を爲すも、必ず心に苦痛を感ずるに違ひないが、併し其苦痛を感ずるにも、極く僅で左程に思はない者もあり、或は一生涯ソレを感じて苦しむ者もある。私は斯く感ずるが、諸君方も然うであらうが、他の者は吾々と同感なるや否や、其れは一ッの問題である善には必ず善報があり、悪には必ず悪酬が來るから世界の秩序は然う云ふ樣に成立つて居るので。故に其秩序を造つた者がなければならぬと論結する譯には行かぬと思ふ。それだから此の辨明は、總ての有神證據論の中で、最も弱い者なりと私は考へて居る。

乃で又此の世の中以外、即ち來世に於て善悪の應報は必ず來る事を說く基督敎の信者もあり、佛敎も之を唱へて、彼の地獄極樂抔のある事を說く者あれど、果して來世には地獄や極樂が有るか無いか、ソレは見て來た人が無い以上、其れを土臺にして道德的證據論を立てる譯には行かない。兎に角世界に道德上の規律が行はれて居る事を受け入れて之を信ずる者があるのに、誰も之を妨げる事は、無論出來得ない譯であるから、既に規律の成立を信じた以上は、世界の原因者は其道德を行ふ者なると同時に、道德的の性質を有する者なる事を信ずるのに、少しの妨もない理で

ある。

宗敎では「神は神聖にして犯す可らざる者なり」と云ふが、是は道德の規則を守り之を實行する事が出來るとの意味で、是より宗敎は道德と相結んで離る可らざる關係を生じて來るのである。吾々人間が世の中に於て、如何なる人物を一番高しとするぞと云へば、倫理道德の上から、極く高い人物を最も高尙なりとするのである。此の點より考へて、若し世の中に原因者がありとすれば、其れは吾々が最も高しと信ずる者と仕なければならぬと結論するのである。併し是れも證據論としては弱い者であると私は考へる、

ホ、宗敎的有神證據論

次の題は宗敎上の證據論であるが、是は前に若干申して置いたから、短く云ふ事も出來るし、且下段の半分は眞の證據論と云ふ譯でもない。此の論の一ッは、宗敎が客觀的に存在する事、並に宗敎の主觀的事實に基き立論ずるので、客觀的に宗敎があると云ふのは、歷史上其が幾らも存在して居る、其種類は前に申して置いたが、其れに就いて論を立てるので、羅馬の哲學者チチェローは「天下に宗敎が擴がつて居て、諸の人民は皆之を奉じて居る。然れば神もなければならぬ」と云ふて居る。併し是は人間は皆な神を信じ、信仰を有つて居らねばならぬ事を證據立て得るのみで、此を證據として、客觀的に神あり、と歸納する譯には行かない。之を歸納してもソレは必然

的ではない。何となれば總ての人は精神の組織上、然う考へねばならぬ。けれ共そう考へねばならぬから神があるとは云はれない。但しかく云へば思考上、現象を説明するに、最も單簡である神があつて、人に之を信仰せしめる樣になされたのであると云へば天下にある宗教存在の理由を極く簡明に説明することが出來る。其外に所謂實在上の證據論と云ふのがある。是れは煩鎖哲學が盛んであつた時に、巧に有神の辨明を拵へたので、今日では實に價値無き議論となッて居るけれども有神證據論には毎時出る事だから、私は只爰に引いて置きたい。此の説を立てたのはカンタープリーのアンゼルムで、此人は一千百零九年に沒した。渠は神があつて其神は最も完全なる本體を有すとすれば、神は總ての屬性を有せねばならぬ。而して其屬性中には存在てふことも亦屬して居るから、最も完全なる者は存在せねばならぬ屬性をも有する即ち存在せねばならぬ、屬性があるから、其神は實在して居る者なざるを得ない」と論じて居る、是は七百年の長き間、動かす可らざる議論となつて居たが、カントが出でゝ其誤謬を論破仕してしまッた渠は「成程人は神を考へる、併し之を考ふる時は、其れが存在仕て居る。けれ共何處に存在して居るぞと云へば、思考中に概念として存在仕て居るので概念以外に存在して居るかと云ふことは別で、概念の存在で客觀的の存在を證明する事は出來ぬ」と云ふた。是は概念と客觀的の存在をアンゼルムが取違へて居るのをカントが觀破したのである。又デカルト

此の人は二百五十年程前に死んだ人であるが、其説も今日に至りては最早取る事の出來ぬ者となッた、其説は「人が神を想像するに當り、完全なる者であると考へて居るが、此の思想を有つのは、完全なる者があつて、之を與へたのでなければならぬ」と論じたので、是も概念と實在とを混ぜた者である。完全なる者が無く共人間は完な者を考へ得る事が出來る。人間は不完全だが、不完全より推して完全を考へ得るので、不完全を顚倒して考へれば、完全だから、之を土臺にして完全なる者を想像する事が出來る。故に是も然らざる事を得ずと歸納するに足らぬ論法である。今一ッ此の證據論を改革仕た人がある。其れは今日も生きて居る有名な神學者で、又哲學者たるプライテレルで、其説は實在的即ち「オントローギッシ」とは「何ぞや」と云ふので「オント」は、實在「ローギッシ」は考へる義である、乃で「オントローギッシ」は實在と思考と云ふ意味である。即ち此の二ッは相一致せねばならぬことを指して居る。實在と思考とが一致するには、實在及び思考を總べて居る第三者が其處に在る事を歸納せしむるものであると云ふのである。實例を取つて説明すれば、天文學者が二人居つて「一千八百九十九年の八月廿日には、日本で月蝕がある」と想像上で計算し、其説を公に仕たのが日本に傳はり新聞紙が之を書き、吾々も考へて待つて居ると、果して一千八百九十九年八月廿日に月蝕が起つた、すると前に考へた事と物質上の實在とが、相一致仕て居る。斯く思想と實在と合して來るのは、不思議だ、斯う合す

るのは、思考のみにあらず、實在のみにあらず、之を結び附ける者がなければ、斯く合う筈がないと考へて、物質上の實在及び思考以外に在る者は、神であると論ずるので實在證據論としては、取るに足る說なれども、果して然るや否やに至つては、私は物質論者に贊成する者ではないが、斷言するとも出來ない。素より物質あり、精神ありとして、物質上の實在及び思考がある所から、其兩者に跨がる原因ありと歸納する事は、餘り妨なき事と思ふ。之より論じて神の事を云のは、敢て不當でない。

此の宗教歷史上の議論、及び實在上の證據論が、ドレ丈け宗教上の價値を有して居るかと云へば、是は外界に於て神の存在を求むる事を示す者でなく、人心の內に這入つて成程歷史も然うであり、思考も然うである。しかれば我は神に就いて何と考へる可きか。我の中に神が存在して居ると信ずる意識は無いかと思はしむるので、神と云ふ思想は、或は敎育に由つて、或は傳說に據つて生じて居たのではないか、と云ふ人があるけれ共、是は敎育にも非ず、人が與へし者にあらず、天然自然に奪ふ可らず、與ふ可らざる者が、吾々の心に這入つて居りはせぬかを檢査せしむる者で、ある。私自身は是等の證據は、議論としては微弱なる者と思ふ。けれ共吾が心中に「神」と云ふ感情あり、思想ありて、奪ふ事能はざる者となりて存在して居るのは、自分も確信する所で、是は私をして信仰に至らしむる一つの大な士臺であると思ふ。斯の如き證據論は我等を鐵の鎖で繋いで引張つて行く樣に、ドウ仕ても神を尊信

せねばならぬ樣にする効力はないが、併し神を信ずる事が、理屈に外れて居らぬ者だ云ふ丈けの土臺には十分なる吾々は學術上の辯明に據つて、必ず斯の如くであると云ふて、誇る事は出來ない、此處では謙遜ぢて、而して宗教の辯明を學術以外に求めねばならぬ。其れは何に據るかと云へば、則ち神が我等を斯くの如き地位に立たしめたのは、吾々が神の存在を信ずるのは各自の自由な決心に據らしめる爲めなので、神は私共を强いて信ぜしむるのではない、我等をして自由の意思の決斷を以て、神を信ずるに至らしめる爲めである。(「ガラテヤ」書四章六節、「コリンタ」前書二章十節參照)

六、吾人は如何にして神を知り得るや

天啓の本躰

甲、超絶說

今日の題は、「吾人は如何にして神を知り得る歟」と云ふのであるメレヂ前の講義で神の存在の證據論は種々あるが其證據論は皆な吾々が神の存在して居る事をドウしても信ぜねばならぬ樣に、證據立てゝは居らぬ、即ち無理壓附けに之を信ぜしむる力は無いと申して置いた、併し是は理論から考へた話で、私自身に於ては、神のあることは堅く信仰して居て少しも動す可らざる者になつて居る。故に是から後に述べる事も、自分の信仰に基き神の在る事を土臺にして御話致すのである。さう

せんと宗教の事を論じても、皆な無益になッてしまう。此の信仰があッて、始めて宗教上神の事を云ふ理由がある。併し神があると信じて居る者でも、「神は吾人と何の關係もない、神は存在して居るに違ひ無いが、其れは吾々人間と毫末（スコシ）の交も無い者で丁度神は雲の上に隱れて居て、之れを透して吾々は見ることが出來ない」と考へる者もあるげれ共私は此の説を信ぜぬので、自分は神があるのみならず、之に就いて神を知る事が出來、實驗する事が出來ると云ふ信仰を有つて居るソコデ此の神はドンナ者かと云ふとを、今日お話する積りでは無い。吾々は神がある事を知る事が出來るか、若し其れが出來るならば、如何なる道に憑る者であるかと云ふ問題を論ずるのである。

諸君はお聽きにもなつて居らうが、哲學の中に不可思議論と云ふのがある。其論は「神又は絶對或は人間の五感以上の事は、到底人の智識で悟り得るものではない」と云ふのであるが、此の絶對や神を知る事は出來ぬと云ふ説の中にも、若干の眞理が含まれて居る。如何（セ）なれは世の宗教家たる者は、或は往昔から教會が唱へた教義を、其儘受け賣いで信じて來て、神の事柄は詳細に知る事が出來ると云ふて居るげれ共神に就き一伍一什細かく知る事は、吾々の智慧の及ばぬ事で、且つ論者が神のとを色々言ふにしろ、其は恰も譬喩であッて、神の事を其儘云ふ事は出來ない、又吾々は神に就き、無論何も彼も知ると云ふ事は出來ぬ。併し何も彼も知り得ぬと云ッて

一ッも識らぬと云ふのは誤謬である。人間は元來神を知ると云ふ需用を持つて居て、神は己れの目で見る事も出出ず手で摑む事も出來ない、げれ共之を知らねばならぬ。又五感の作用を捨へた者がある、其者を知らなければならぬと云ふ心の需用を有つて居るので、是は人が止ても止める事の出來ない一ッの感情であるので人間が種々世の中の事を思考仕た其の最終極には神を立てた。丁度圓い天井を段々に兩方の側から積み上げて往つて、一番終りの石が頂上に立つ樣に、種々組み立てた最後の考へとして絶對或は神と云ふ事に及んだ。其れを仕ないとドウも不足を感ずる傾向を有つて居るので「神に就いて何か知り度い」「神は如何なる者なるかを」推量せんとするのは、人として抑へられぬ感情であり、需用である。然らば其神を知る方法はドウであるかと云ふと、總ての宗教が曾同じ考へを有つて居る。即ち神の啓示（Offenbarung）に由りて知る事が出來る。即ち神が人間に己れを知らせるから、人が之を知り得るのであると考へて居る。私が今日御話仕度と思ふのは、此の啓示神が己れを知らせるとは、ドンナ事であるかと云ふとである

イ、超絶的天啓

神の啓示に就いては、二ッの全く違つた思想がある。其一ッは超絶的（Transcendent）で今一ッは包含的（Immanent）である——超絶的の啓示とは何事も外部即ち上から來るので、丁度他所の人が來て話をする如く、神が自分の事を人に知らすと云ふので

ある。今日は啓示は外から來るのでは無い、皆人間の內部即ち精神の中に起るのである、と云ふのである。

超絶的に神が己れを人間に知らすと云ふ昔の考は、純然たる超自然的觀察で神が人に魂化(うつ)ッて來ると考へたので、其場合には最早其人間の精神が無くなり、自分の躰中に神が這入ッて來たと云ふのである。故に其人の爲す事も語る事も、自分の考へではない、神がするのである。皆神の所作(わざ)であると考へるので、譬へば狐が魔(つ)いたとか、犬神が附いたとか、狸がついたと云ふのと同じ譯で、斯樣な事は日本にも亞米利加の土人中にも、亦蒙古人種中にも、隨分擴がつて居る。現に日本に於ける天理敎抔は然う云ふ考へを有つて居るし、或は身延山の樣な處で類似の業をする者を見る事が出來る。然し是は進歩ある宗敎にのみある事かと云ふに然うではない。基督敎でも此思想が非常に發達して居る。所謂舊派に屬する人はさう考へて居る。人間が神の啓示を受ける時には、何も自分で働くのでない、受身である。恰度人間は笛の樣な者で、神は之を吹く者である。人間は神がする通りになつて笛を吹いて居るので、人間が自分の考へを云ふのではない、神の與へる所を其儘云ふので、恰も器械同樣である。尙ほ他の例を用ふれば人間は言ふ方でなく、書く方で、人間は神の筆である。人は筆の樣に無意無識で其儘寫すのである、と云ふ說を爲すやうになつた。併し今日私共も此の說を信ずるかと云へば、然うではない。狐が魔いたとか、犬神が附

いた抔云ふに似た信仰は、今日と雖も信ずる事の出來ない樣になつて來た。斯かる信仰は誰も妄信だとて擯斥まやうが、實際既に然うなつて來たのである。今一ッ此の超絶的啓示を智識的に說く者がある。其れは神が人間に啓示をする時には、文章、規則、敎理等を整然と拵へて完全無垢なるものを其儘人に與へて知らすので、其場合に於ても人間は自分の方で働いて神の事を知り又は悟るのでは無く、完全になつて居る者を、神が單に投げ與へるのである。斯の如き事の啓示を得れば忽ち完全な眞理を知る事が出來ると考へるのである。斯の如き事が基督敎の中に於ても敎へられて居るのみならず、舊譯聖書の中にも斯う云ふ考を爲して居た者があり、「ユデヤ」敎にも同じ說を爲して居つた者がある。例へばモーゼは神から六百條の啓示を受けた者であると說いて居た。又「マホメット」敎に於ても、此の說があッて、其經典「コーラン」はマホメットが神から授かッた啓示其儘で、決して自分が拵へたので無い、と云ッて居る。或は印度に於ても同じ事があるので、經文「ヴエダー」は矢張り人間が拵へたのでなく、神が啓示仕た書物だと考へて居る。素より往昔文明も進まず敎育も無い人間に對して、唯一ッの神があるとか、或は絶對の神とか云ふ事を明に悟り得る樣に說くのは誠に困難で、迚も之を悟らせる事は出來なかつた。往昔の人の考へは、智識が缺けて居るから、眞理を悟るとは六ケ敷いので、今日から考へると神の啓示抔と云ふとも、例之完全の啓示があッたにしろ悟る理由

がない。若し完全な啓示があるとしても、之を人間が悟るには少くとも、其れと同時に考へる能力がなければならぬ。唯受身に啓示を受ける事は出來ない。プイエルバッハは「總べて啓示は人間が之を拵へるのである」と云ッて居るが、寧ろ今日は其の方が考へ易い位である。併し私共は往昔の人の樣な神の啓示の解釋を容れる事が出來ぬから、總べて啓示は信ずるに足らないか、啓示全躰を放棄せねばならぬかと云ふに、往昔の人の如く考へずとも、他に考へ樣があると思ふ。

ロ、包含的啓示論

其次に包含的啓示論とは何ぞと云へば、神の啓示は人間の內心に行はれて居るので、外から示されるのでは無いと云ふのである、此の啓示說を採る者は理想論者で、なければならぬ。即ち「我々には精神がある」と信ぜねばならぬ。若し唯物論者の樣に「總ての物は曾物質である」と云ふ如き議論を有つて居たれば、此の啓示も打ち棄てゝ了はなければならぬ。併し唯物論は無論私の信ずる所でもなく、且つ今日の哲學科學の進步の上より考へて觀ても最早斯論は撲滅せらるべき秋に達して居る。此の唯物論は此處にも容れる事が出來ぬが、全躰吾々の思想界に入る丈けの力が無くなつて居る。故に我々は靈魂即ち精神を有ッて居る者だとするので、其精神は無論有限である。が靈躰であると考へたならば、神の啓示が人間の心の中で悟られると云ふ事は、毫も自家撞着、考ふ可らざる事ではない。充分道理のある說である。吾々

人間の有する靈魂は無論無限では無い、けれ共其性質に於て、神に似た者であるから、二ッの似た者が一ッの交涉を起す……、其れが互に觸れる所のある事を考へるのは、當然で無理では無いが併し之を考へるに當つて、無限の靈と有限の靈とが如何にして交りをするかと云ふ問題が起るが、其れは人間の意思でもなければ、又感情でも智慧でもない。即ち此の智情意三ッに涉つて居る。人間の精神の奧底で人間の靈と神の靈とが觸れ合うのであると謂はねばならぬ。斯の如くして神の啓示を受けた時に啓示は、智にも働き、情にも働き、意にも働いて來る、併し之に就いても一ッの問題が起ッて來る即ち其れは「如何なる有樣に、其人心の奧の中心點を考へ神と人間の靈とが相觸れるか」と云ふ事で、其問題を私が確に斯うであると答へる事は出來ない。乃で論者は返問して「お前は主張する丈であるか、お前は信ずるのみで、說明することが出來ぬでは無いか」と云ふともあらう。けれ共其駁論は未だ當つて居るとは云はれない。成程私の立脚點が弱い事は私も知つて居るが、併し弱わければ信ずる事も、主張する事も出來ぬかと云ふにはそんな理由はない。今一例を取つて之を明かにせん。私が或る人に對ひ「お前は腕を動かす事が出來るか」と問へば其人は「斯の如く動く」と云ふて動かして見せるならん。然し「何故に然う動くか」との問題を起したらば、或は筋肉の構造を能く知つて居る解剖學者でも、生理の事に委敷人でも「人間が筋肉を動かす理由は斯うである」と說明する事は出來ない。動かす

事は知つて居るが、如何なる理由で、腦の力、精神の力と身躰とが一致して働き腕を動かして行くのか其れを說明する事は出來ん。或は又「地球が此の大空に懸つて居ッて障碍なく運轉して居るが、之を運轉せしむる者があるか」と問へば「其れは引力である」と言ふならん。併し、「其引力は如何なる者で、ドウ云ふ工合で、此の地球を運轉せしめて居るか」と尋ねたらば、之を說明する事も出來まい。勿論運轉の法則は云ふ事が出來るけれ共引力其者を說明する事は出來ない。單に其現象を人が見る丈けで、其働きを起して居る理由は說明が出來ない。故に有限の靈と無限の靈とが交りをする、其中心點を云ふ事が出來ぬのも、今譬喩を取ッたのと同じことで、說明するのが困難である。成程啓示の說明に弱點がある。けれ共之と同樣な弱點は實驗の事柄に於ても、皆有るので、其れは免る可らざる事だから、他の學術に比して、此の說明が弱いと云ふ事は出來ないだから充分信ずる事が出來る。

扨神の啓示が人間の心の中に起るとすれば、爰に啓示をする者は、神であり受くる者は人間であるから、其れが現はれて來る時は、人間的になつて來なければならぬ。故に神は完全なれども、人が神の啓示を受けるから、何でも悉く知り、行ふとが出來ると云はねばならぬ。人間は神の啓示を悟るのだから不完全な點か存じて來ると は云はれない。譬へば神は大海の如く、人間の靈は小なる貝殼の如き者で、貝殼に大海の水を濺ぎ入れる事は出來ない。即ち貝殼丈けの水しか這入らぬので、此の事に

就きては、基督敎の哲學者アウグスチンが嘗て云ふた事がある。アウグスチンが夢を見た。其夢は自分が海岸を步いて居た所が、一人の子供が池を造り頻りに海の水を汲んで居たから「何を仕て居る」と問ふと、「此の海の水を池の中に掻い出して入れて了はうと思ふ」と答へた、詰らぬ事を云ふお前の造つた小さい此の池に、此の大海の水が這入るものかと云ふと、其子供が「併し大きな神の絕對の事を、小さな人間の腦に入れ樣とする者もあるが、其も私の今爲て居るのも同じ事だ」と答へたと云ふ話であるが、實に此の通りで、迚も大なる神の事を、小なる人間の靈の中へ入れて了う事は出來ない。或は鏡に比べて云へば、之は物を寫す物であるが、其鏡の色が若し赤ければ、うつる物には黃、白、黑の色があつても皆赤に寫るのと同じで、人間の靈は恰も鏡の如く、之に寫る靈は皆赤い色が寫るに違いない。又た鏡が凹鏡又は凸鏡などになつて居れば、外物を寫した時に、皆曲つて寫るに違ひない、決して外物を其儘寫す事は出來ぬ。人間の心も皆な之れに同じで神の啓示を寫す時には、其れが皆人間的の不完全をもつて來る。此のとは一ッ此處で考へて置かねばならぬ。

今申した事は、啓示一般を論じたので、之に據つて啓示は有り得べき者なる事が考へられる。併し猶特別に神の啓示がある場合もある。其れは人に由つて特別なる働きを、人間が有つて居るのは、皆此の啓示の中に置いて考へる可き者と思ふ。例へば無學な者でも、學校に通つて學ぶ時は、己れより澤山

物を知つて居る教師に習つて、終には智識ある人になる。けれ共學問でも學術でも到底學ぶ可らざる所があるので、勿論或る點までは技術を習ふ事が出來るが、併し天質勝れたる技量は學ぶ事が出來ぬ。教師に習ふ時は、手本と同じものを書く事が出來る、けれ共一ッの發明を仕て自分が特別の物を造るのは、天性勝れたる所がなければ、仕難いので、斯う云ふ能力者を「ゲニウス」(Genius)即ち天才とか云ふ。其天才を有するのは、神の啓示を受けた者であらうと思ふ。啻に美術、學問のみならず、書でも歌でも詩でも皆同じ事で、或は韻を踐むとか、平仄を合すとか云ふ事ならば教師につけば學び得るであらうが、併し平仄や韻が合つて居るから其れで詩とは云はれない。詩の妙は其れ以外に存するので、之を得るには學むでも及ばない。此は政治をとる政治家にも應用する事が出來るが、其種々な天才がある中に於て、最も深く最も廣い者は、宗教及び道徳上の天才で、此は他の者に比し、最も神の啓示を現はす者と謂はなければならぬ。猶一例を取つて見れば、土を堀つて降る事僅かなれば、水が湧出ぬのである。併し之を堀る事彌深ければ、深き丈け水の湧出も澤山である。又井戸の周圍を大くすれば、する程水が澤山たまつて來る。其深くして大きな井戸は宗教及び道徳上の天才で、淺い物は啓示を得る少ないとか、又は澤山の天才を有つて居らぬとか云ふて宜からうと思ふ。

斯の如く人に由りて啓示を受けるに多少深淺があるが、併し如何に豪らい所の道

徳家、宗教家でも、勿論全く神の啓示を受ける事は出來ない。是は恰度前の具殻で。海水を汲んだ話と同じ事で……。尚廣くして深い井戸は水が純粋であるけれ共其堀り様に由つては——、或は淺いとか故障があるとかする時分には、泥水が出ると同じて、假令天の啓示を受けて居ても、人間的の作用が這入つて、水を濁らせる場合がないでもないが、併し天の啓示を全く受けない者は決してない。

丙、啓示の分類

前回には啓示とは如何なる者であるか、と云ふ事に就いてお話仕たが、今から其啓示の分類をお話しやうと思ふ。さうすると意味が自から明かになつてくる。往昔から啓示を分ける方法が種々あるが其中に、自然的啓示及び超自然的啓示、獨逸語で云へばnatürlichとübernatürlichとの二ッに分けるのがある。自然的啓示とは、此の世の中に在る所の自然即ち此の世界に由つて神の事が人間に現はれると云ふのを云ひ、超自然的啓示とは則ち啓示に因つて或は自然の法則に反した事即ち所謂奇蹟に因つて、神の事が人類に現はれると云ふのである。併し此の分類は私が首肯するのは此の世の中に自然の法則に反した事が行はれると云ふとは私が信じ得ぬからである。又自然的、超自然的と漠然云ふては、混雜を生ずる之を論窮して、何をか自然的と云ひ超自然的と云ふかと問ひ反して、其意味を定めて置かねばならぬ。

乃で何を自然と云ふかと云ふに、自然には二樣の意味がある。第一萬事萬物を總稱して自然と稱へる場合もある。然し斯く宇宙間の萬事萬物を總括するならば、別に自然とか超自然とかの區別を爲す必要はない。又今一ッの意味によると、自然は吾人の眼で見る所の物即ち物質的の世界を云ふので、吾々の眼に見えざる精神界に屬する者、即ち人間の靈魂の如き者は、靈界と稱へて、自然に對した詞に用ふる場合もある。斯く自然と靈界とを區別する場合には、神の啓示は自然的の者ではなくて、超自然的の者であると謂はねばならぬ。神の啓示は如何なる處に下るかと云ふと、人間の靈の上に下る。即ち靈界の事柄が人間の靈界に知られるのであるから、之は超自然と云ふべきである。

又啓示を區別して內心的即ちinnerlich及び外形上即ちäusserlichの者にもするがけれ共之は表面上の區別に留まッて居て、物の本躰を穿ッた區別ではない。なぜと云ふに如何なる場合に起る啓示でも、皆な內心に這入るのであるから、此の者が內心的啓示だとか、外形上の啓示だとか云ふ事は出來ない。人か總ての事を悟るのは、精神に據るのだから、啓示を悟るのも亦精神に據らねばならぬ。即ち皆な內心的の者と云ふべきである。故に此の區別は棄てなければならぬ。私の考へでは直接啓示と間接啓示とに分かつべきであると思ふ。直接啓示とは神も靈であり、人間も靈である から、神の事を人が悟るには、此の靈躰の神が、人間の靈界に知られるのであるから、之は

て己を示す方法を取つて來るのである。人間と神とが精神界で、相交涉し得ると云ふ、宗教の議論は私共の決して疑はない事で、此の直接啓示と云ふ事は、自分も深く信ずる所である。

啓示は斯の如きものであるが、然らば間接啓示は如何なる者かと云ふに、是は或る他の者に依りて、人間が神の事を悟るやうになつて來るのである。例へば他人の受けた啓示に由つて、私が神のことを悟るならば、是は間接の啓示である。此事も世の中に隨分在る事だから間接直接と分つも差閊なからうと思ふ、けれ共爰に考へて置くべきは、直接でも間接でも、神の事を其儘そッくり人間に知らせる事は到底出來ない。其啓示は必ず媒酌物を通して、人間に知られるので、總ての啓示は媒酌に依らねばならぬ。人間が神を知るのは、物即ち精神に依る。精神が手段となつて神を知るのであるから、直接に神の全躰を其儘心の中に寫す譯には行かない。神は大くて、人間の心は小いから、神を全く知る事は出來ぬ。それは神が自己を現はし得ぬのではなくて、人間が神の表す全躰を受け得ぬのである。羅甸語の諺に、有限なる者は無限なる者を理解する事が出來ない(Finitum non capax infiniti)とあるが其通りだ。直接にしろ間接にしろ媒酌物に依らねばならぬ。直接啓示とは、宗教上の啓示、神の事を直ぐに人の心で悟る事、又は格段なる宗教的の事實によつて神のことを悟る事であるが、或る意味にて云へば誰でも神の啓示を受けぬ者はない。又間接の啓示と云ふの

は啓示を受けた者が、それを他の人に知らし、さうして之れで他の者が悟る様になるのを云ふのである。例へば基督は神の事を悟つた、其れに依りて總ての人に神が表はれるやうになつた。即ち基督が直接に受けたる啓示に依つて、吾々は間接に之れを受けるのである或は自然の構造に依りて、或は歴史上の事蹟に由つて、聖書に因つて悟るのは、則ち神が己れを表はした啓示に因つて、間接に神を知るのである。啓示である。

丁、聖書と啓示

扨聖書と啓示の關係は如何なる者であるかと云ふ事に就いては、種々議論があッて、今もまだ之を爭ふて居る。「聖書は正敷神の啓示を表はした者である」と云ふ説もあり、或は「然うでない」と云ふ説もある、けれ共私共は源に溯つて考へて見ると神の啓示は舊いが、聖書は新らしいと謂はぬばならぬ。例へば基督に就いて考へて見ても、基督は少許の書物も書かれた事はない。自分の説を人に話した事はあッたが、基督が書物を編輯仕た事はなかッた。殊に新約聖書は、基督の死後初めて出來たもので、其一番前に出來た物は、基督死後十五年乃至二十年位立ッた後のとで、後でこそ聖書の中に其れが這入ッて、人の尊重する所となッたが、最初は聖書として書かれた物ではなかッた。基督の弟子が、自分の知ッて居る敎會に宛てゝ送ッた手紙に過ぎない。又新約書中歴史の部分に屬するものは、基督の死後五十年位立ッてから出

來た物で、矢張り之も唯だ基督の言行を書き集めたもので、何の爲めに斯く仕たかと云ふと、基督の言行が永く忘れられない様にと思ふた計りで別に是は神聖な書物で神の啓示は爰に在る事を示さうとの意でも何でもなかッた。其れから後になッて、聖書に就いて一ッの説が出來た。所謂「インスピラチオン」である。此説は平たく云ふと「神が聖書を書いた」と云ふ義になるので、神が啓示を人間に與へる爲に、聖書を其機械にして……丁度筆か笛か杯の様に人間を機械に使ふて神の命ずる儘を、其通り書かしたのが聖書で、聖書の一字一句皆神が吾人に告げた物である。だから、此の中に在る事は毫も誤ッた事はない。一ッ殘らず正しい、と信ずる。例之世界は聖書の創世紀にある通り、造られた物だと思ふて居る。故に此の「インスピラチオン」の説に據ると、聖書の中には絶對的の眞理が悉く集ッて居ると主張せざるを得ない。が果して此の説は正しいか正しくないか。之を正敷と云ふても、それは人々が唯自らさう信仰する丈けの事だ。併し此の説の起るには、色々理由があるので、吾人が宗敎の事を研究する上から見ると何の宗敎でも其經文は皆神の與へた物で、毫も誤謬はない、神の「インスピラチオン」が其中に存じて居ると云ふのは、天下一般の現象である。啻に基督敎で然う信じて居るのみならず、他敎の聖書も同然さう信じられて居る。例へば基督敎以前の猶太人は、如何なる考を有ッて居ッたかと云へば其信仰せし聖書、即ち今日の舊約聖書は、神の啓示で出來た物で、其中

に在る事柄は神の眞理を其儘寫した物であると思つて居つた。又「モハメット」教は其經文の「コーラン」を神の與へた物と信じ、印度人も其經文「ウエダア」は神が書かせた物、否神自身が書いた物で此世の中が出來ぬ前から既に神が書いて置いたので、「ウエダア」が出來て後神が世界を造りたと云ふ程に極端に信じて居た。然れば私共は此の宗教說を信ずるか、だうかと云ふに、無論宗教發達の理論上、此說は取る事が出來ない。けれ共其道すぢで一遍は經過せんければならなかつた觀念であつたと思ふ。

今云ふた直り總て聖書の中に記載してある事は、皆神の啓示した者だと考ふべき者ではない。さうせんと直ぐ衝突が生じてくる。即ち基督敎は聖書を固執して、神の啓示だと云ひ、印度人は「ウエダア」を固持し、「モハメット」敎は「コーラン」を確執すれば、互に他敎を排斥するので、歸する所が無くなつて其の中のどれが本とうのか分らん。故に私等が此等の說を見て、宗敎の發達上一度は經過すべき道であると考へた理が解るでせう。偖かうなると宗敎を信ずる者の中に、種々な考が行はれて來て、聖書を註釋する不思議な法が出る樣になつて來た。即ち其一は譬喩的に聖書を解釋する者で、例へば基督の時代にアレキサンドリヤにフヰローと云ふ哲學者が居つたが、舊約聖書中にある解り難き句を、譬喩的に解釋すると云ふて居る。例之ばイスラエル人の歷史の中にイスラエル人は牧羊者である、而して其牧羊者が、羊を牧ふ

爲めに井戶を持つて居つたと云ふ話があるけれ其井戶を有つて居たと、聖書に書く必要は無い。井戶を地に堀つて、其處から水を取らうが、或は降雨の水を溜めて用ひたので、井戶は滾々として流れ出づる泉で、之れは神の智識の絕えず繼續する事を、人間に表し示したのである。又之れに對照して溜つて居る水は限り有る人間の智識で、誤謬多き者を云ふものと解せねばならぬと解釋仕た。かう云ふものを譬喩的の解釋法と云ふ。今一つ例を擧げると、聖書の中に、或る男が或る年若き女を慕つた歌がある、是は純然たる俗謠の戀歌であるから、何故斯かる戀の歌が聖書の如き神聖な書物に這入つたかを了解仕ない。乃で之を解釋する者は、是は譬喩である爰に男が女を慕ふと云つたのは、神が人間を愛する事を示したので、人間或はイスラエル人民に對する神の愛を表はした者であると云ひ、或は茲に「男」とあるのは基督で「女」は敎會のとを云ふたのだと註釋するに至りた。けれ共能く之を穿鑿して見れば、今云ふた戀歌即ち雅歌には、此の意味があるのではない。純然たる戀愛の歌だ。以上に云つた樣な聖書に關する說は、遂に維持するとが出來ないで、一大變化を來たした。それは二つの事柄を發見したからである。即ち聖書は書物であるから、書いて傳つて居る。ところが其傳つて居る寫本に幾通りもあつて。それを比較研究して見ると、色々差異もあれば、誤謬もあるとを發見した。そこで詰りは何の本文が正し

いかと云ふ疑問が起つて來る。

乃で之を研究すると、勿論舊るいのが本統で、新らしいのは誤りを傳へたに違ひな い。と云ふものゝ、果して其舊るい書物は初めて書かれた物であるかと云ふ疑問が 起るが、さうでないとを發見する。して觀れば舊るい物にも亦誤謬なしとは謂はれ ない。若し神が折角自個を表はす爲に聖書を書かせたとすれば、何故そんな誤謬を 傳へるに至らしめたかと云ふ問題が起り、之が爲め學者は非常に苦んだ其れのみ ならず聖書の中には齟齬する所があッて、同じ一ッの歷史でも二度も三度も繰り返されて書いてある時もあるが、之を照し合せて見ると往々衝突する點が發見さ れる。すると何方が本統であるかと云ふ問題が起る。例へば基督の歷史に就きて考へても、幾等もある。一ッの方には「二人」とあるのに他のには「三人」とあるともある。事柄の上から云へば、是等は大なる差別ではないが、聖書の「インスピラチオン」を信ずるに至ッては、何うなつて居ても、宜しいとは謂はれない。ドチラかが本統でドチラかゝ嘘でなければならぬ。神聖なりと稱する書物が、斯かる間違ひを傳ふるは許すべからざる譯である。其れのみならず之れから推すと或は兩方共誤つては居らぬかとも疑へる。さうすると根據が益々薄くなる。新約聖書に就て、斯う云ふ說が起つたのは、十七世紀から十八世紀の間であるが、其時には基督の歷史に就いて齟齬して居る傳のあるのを發見したので、其中にも之が多いのは、耶蘇降誕と復活の歷史

である。降誕の歷史には基督の兩親は「ベトレヘム」に住つて居たが、耶蘇が生れると直に埃及に逃げたと書いたのもあり、或は又た基督の親は「ナザレ」に居たが、基督が生れる時には、「ベトレヘム」に往つて居つたと書たのもある。して觀れば何方が本統であるか、事が撞着して居るから解らない。又復活の事を書いた歷史にも、基督が復活して初めて現はれたのは數人の女であると書いたのもあり、男に現はれたと書いたのもある。其現はれた土地も、或は「エルサレム」であると云ひ、又は「ガリラヤ」なりと記したるのもある。シテ觀れば同じ啓示を受けた者が、同一の事を書いたのに、違つて居るのは如何なる譯であるかと、論難して此の點から聖書の不可誤說を壞す樣になつた。

今一ッ有力にして「インスピラチオン」說を擊ち壞すのは、近代の世界觀は奇蹟を受けない。爲めで、世の中の事は、自然の法則に從ッて出來て居る。然るに聖書の記事の中には此の法則に反する事柄が澤山ある。乃で若し奇蹟を取らうと思ふならば、近代の世界觀を取る事は出來ぬ。近代の世界觀を取らうと思へば奇蹟を取る事はならないと云ふ一か二かの場合に立ち至ッた。しかし近代の世界觀を取ッて、奇蹟を棄てるのは、今日の學問を仕た者の爲さゞるを得ざる所に違ひない。之れが爲めに「インスピラチオン」說は遂に破壞せられ、聖書の記事は悉く神が書かせた者であると云ふ說を眞面目に受ける者は最早次第に減じで來た。尤もまだ聖書には一點の

間違もないと信じて居る基督教會もあり、信者も無いではないけれども獨逸に於て基督教徒の學問して居る者、又は大學の教授などで、此の「インスピラチオン」説を主張する者は一人もないと云ッても宜しい。勿論牧師や信者には此の説を取る者もあるが、それも漸々なくなッてしまう。英吉利でも亦ただん〳〵弱くなッて行くので、大概「インスピラチオン」を信ずる傾向は無いと云ッても、過言ならずと思ふ。然らば聖書を如何に了解するかと云ふに歴史的に事實を探り又本文を考證して、其中の事柄を解かねばならぬとの説に成ッた。しかし事は大概極端から極端に走るのが通常で、此の適當な解釋法が勝つ前に隨分と極端な説がも一つあつた。それは殊に英佛に多かつたので、「聖書は本統の事を書いたものでない。あれに書てある事柄は嘘で、妄信から起つた者である。彼は人を欺く爲に坊主が拵へた物で、宗教家が人間を愚にする爲に發明し、壓制やりに信仰せしめたのだ」と考へた、

一般に社會が進んで來て此の説も亦弱わめられ、聖書は全く神の啓示なりと云ふ説と、聖書は嘘が書いてある書物だと云ふのとを、調和しやうとする樣になッて來た。其れは十八世紀の中頃に出た所の、彼の合理論(Rationalismus)で、是は如所なる點より議論を起したかと云ふと、眞理とはなにぞやと題する問題を以て起つたのである。即十八世紀の哲學者にウォルフ(Wolf)と呼ぶ人があるが其人が唱へたので、其れは完全な議論即ち眞理であると云ふたが、引續き問題を起して、「基督は神より智識

を受けて教へた者である。彼の説いた事は眞理である。若し之が眞理ならば、ウォルフ主義の哲學と同じ事を教へたのでなければならぬと云ふ議論である。所が新約聖書を讀んで見れば、渠の説く樣な事が書いてない。これは何云ふ譯であるか、と云ふ疑問が復た起つて來た。乃で基督はウォルフの哲學の樣な純粹な眞理を説いたのであるが、其當時の人が之を了解し得なかッた、其純粹な眞理を後世に遺して後世の人が始めて了解するに至つた往昔のモーゼの如き人も、神の眞理を受けて、ウォルフの説く樣な哲學を悟ッて居た、けれ共其れが傳らなくなつて居たと云うて聖書を解釋し樣としたか是は一つの誤謬だと云はねばならん。是れは今日の進化思想を全く度外視する者である、今日進化思想は吾々が何事を考へるにも應用する、けれもウォルフ流の説を唱へた頃には、此の思想が無かつた、況や基督の時代に於て今日にも應用し得る樣に考へて説く事は出來なかッたに違ひない。然し此の事を解して居らなかつたから、遂に無理な解釋をする樣になつた。已に今日では進化を土臺にして、進化思想を宗教上にも應用するから、啓示の事を説明するにも進化説を用ひて説いて居る。此の進化思想を始めて宗教に應用仕たのは彼のレッシング で、斯人は前世紀に於て、一ッの新時代を喚起するに足る有名の著述を爲した、其書は僅か二十余頁を充たすに足る丈けの文字であるが其主旨は實に一世の思想を變化すべき大動力になつた。此の書物は「人類の教育」(Erziehung des Menschenge=

schlechts) と云ふ名であつて、其中に神は何であるか、神は眞理である。神は又眞理を自分自身に藏して居るヨりでなく、之を人に表はすのである。併し之を人に表すに當りては人類進歩の階級に應ずるので、古代も今日も神の啓示に違ひはないが、併し古代には其時の人の解し得る丈け、今日は又今代の解し得る丈けの眞理を表はして居る。故に神が人間に示す啓示も亦進化する者だ、と説いたので、此の説の當を得たるとに就ては吾々も最早疑ふ事が出來ないので近代の神學は此のレッシング が唱へた説から出て來た云ふて宜しい。聖書の中には神の啓示があり眞理が現はれて居るが、其眞理を現はすには、順序があり進化がある。それで吾々は聖書の中には神の眞理が含まれて居る事を信ずるが、しかし此の中には不完全な者もあるが、唯だ其時代にのみ適當した者もあるが、兎に角皆な宗教上の啓示たる事を失はぬ。勿論基督とかモーゼとか、神の旨を受けた者、即ち最初の者が、聖書を書いたのではない、第二の者が之を書いて遺したので、即ち豫言者又はポーロの如きは、其人である。其中にも古代より基督に至るまでの神の啓示が、ドレ丈け進歩仕たかを、明に示してイスラエル人民の受けた啓示の遺蹟を爰に止め、且つ又最高の發達の程度に登つて居る宗教のとも書いてあるから、私共も聖書を悉く神の啓示であるとはしないが、其中には神の啓示を含有して居る事を見る、だから又た之を信ずるのである

聖書中の最も古いものが出來たのは、紀元前七百年から八百年の頃、即ち神武天皇の時代から百年程以前のとで其頃書かれた物である。又聖書の中には宗教上に價値ある事柄が多い。又新約書に就き考へて見ると、彼のポーロの如きは、自ら宗教上の啓示を受け又自身手を下して書き其ものは今日迄遺つて居て、當日の有樣を吾々に告げて居る者もあり、又基督自身が書いたのではないが、彼の福音書馬可傳馬太傳、路加傳の如きは、基督の言行を殊に能く見る事が出來る。即ち吾々が之に依つて、神の啓示の現はれた事實を善く伺ひ知ることが出來るから、吾々は特に之を尊ぶのである。

基督は宗教上の最大豪傑であるから、最も高尙に最も純粹に神の啓示を悟るとが出來又其とが聖書に由つて吾々に傳はつて居る。斯く考へれば吾々は今日の世界觀と宗教とを調和して互に衝突せぬ樣に取る事が出來る。是は私共が學術に依り考證に據つて得た正當な説で、基督は神の啓示を最も完全に得たる者だから、吾々は之を信奉するのである。基督が神或は之に對する事、又は人間と人間に就き、説かれた事には吾々も同意して其れを取るので、基督教は宗教上の地位より見ても、最も價値ある宗教とするを妨げぬのみならず是れと同時に、今日の世界觀、今日の學術とも決して衝突するものではない。

七、吾人は神を如何なる者と考ふべきか

甲、問題

前回に於て、吾人は如何にして神を知り得るか」と云ふ問題を論したが、今度は「吾々は神を如何なる者と觀念せざる可らざるか」と云ふ事をお話し仕様と思ふ。前に申した通り、私共は超自然的に神が自己を表はす事を信じない。故に從來の傳說を信ずる者とは、大に考が異るので、從來の傳說に據れば神が曾て己れを表はし、自己の本體及び性質は斯の如き者なりと委敷云ふて置かれたと仕て居るから、此の說を信ずるならば、神は如何なる者なるかとの問に答へる事も極く容易い。即ち吾々は神が己れを表した事に據り、其如何なる物なるかを、明に知り得るのである。けれ共さう都合よくはいかん。是は誤謬の說で、神が自個を其儘表はしたと云ふのは、決して歷史上の事實ではない。だから私共は其傳說に依る事が出來ない。乃で爰に「神は如何なる者と觀念せねばならぬか」と云ふ問題を引き起すのも余義ない理だ。だが吾々は、人間は神に就き種々想像仕て考へるより外仕方がない」と思ふ。斯く云へば「果して神は其想像の通りであるか」との問が復た起ッて來る。併しさうだか或はさうでないか之を定める事は實に仕悪い事で、例へば私が朋友の寫眞を持ッて居て而して其れが眞に其の本人に似て居るかを定め樣と思はゝ、本人と比較仕なければならん。所が本人が居ない。本人は見たともないとする時には、果して之が似て居るか、居らぬかを判斷する事は出來ない。斯の如く人間が神に就いて考へるにも、只

想像丈けで眞の神を見た事のない塲合には、其想像が果して本統の神に似て居るか又さうでないかを定めることは出來ぬ。是は唯だ人間の思考した者に過ぎない。斯く云ふとつまり吾々人間は神の本躰を其儘知る事が出來んとになる。其れは吾々に取つて甚だ殘念である。神を直接に知り得ないのは遺憾であるが、併し別に仕方がないから、「多分然うであらう」是が眞に神に近い所であらう」と考へる丈けで滿足せねばならぬ。斯く申すと所謂正統派の學說を執つて居る者、即ち彼の「オルトドックス」派の者は、お前等の云ふとは間違つて居る。自分等は神の事を啓示に因つて明かに知つて居るが、お前等は自身の理窟によッて論ずるから、遂に弱い說を主張する樣になる」と云ッて攻擊する。是はひとり基督敎の正統派のみならず、「モハメット」敎の者でも、印度に起つた宗敎哲學派でも正統派の者は皆さう云ふに違ひない。其等の人は自分の奉ずる經文にある神の記事を正敷と思ふて居る。何故其れが正敷か、何故其れが眞の神の啓示だかと云へば、自己の宗敎の經文を信仰するから來るとなので、之を學問上の詞に翻譯して云へば、勿論然う假定するに外ならない。正統派は吾々の論を弱いと云ふが弱きはお互のとで、經文が眞に神の啓示せる者だと云ふとを確實に辨明する譯には行かない。

右の如き譯であるから、吾々の說を誤謬なりと云ふ論も、詰り吾々のと差異がない樣になる。併し吾々のは更に一層確實と云ふべきである。なぜ吾等の說が一步進ん

で居るかと云へば、學術に忠實で、研究を以て基礎となし、且ツ實驗に據ツて居るから、其辨明する所は高尚なりと云ふも、不當でないと信ずる。斯く云へば宗教説として弱いとの攻撃もあらうけれ共、總て學問は皆なこれであるから他の學問に比して此宗教説は少しも劣らない。學問にも種々あるけれども、其歸着する點に及んで見ると如何なる學問でも皆な假定説に據らざる者はない。宗教説も亦他の學問と決して異らぬ者で、詰る所は「我は斯う信ずる、斯く假定する」と云ふ丈けである。故に學説を以て宗教を批難する事は出來ない。畢竟其根底に於ては雙方大差なきものである。

乙、方法

然らば神を觀念するには、如何なる方法を以てすれば宜しいか。往昔の教義學者は三ツの方法があると申して居る。今日又私が考へても、是より適當な方法はあるまいと思ふ。則ち其第一は「原因を探る」(causalitas)と云ふ事で、此の世の中に存在仕て居る物に據り、其原因を尋ねて行くので。此の地上に存する所の物は、一ツの原因を持たねばならぬと云ふ點から論じて、遂に神に歸するのである。それから第二の方法は「エミチンチイア」(Eminentia)と名附けられて居る。此れは秀と云ふ字義なので、人が神の事を考へるには、神は人間に似た者である。啻に似たるのみならず、人間よりも大なる者、超えたる者、秀たる者として考へねばならぬ。例之ば人間の智慧には限りがあるが、神のには限がない。人間の能力には限があるが、神のには限かないと云ふ様に考へるのである。併し此の方法にのみよると誤謬があるから、乃で第三の「チガチヲ」(Negatio)と云ふ方法が出來た。字義は否定と云ふので、總て有限な者を否定して、神の性質を絶對無限に考へるのである。此の三ツの方法に據ツて論究しつむれば、ソコデ初めて私どもが呈出した「神は如何なる者なるか」の答案が出來て來る。併し或る人は「それは人間を基にして神を考へるのではないか」と批難をする。論者は人が神のことを考へるのに人を基礎にするのを頭から悪るい様に假定するのであるが、神を人に似た者と考へる事は必ずしも誤謬とは云はれない。例へば唯物論者が私共に對ひ「お前は神を人間の様に考へて居るが、それは比較すべき者でない、故にお前の論は誤ツて居る」と批難仕ても「成程神を人間に似た者として考へるのは間違ツた」と答へる道理はない。何故にさうであるか、少しく之を辨明せねばならぬ。例へば私共が野蠻人に向ひ「朝大陽が登り、夕方沒するのは、如何なる譯ぞ」と問ふたならば、彼等は大陽は車なので、それには二ツの玉が附いて居つて朝になると東から曳き出し、夕になると西へ這入る。其車は光輝燦爛たる金色の物だ」と答へるかもしれん。斯様な説明を聞けば、吾々は笑ひ出す。げれ共我々が神に就き考ふる所は必ずしも此の外に出でない。唯だ此の考へが進んで純粋になッたのである神は人間に似た者だと思ツて居る者もあるが、或は然うではない、と考へる者もあらう。其神

を人間的に考へてならんと云ふ人に對ひ、然らば世の中の原因は何であると考へるか」と問はゝ「神は本體(Substang)である。勢力である。原因である」と、或は「世の中は法則から成立つて居る」抔と答るであらうが、是れ等の意義は果して人間的でないと云ふに、矢張人間的であると思ふ。又或は神を說明する時、人間に似た者だとは云はれぬから、「力」であると云ふ者もあるが、其力とは果して何邊から持ッて來た事を考へて見るに吾々が能力を有ッて居ると云ふ所から起たのだ。吾々が英語若しくは獨逸語を談し得ると云ふのにも、矢張語學の力があると云ひ、或は物を動かすとか引き上げる場合にも力があると云ふ觀念は人間から出たもので、それを他の者にも應用仕て、自分が力を有ッて居る如く、他の者も之を有ッて居ると考へたので勢力と云ふ概念も亦た人間的でないとは謂はれない、即ち人間を基として出た考へである。又「世の中は進化の規則に因つて成立つた者なり」と云ふが、其法則とは果して人間的の想像ではないか、人間流の事が其中に混ッて居らぬか、之れも亦た人間が立てる法則があるから云ふのである。シテ觀れば人間が考へ出す法則と云ふ者によつて世界を說明するのも矢張人間的の思考であつて神人同形論と離れ得る所の論ではない。或は又宗敎家は此の世の中に目的があると云ふけれ共其考は違つて居る。目的は人間の有する者なので、然う云ふ人間的思想によつて世界の原因者を考へ、其れも目的

を立て之れに由て世を統御仕て居ると說くのは誤謬で、矢張神人同形說から出て居る。世の中は斯樣に考ふべきではない、只原因に據つて原因に溯り、或は原因から結果が生じ、結果が原因となつて更に結果を生ずと考へるのが、正敷のであるから、原因的說明をせねばならぬと云ふ者もある。然し玆にも疑問がある、「然らば原因的說明法は、擬人論でないか」と云ふとで、誰も甲の原因を見て、乙の結果が出來たのを辨明する事は出來ない、只人間の見る所では、甲の事があつた後に、乙の事が起りて來た事を知る丈けで、時間の前後こそ見え、因果の關係が甲乙の間にあつて、乙は甲の因によつて出來たと云ふとは出來ない。故に若し神を世界の原因者として說明せんとすれば、其レは矢張人間が自分の思考中に捲へ、自分の所作に據りて考へた原因結果によつたのである。此の理由だから目的を以て說明するのも、原因を以て說明するも、同じく人間的なので、雙方に甲乙はない。

丙、神の本體

前では神の存在して居る證據を色々あげて、述べたですが、其の時に吾々が神について考へるのは、到底人間的たる事を免れないと云つた。然し人間的たるとは總て人間の思索する所には付き纏ッて居るので、如何なる說でも皆な、若干人間的分子を有つて居る。だから神のとに就き人間的想像をなすのは誤謬だとも云はれず、又たさうした所で何の害もなし、寧ろ左樣に考へる方が、道理に適つて居て、解り易い。

之れで世界を説明し、神は人格を備へて居るとを云ひ、或は人間の能力を推して大きくした性質で、神の性質を論ずるのは妨げないとと思ふ。

それだから前に云つた方法によりて、神の性質はパンナ者かと云ふとを、推して結論するとが出來る。しかし此の結論は無論神人同形論(アントロポモルフイスムース)になつて來るが、神人同形論は決して排斥すべきものでない。神人同形論を排斥する人でも決して、擬人論の以外に出る事は出來ない。唯だ幼稚な擬人論に因らず、又擬人論だと云ふとを知つて居るのが大切である。そこで神の本躰は如何なるものであるかと云ふ議論を起したいと思ふ。是に就ては往昔から三つの議論があるので、即ち「テイスムース」(Theismus)「パンテイスムース」(Pantheismus)「デイスムース」(Deismus)「パンテイスムース」を分けて極く幼稚なのと、批評的なのとの二つになし度と思ふ。即ち「テイスムース」と云ふ言葉は何んと譯したらば宜敷か、餘り適當な譯語もないですが、マア一神教とでも云つたらばいゝでせう。文字の由來を申すと希臘語の「テオス(Theos)即ち神と云ふ字から出來たのです。

一、幼稚なる「テイスムース」

誰れが此の幼稚なる「テイスムース」即ち一神教を奉じて居つたかと云ふと、往昔の猶太教なので、舊約聖書にも此の思想がある。それから新約書にも及むで居り。之れを基礎にして居る基督教會や、歐羅巴の基督教を信ずる普通の人民は、皆な此の幼稚なる「テイスムース」を奉じて居る。

二、「デイスムース」

「デイスムース」とは自然神教と譯してあるが、此の「デイスムース」と前の「テイスムース」とを語源に由つて考へて見ると、同じとなので、「テイスムース」は前言つた通り、希臘語の神即ち「テオス」から來るし、「デイスムース」の方も矢張神と云ふ字から來たのだが、其れが唯だ羅甸語の神と云ふ字即ち「デウス」(deus)から來た區別がある丈のとで、之れに各違つた意義を持たせたのは、隨分勝手なやり方なのだ。

即ち雙方の意義を云ふと大に違つて居るので「テイスムース」の方は神を人格的の者と見て居るし、此の世界と神とは、異つて居ると考へて居る。然るに「デイスムース」では、神は世界を創造した、第一原因者たる神が人格を備へて居るか、或は居らぬか、そんなとには少しも論及しない。之を平たく比較して云へば、「テイスムース」の考では神は世界を創造した計りでなく、世界を支配する王なので、王が其の國を支配する時には、通常法律で事を處して行くが、何か困難な事件が起つて來る時には、一刀兩斷の處置をなして、此場合には法律に拘泥しないで、獨斷で決するが、神も其通りで、通常世界を支配するには、世の中に拵へた法則に據つて、支配仕て居るが、何か事が起ッた際には、自分が拵へた法則に反對した事をす

る。即ち奇蹟を行うと云ふので、此の說は前世紀に至るまで、基督敎社會に行はれて居つた。何故是が行はれて居ッたかと云ふと、未だ此の世の中に犯す可らざる自然の法則がある事を考へなかッたからである。丁度國には憲法がある、けれ共まだ其有る事を知らなかッたのと、同じ有樣であッた。併し前世紀に於て數學思想——殊に英吉利で斯の思想が非常に發達してから、世界を解釋するにも數學的の考を用ゐる樣になッた。恰も帝王が憲法に注意し、之に據ッて國を支配する事を知ッて來たのと同じ樣に、世の中には法則がある事を知り、之を守らねばならぬと考ふる樣になッて來た「ディスムース」の方は、如何なる場合でも帝王は憲法を守らねばならぬと云ふのと同じ說なので、尙ほ明かになる樣に比喩で云ふと、世界を大きな器械に比した者で、此の「ディスムース」の盛な時に、英吉利では丁度善ひ器械が多く發明せられたから、此の比喩を執るのは、手近ひ事であつた……併し機械と云ふよりは、寧ろ時計に比した方が宜しい。時計師が立派な時計を造ッて置いたが、其時計が、時計師の手を離れた後も、絶えず規則通りに運行する樣に、此の世界は最初に神が造つて與へた法則で何時迄も動いて行くのだと「ディスムース」は主張するのである。けれ共「ディスムース」は、成程神が世界を造ッたのは、時計師が時計を造ると同じであるが、併し其れが時々狂ッて動かぬ場合が起る。其時には時計師が之を卷いたり直したりする樣に、神は此の世の中に干渉すと考へる。個樣に兩說には差異があ

る。けれ共「ディスムース」を奉ずる者は、無神論者ではない、尤も敎會の者から、攻擊を受け批難せられたが、其レは幼稚な一神敎と異ッて居るからなので、能く見ると斯說も詰り「神は完全無缺な能力を有ッて居り、此の世界を完全無缺に造り上げて、又神を要せざる樣に仕た」と說いた者で、神と云ふ觀念は毎時有ッて居るのみならず神を非常に高い者と見て居るのである。

「ディスムース」と「ディスムース」との區別は、今述べた如くであるが、尙少しく附加へて置き度事がある。彼のシルレルの著に「自由家」(Freigeist)と云ふのがあるが其の中には極く自由な說を執る人が出て來て疑問を起した事が書いてある。其問は「神の在る事を信ずる必要があるか、何故神は入用なるか、此の世の中は實に完全無缺な者ではないか」と云ふのであるが、其主人即ちシルレルが答へて「此の神を信ぜざる者よりも、信神なる者はない」と云ふた。是れは前にも申す通り「ディスムース」を奉じて居る者は、神を誹るとか無神論者なりとか云つて、攻擊せられたから、乃で主人が辨じて此の神を誹ると云はるゝ者程、神を尊敬する者はない「ディスムース」を奉ずる者は、世界を造つた後はモウ入用がないと云はれる位、大なる能力のある神を信じて居る、と論じたのであるが、此の他ゲーテが云ふた事に——是は神人同形論に附加して云ふのですが。——「神は人間を自分の樣に造つた。其レ故に人間も亦神を自分の樣に造る」と云ッて居るが、是は寔に面白い說で、私共人間は神より造られ、

私共の有ッて居る精神も神の精神より來た者であるから、吾々人間は此の神より來たれる精神に據りて神の精神を描き出すので、固より多少の差異はあるでせうが必ずしも神を想像し得ざる者だと云ふ必要はない。吾々人間は神と同じ本體の者であるから、神を考へ得る者なりと想ふも敢て非理ではないと思ふ。

三、凡神論（パンティスムース）

第三に申すべき事は、凡神論である。丁度「ティスムス」が、「セミチック」人種の特有である如く、凡神論は「印度グルマン」人種の特有だと云ッても差支がない。凡神論の發達仕た處は、印度希臘、獨逸等である。他の國民も之を有ッて居るが、ソレは其國から起つたのではない。凡神論は往昔の印度では婆羅門教の如き、其他宗教哲學に關したもあり又殊に近來の獨逸に於て現はれて攻究に因ッて現はれ、或は希臘の哲學にもあり又殊に近來の獨逸に於て現はれて來た乃ち此凡神論は世俗に行はるゝ者でなくて、哲學的の研究に因ッて生じたのである。故に一般の人が、此の說を採用する譯ではなくて寧ろ唯だ學問社會に成立ッて來た者である。然らば凡神論はドウ云ふ考を立てゝ居るかと云ふに、彼の「ディスムース」では「神は世界以外に超絶仕て居る」との主義だが、凡神論は「神は世界中に在る者だ」と云ふので即ち「インマヂント」譯して云ふと含有主義である。若し神が世界を造ッたのならば、神は世界の中に在らねばならぬ。ソレは丁度蒸氣が器關を動かす如く、神は世界の中に在ッて、之を動かして居るので、神の能力は世界

以外に在らず、以内に在ると、云ッて居る。ソコデ凡神論は遂に神と世界とを區別せず、神即ち世界、世界即ち神なりと云ふて來る。ソレは「パンテイスムース」即ち凡神論なる詞が、彰はして居る所で、「パン」は「凡」「ティスムース」は「神に關する論」と云ふ義である。然し此の凡神論は、容易に無神論になッてしまう」ソレは神は世界であり、世界は神であるとすると、世界以外に神を求める必要が無い此世界丈けで濟む。神と云ふ者を特別に拵へずとも、世界で充分だから神を說かぬ樣になッて來るのである。殊に博物學者の如きは、凡神論を唱へて無神論者に成ッてしまう者が多い。其中にも、ヘッケルの如きは、自分は無神論者では無いと云ふて居る。併し結極其の所謂自然は吾人が云ふ所の神とは異つて居て、竟に無神論に歸するので、即ち世界が神であり、神が世界であると云ふ中にも、物質界に重きを置くと、神は遂に無くなつて了う。

凡神論の極端は斯の如くであるが、今一方の極端になると、世界はない者とする凡神論に歸するので、是はスピノザ抔が殊に主張仕た所である。ソレは世界は其中に在る本躰の現象であッて、本躰は其主である。森羅万象は唯其現象に過ぎない。世界は虛無であッて、此中に在る本躰が實相である。ソレで此論も亦「ディスムース」と同じく奇蹟を排撃するのです。既に世界が神であれば、不都合の生ずる理もなく、別に不都合を神が直す必要も無いから、奇蹟を要せぬ。或は此世の中の出來事は、總

て神の作用であるから、之に屬する者が無くなり、從つて奇蹟の必要もない樣になッて來るのである。又此凡神論は科學とは極く中が宜い。其れ故に科學者の中には凡神論者が多い。之れに反して科學と始終、論爭せねばならぬのは「ティムース」である。しかし凡神論が大に困難を感ずる論點は、倫理に關する事柄なので、倫理は人間に自由が有りとするから成立つので、總べて人間の行爲を自然的とすれば、倫理道德は無くなつて了う理由である。譬へば若し屋根から石が落ちて、人を殺したと云へば、其石に罪は無い。只だ自然の作用で墮ちた石であるから、其の作用も不道德では無いが、人間が人を毆き殺せば不道德と言はねばならぬ。と云ふのは其人が殺さうとする事を、決する自由の意志を有つて居るからである。此の自由があつて始めて倫理が成立ッのであるが凡神論で云ふと、總て此の世の中に在る者は皆な神の作用なので、人間其者が爲すのではない、萬有に涉ッて居る神かするので、斯く萬事皆な神の作用とすれば、人間には責任が無い譯になつて來る。偖て責任が無い以上は行爲に道德又は不道德抔云ふ、名を附ける事は出來ぬ樣になるから、乃ち倫理と凡神論とは、相容れざる者となる。是れが凡神論の一つの障害である。今日獨逸に於て凡神論を唱へて居る有名の學者は、彼のハルトマンで、其論は悉く斯論に據つて居る。

四、批評的「ティスムース」

第四には批評的の「ティスムス」であるが、其は如何して出來て來たかと云ふと「ディスムース」と凡神論との短處を除き、其の長所を取つて、批評的に綜合仕たのである。「ディスムースは神は世界以外に在り、神は世界と異つて居ると云ふて居る。所が批評的「ティスムース」は、之れに就て其神は世界と異つて居ると云ふのは正しいが、神は世界以外に在る、と云ふのは誤つて居ると云ひ、又一方では凡神論が神は世界中に在ると云ふのは宜いが、神と世界とは同じだと云ふのは極端でもあり又謬つて居ると主張する。此二者の極端と誤謬とを去つて、其正しき點を合せたのが、即ち批評的「ティスムース」である。私は此の論を執る者ですが或は其ンナ樣な說が立てられるか、と云ふ人もあるでせうが、靈と物質との關係を明かに辨明するのは仕難い。其れは尙ほ人間が自身の精神と、身躰との關係を充分說明する事の出來ないのと同じである。之を圖で示すと次の樣になる。

- 凡神教
  - 神と世界とは同一物なり
  - 神は世界の內にあり
- 自然神教（ディスムース）
  - 神と世界とは異れり
  - 神は世界以外に在り
- 一神教（ティスムース）

今日說く所の「ティスムース」も、根本の考に於ては、往昔の無邪氣な「ティスムース」と

異つては居らぬが、只今日のは澤山に批評的の攻究を積むだので、所謂自由派の神學者は、大抵此の論を執つて居る。何故神學者等が批評的「ティスムース」を主張する樣になつたかと云ふと、其レは人間の人格と云ふことに重みを置く故、然うなるので、若し人格を捨て道德を棄てゝも宜敷いと思へば、批評的「ティスムス」でなくてもいゝが、然うすると人間の人格も道德も無くさねばならぬから、乃で之を執る理になつたのである。此の批評的「ティスムース」の學說中にも勿論種々困難が在るには違ひないけれ共、說を立つるに立てられんとは無いから、之を執るのである。斯く云へば一躰、神抔と云ふ說を立てるから、困難が生ずるのであらう。神の論は最早止めるが宜しいと云ふ人が出て來るかも知れない。併し今日哲學でも科學でも、少し細かに考へる者は「神」を論ぜずには居られない。是非之を考へる必要のある事を發見するに違ひない。のみならず神を棄てゝ、無神論を說くのは容易かと云ふに、是も亦非常な困難であツて、其の困難なのは寧ろ有神論よりも甚だしい。されば困難は同じ事で、總て學說には皆困難が付いて居る。希臘の俚諺に「總て大なる者を得むとするには、何時でも汗を流さねばならぬ」と云ふ語があるが、是は本統の言で、大いなる價値ある物、貴い事は皆な之を得るに、隨分困難を經ねばならぬのは、人世の常である。偖て「ティスムース」を信ずとすれば、其神は果して人格有る者か否か、神は絕對の者か、然らざるか、との問題が起るのは當然であるから、此事に就き尙ほ話を致しませう。

五、人格●と絕對●

人格と絕對との兩者は、鳥渡見ると互に相容れざる者の如くである。人格を云ふ時には、絕對を棄てねばならず、絕對を說く時には、人格を捨てざるを得ない樣な觀がある。然るに「ティスムース」は此の兩者を併有して居る。之れを合一するのは一大難問題であるが、併し「ディスムース」では、此難問を解く必要がない。何故無いかと云へば、斯論は世界と神とを別にし、異なつた者として居る。だから神は自己以外の世界を有してる者で、其絕對は限られて居るから、無くなつて居る。故に人格即ち「ペルセンリヒカイト」を主張する事が出來て來る。又凡神論では世界と神とを一にするから、即ち世界は神と同であると云ふから、人格は無くなて了ふ。即ち人格を棄てゝ絕對を活かして來るのである。此故に「ディスムース」並に凡神論では、此兩者を合す必要か無いが「ティスムース」になると、此の兩者を合併ずる必要が起る。げれ共無邪氣な彼の幼稚な「ティスムース」では未だ此の必用が起らない。其れは全く無邪氣なからでである。然るに吾々一神論を主張する者は、此の難問題を解釋しなければならぬが、それは困難なるのみならず、充分に解釋するとは企て及ぶ可らざることである。其理由は後に申し陳べるが、何故に吾等は神を人格的に考へねばならぬか、と云ふに、先づ吾人が神を考へるに際しては、之に一種の智識が有るとしなければならぬ。

若し智識が無いとすれば、神と云ふ丈の價値が無いので吾人人間よりも下等な者と謂はねばならぬ故に智識が有ると思考する。併し只智識が有ると、漠然吾等が考へる事は出來ぬ。換言すれば人格無き者に、智力が有るかと云ふ問題が起るので、少く共吾々の實驗する例に據れば、人格無き者に智識のある事は、まだ見ないので神に智識ありとすれば、人格が無げればならぬ、と結論するに至るのである。

又神を想像するには、之に意志があるとしなければならぬ。凡そ物の働くのは、何に據るかと云へば、意志に據るので、智識は物を觀察するのみであるのに、其レと同時に働きが起る。然らば其働きは那邊より起るか。人で云へば意志から來るのである、乃ち神は只何事もせず、世の中を眺めて居るとは思はれない、爲すあり、働く所のある者であらうと考へられる。併し其意志が人間と同じであるか、或は異ッて居るかは疑問だが、少くとも之に似た者でなければならぬとは云ふべきである。

又神は人間に似た樣な或る感情を有する者ならざるを得ない。若し之が無いならば、人間よりも劣つて居るのであるが、兎に角物を愛するとか、憫むとかの感情ある者と爲なければならぬ。此智識意志、感情是等を合せて吾々は人格と云ふのである。すれば神にも是非此三つの者は備はつて居らねばならぬ。然らば人格は如何にして成立して居るかと云ふ問題が起るに違ひないが人格は、自分が他の者とは異つて居る事を悟つて、始て生ずるので、即ち吾と他とを區別するから起つて來るのである。人格を神の上に應用して觀れば、神も亦自分の外、或は側に自身と異つた世界を有つて居らねばならぬ。然し斯うすると神が限られたる者になる樣だ。そこで或は神に人格を附けると、同時に其絶對を棄てゝ了はねばならぬから、人格を附ける事は出來ぬと論ずる者がある。成程一見して其理屈は當つて居る樣だが、併し人格を考ふるには、自分と他の者とを區別するばかりでなく、別に成立つを得る事を考へねばならぬ。然らば實際那邊に於て成立つぞと云へば、自分の概念と自分とを區別するから成立つ事も出來る。例へば机人間、動物など云ふ觀念を自分の中に挿へ、ソレを並べて其觀念と自分とを對照し、成程自分と外の者とは異ッて居ると云ふのが、人格の出來る根本である。斯樣に仕て自分と云ふ觀念が出來又自分の人格が出來るとすれば、神も亦世の中の者を種々自分の觀念中に置き、吾と他の者とは異なッて居ると云ふ觀念をなすから、爰に初めて人格が出來るのである。併し此世界の爲に、自分は限られて居る者とする必要はない。自分の概念の上で異ッて居るのを見出す丈けで其者の爲に限られ、束縛せらるゝと考へる必用はない。斯く考へると神に人格を附けても、之に由ッて其絶對を消滅せしむる必要はないのである。併し又或人は「限なき人格を想像する事は出來ない」と云ふかも知れぬが、ソレは凡神論の主張するのと同じ事で、成程吾等は明かにソレを想像する事は出來ないが、是は吾等の知識の足らんのに歸せねばならぬ。故に人格と絶對とは如何に合一し

て居るか、之を想像する事は容易でない。是は吾等の力の及ばぬ所である。けれ共或る一方から、斯様な者であらう、と云ふ丈けの事は考へられると思ふ。斯く云ふも私は決して三千年以來の哲學者等が、解釋し得ざりし所を能く解釋し得と云ふのではない。併し自分は足らぬとしても、前の様な説を立てるのは、差支ないと主張するのみである。此の問題は人間が絶對者ならざる以上は、到底解釋し能はざる所なのである。然し基督教が唱ふる今日の説は、凡神論抔に比して、愚な者では無い事を主張する丈けには、先づ之れで足つて居ると思ふ。のみならず吾々の考に據れば、人格と絶對とは、今述べた様な方向に於て、遂には解釋せらるべき者でなければならぬ。少く共眞理は此の方向に在る事を指示して、居るとは、充分考へる事が出來様と思ふ。

丁、基督教に云ふ神の概念の歷史的發達

前章では神の本躰と云ふとに就いてお話を爲たが、其れは無論基督教の唱へて居る所なのだ。基督教では神の本躰は々様に考へると云ふとを説明したのである。ソレデ此の思想の主要な點は則ち神は絶對であるとと、人格的だと云ふとの二ッにあるとも述べたし、又此の二ッは如何して一致せしむるとが出來るかと云ふに、此の事は吾人人間の智識では到底充分に明かにするとが出來んともお話しして置いた。唯だ彼の二者は一致すべき筈のものである、若し比喩で云ふならば玆に幷行の二線があッて、其線は何處かで必ず一緒になる者だと考へられるけれ共其レが如何なる有様で一緒なるか解らない。唯だ此の線を眞ッ直に引いて行けば必ず何邊かで合うと云ふ事丈けは、考へられると云ふのと同じとなのである。

神に就て基督教の説く所は、勿論唯だ一ッの神即ち唯一神教である此の唯一神教は基督教の特色なので、他に類を見る事が出來ぬ、其レは如何なる理由であるか。成程唯一神教は基督教以外にも見る事が出來る。併し是は少しも通俗でなくて、人民一般に信せられて居らぬが、基督教のは一般に國民が之を信じて居る丈けの相違がある。何故斯かる相違が起つたか。

唯一神教は希臘にもあるが、是は全く哲學的の思想を以て、種々研究仕た結果、神は一ッでなければならぬ」と云ふ結論に達した者なので、此の哲學は一般國民が解するとが出來なかつたから、從ッて之を信ずるにも至らなかッたのである。又埃及にも唯一神教があつたけれ共其レも同じ進路を取ッて出來たので、埃及に在る神官即ち坊主の考索により、此宗教の理窟を發見したのである。無論其以前には種々様々の神を拜んで居ッたが、詰り此の世の中に在る神の本躰は、一ッで無ければならぬと考ふるに至ッた。又印度でも、此の世の中に在る現象は、唯一ッの者より出たに相違ないと」と理窟的に考へた。けれ共印度のと希臘のとは其間に相違が自ら現はれて居る。希臘のは種々の多神があり多神の中に階段があッて、一番の神とか二番の

神とか云ふた以後、其頭の者を取つて、詰り唯一ッの神と仕て了つた者であるが、印度では總ての現象の根源を一ッに仕て、一神を立てる様になつた。然し其結果として自然と神とを餘り密接に仕過ぎて、凡神教に移つた譯である。埃及のも印度に類する思想で遂に凡神論に移つた、而して是等の者に共通仕て居るのは、哲學的に神官等が理窟上一神教を唱出したとで、是レ終に國民一般に信ずる事の出來なかつた理である何レの時代に於ても哲學者の考へた者が國民一般に信ぜられた例がない。何となれば之は餘り理窟に走り、無形に過ぎて、一般人民の心に入る事が出來ぬので、今日でも學者の考案は學者自身では何人も覺り得る事だと思ふて居様が、其レは妄想で、通俗に信ぜられ能はざる者である。所が基督教のは全く之れと異ッて、最初から國民一般が信仰仕て居ッた、勿論一神教は基督教か之を發明仕たのではなく、又特有仕て居る者でもない、之が前驅となりし者もあれば、之が後殿をなせる者もあッて、即ち基督教は彼の猶太教より起れる者で、猶太教は實に一神の說を、執る者であッた。又基督教以後に出來たのは彼の「モハメット」教で、是も唯一神教である。此の三ッは固より各々特色がある一神教だが、元は皆「セミチック」人種の中に起ッたので、歸する所は一ッである。私は只今基督教が唱ふる唯一神教の起原の大要を、お話仕様と思ふ。

基督教が說く所の唯一神教は、猶太人民が抱いて居た神に對する思想であッた。勿

論今日の如き唯一神教ではない、甚だ粗な者で、其れが密な方に段々進歩仕て來たので、最初には此のイスラエル國民には一ッの神がある、此の神を吾々人民は拜せねばならぬ。併し其外にも神があるであらうが、其れは他の人民を支配する神で、我が國民を支配せざる者なのだ。吾々は此の吾々の一神を信ずるのであると考へ居た。之を名附けて「モノラトリー」(Monolatrie)即ち拜一神教と云ふのです。是は極く幼稚な考で、他にも神はあるが我が拜するのは一ッの神であると云ふのである。

如何にして此の「モノラトリー」は發達仕て來たが、之を今日研究する事は出來ぬ。只一ッの神を信じた者だと云ふ丈けである。佛蘭西の學者ルナンは「セミチック」人種は直覺的に一ッの神を拜んだ者だと云ふたが、眞に然るやも知れぬ。故に此の國民は神を考ふるに、月の神とか、日の神とかを以てせずして、君主とか王とか考へて居ッた王に對つて國民が忠を盡さねばならぬ如く、神に對しても亦忠を盡さねばならぬ、否らざれば不忠不敬になると思ふたのである。此の神の名は通常「エホバ」と呼ぶが、併し是れが最初の呼名ではなく、「ヤペー」と云ふが本統である。此の人民はシナイ山の周圍に住み、彼の水草を逐うて移轉する者であつた。扨其「ヤペー」又は「エホバ」の名稱は如何なる意味を以て居るかと云ふに、之に就ては今日說が複雜仕て一樣でない。從つて其眞意を知る事が出來ぬ。偖て其意味は何に據つて探知するかと云ふに、字義に據らなければならぬ。けれ共其れは容易ならざる事で、聖書の中にも字

義の解釋があるが、之に據ると「在」と解釋せられて居るので(出埃及記三章十四之を
哲學的に云へば「永久存在するものなり」との意味であるが、其れは餘り理窟的で、將
來進歩せる學術に據つて出來た考で、太初の意味とは思はれない。又學者が之を研
究する樣になつては「ヤベー」と云ふ詞は元來宇宙の現象中に根據を有する者で、宇
宙間のある顯象を言ひ表はしたものでなければならぬと云ふ說を立てた。「エホバ」
と云ふ言葉を動詞にすると、上から下に降ると云ふ意味を持ッて居ると云ふのは
學者間に殆んど一定せる說てあるが、其れからは又說が別れて、或る者は「エホバ」と
云ふ名は、嵐に乘つて降ると云ふ意味で即ち、其神は嵐の中に這入つて居る者と云
ふとなので、其證據には、聖書の中殊に詩篇の中には、嵐に乘る神を謠ふた者がある
と云ふ者もあるし、或は「ヤベー」と云ふ詞は降る義ではなくて、天より降らす意味で
ある。何を降らすかと云ふに、雨を降らすとなので即ち原因者を指した者だと云ふ
說もある。此の外にも尙種々の說がありはするが今日孰れが正數いか其れを
確定する事は出來ぬ。けれ共兎に角此の解釋が眞に近いので最初は自然顯象の中
にある神を信じて居つた事は、今日も略解つて居る。
偖て此の信仰此の宗教に對して一大變化を起して來たそれは何に因るかと云ふ
に、モーゼの出てたに由つて起つたのである。元來イスラエル人種の中の或者は埃
及の方に往つて住い或者は、シナイ山の近傍に住つて居た。然るに埃及に在つた者は

埃及人の爲に大に苦められる樣になつた。ソコデシナイ山近傍のイスラエル人中
にモーゼなる者起り、彼等を助くる爲に埃及に渡つたが、之を救ふに武力を用ゐず、
思想を以てした。即ちモーゼは神に關する思想に憑り「此の神は汝を助く、汝等も亦
此の神に依つて助けられねばならぬ」と說いて、遂に救ふ事をなした。此の歷史に因
つて、始めて爰に一つの固いイスラエル人民と云ふ團結が生じた。故にモーゼは國
民の團結を造つた者と云ふも、差支無からうと思ふ。是と同時にイスラエルに一つ
の宗教が出來上つた。何故と云ふに將來の總ての口碑は、モーゼに因つて新らしい
宗教が開かれたと傳へて居るが、是れには歷史的根據があるべきてある。固より本
統だか何だか解らむと云へは云へるが、併し舊い記錄に據つて信ずる事が出來る。
故にモーゼは建國者なるとともに又た宗教の開祖である。モーゼは宗教的の天才
即ち「ゲニウス」であつたので、宗教上の天才豪傑として、彼は神の啓示を受けたる者と
謂はねばならぬ。彼は特別に神の事を悟れる者である。勿論聖書に見ゆる如く、神が
茨の中に居つて、己れの姿を現はしたとか、或は指を以て貳板の石板に十戒を刻んで與へた抔と云ふ說は事實なりとは云ふとは出來ぬ。けれ共吾々の知識に問ふて衝突せざる限りに於てモーゼは天啓を受けた者である。私が前に論じた通り、人間の精神は神に通じて居る者なれば、其精神が神に通じて、宗教上の大なる能力と悟りとを得た者に違ひない。之を得ぬ者

は凡人だが之を得る者は宗教上の豪傑である。私が申した意味に従ひて、彼は宗教上の豪傑として天啓を受けた者と謂はねばならん。

爰にイスラエルの宗教に一つの特色と云ふ者が、モーゼの時代に起つた。即ち自然的の神なりし者が、終にイスラエル人民に對する人格的の神になつた事である。之を哲學的に申せば、イスラエルの神は「ヤベー」であつて「ヤベー」の民はイスラエル人民であると云ふ様になつた。尚一ッ忘るべからざる事は、之に由ッて「ヤベー」はイスラエル人民の歴史的の神になつた事で、是は宗教の進歩上記憶すべき、大切の出來事である。是れモーゼは宗教上の創立者とも、改革者とも云ふ事が出來る理由である。

斯の如くモーゼはイスラエル人民の宗教に變化を與へたから、之を稱してイスラエル宗教の革命者と云ふても宜しいけれ共モーゼが始めて宗教を拵へたのだと云ふのは、甚だ誤つた說と謂はねばならぬ。吾々が智識の有らん限を盡して聖書を調ぶるも、決してモーゼが宗教を造つた事は書いて無いので、又何國の宗教でも皆其國民在ると同時に、宗教が有る。無宗教の國民が急に宗教を有するに至ッた例は見えない。在ッた宗教が改革を經、モーゼに因ッて大に出來上ッたのである。人間の言語でも此の通りで……、言語を研究仕ても、之が在つた時代と、無かッた時代とは今日分ッて居らない。何時何邊で言語が成り立ッたかと云ふ事は、人間の眼の屆かるざ所で、唯吾々の知り得るのは、言語の變化である。宗教も亦其如く、其變化が知れる丈である。併し或る意味に於て宗教の創立を知る事が出來る。即ちモーゼの前にあッた宗教と、モーゼの受けた天啓とは、大變な相違がある所から、彼を創立者と稱へても宜しいけれ共其後に起ッた人が、モーゼの唱へた宗教に又小し變化を與へたらば其れは改革者と云ふべきである。此意味でモーゼを創立者と云ひ、基督を創始者と云ひ、其他の人は改革者と呼ぶのである。佛敎でも佛陀を創立者と云ふ、けれ共彼の日蓮とかの如き者は、皆改革者である。

イスラエル人民は固と埃及から出で、水草を逐うて遷轉する人民であつたが、後には東方に往いて其處の土地、即ち今日の所謂パレスチナを横領仕た。此の土地には既に早くより住へる人民が在て、耕作を業として居ッたが、其處にイスラエル人民が推掛けて往ッて之を伐り從へて了ッた。此の事業も決して僅な年月の間に仕上がッた者では無い。四百年もかゝッたので、其模樣も聖書の中に書いてある通り、前住民を攻伐し、斬殺し盡したわけではなく、其の土地に住める者を降服さしたのである。故に此のイスラエル人民がパレスチナに這入つた時に當ッては、勝つた者と負けた者と、文明の度に相違があつた。通常國を征服した場合に、勝つた者と負けた者を較らべると、勝ッた者は文明の度が高い。けれ共イスラエル人民は、文明の度が住つて居つた、從來の者よりも低かつたのである。其は彼は土着なれば自ら文明が

進歩し居たが、イスラエル人民は諸處に轉住して居つたから進まなかつた。乃で前住の人民より種々學ぶ所あり、高度の文明を受け續く様になつたのは勿論の理由である。宗教に於ても矢張り同様なので、前住民の宗教と、イスラエル人民の宗教とは混じた、其じで前の者が奉じて居た中より、取り得らるゝ丈けの宗教思想を取つて、イスラエル國民の今まで有つて居た宗教に加へたのである。即ち玆に復た一ッの變化を來した。從來はシナイ山の近傍に住んで居たから「ヤベー」は其山に居る神の様に考へて居たが、轉住後は其國を守る所の神なりと思ふに至つた。然らば其國を守る神は何處を居處にするかと云へば、一番適當で直に考へ易いのは其國民が往昔から自分の神を拜して居つた場處を應用して、「ヤベー」の住う場處とするので、是れが簡單で思ひ附き易い。又前の住民が信じて居つた神は之を「バアル」と稱したが、此の「バアル」はベレスチナに居つた人民のみならず、フェニシヤ人もアッシリヤ人も共に拜して居つた。此宗教上の規律をイスラエル人民も亦取ッて其宗教の儀式に加へた。故に此の「バアル」の神に捧け物をすると云ふ習慣があれば、其通り「ヤベー」にも捧ぐる事になつた併し此の「バアル」の神を拜する思想はイスラエル國民がモーゼの信じた神を拜する宗教思想よりも低くかつた。其れが爲めには宗教上の低い考に陷つた所もあり、又「バアル」神を拜する事と、低い不道德及習慣とが結び付いて居る點もあつたが、是等をも併取せし譯であつた。

斯の如くにしてイスラエル人民は漸々ベレスチナに新古鄕をつくる様になつた。所で此の國民中に歷史上二ッとなき現象が起つて來た。如何なる現象が起つたかと云ふに、即ち神の豫言者が出て來た事である。此の豫言者は宗教上の改革者で、何時頃から起つたかと云へば、紀元前七百六十年の頃から始つて居る。之を他の歷史に比較して見ると日本に在つては神武天皇以前百年或は羅馬の建國時代頃で極く古るい時代であつた。其古い時代に於て斯の如き宗教上の熱心者、即ち人傑が熱心に其國民の爲に働いて宗教を改革仕た。是れは、歷史上又と他になき現象であつて、彼等は國民の宗教を洗つて、之を高尙なる者にする事を務め。又往者の意味に從つて改革仕様と云ふたのではあるが、實に大に進歩せしめたのである。私共の知つて居る豫言者の中で一番舊いのはエリヤであるけれ共此の人の事に就ては詳に分つて居らぬが、彼は「バアル」を拜する事に非常に反對を唱へ「ヤベー」を拜し往者の神を拜する事に復らねばならぬと頻に絶叫した者であつた。エリヤ以後の豫言者中吾々の知つて居る者は、大なる豫言者に四人ある。即ちアモス、ホセヤ、エレミヤ、イザヤで、是等は、皆豫言者の錚々たる者で、共に國民宗教の進歩を助け、之を導いた者である。其人々等が唱へた事は、如何であつたかと云へばモーゼは「ヤベー」はイスラエル國民の神である事を敎へた丈けで、其國民と神とを結び附ける條件は無かつた。所が此の豫言者は其を拵へ「ヤベー」はイスラエルの神でありイスラエルは「ヤベ

」の人民であると云ふ事に條件があると云ッた。而して其は如何なる條件ぞと云ふに、道德上完全でなければならぬ。道德上完全なる者でなければ、神を拜む事も出來ず、神の保護を受くる事も出來ぬと說いたので、是が豫言者等の唱へ出した新らしき事柄である。前にも申した樣に、宗教は倫理が必要であるが豫言者は宗教と道德を合したので、恰も基督教の準備を爲した者と云ふて敢て差支が無いと思ふ。故に或は宮に詣つて神を拜み、又は犧牲を捧ぐる等の事を爲すも、心が惡ければ之は役に立たぬ。假令是等の事を爲さずとも、道德上完全を求め、其れに近づくに至れば即ち神を拜する者であると云ふた。故に豫言者の宗教を總括して云へば「ヤベー」は道德上の神であるから、人民が若し彼を拜まんと思はゝ、道德的にならねばならぬ」と云ふので、此れが其信仰であつた……。爰に私共の大に注意せねばならぬ事は、此の豫言者等の說いた信仰或は道德に因つて、イスラエル國民は非常に堅固な性質を有する人民となつた事である。私共が今其當時を考へて觀ると、希臘羅馬等の文明國もあり、又其以前には埃及アッシリヤ、バビロン等の如き强國もあつたが今日是等の國民はドウして居るか。皆滅びてしまッて居る即ち影も形も見えないが獨りイスラエル國民のみは殘て居る。今日イスラエル國は無いけれども、非常なる變遷を經たのに、猶ほ猶太人として遺存仕て居る。往昔の歷史に溯つて考へて見るとイスラエル人民は最初は十二の支族から成り立ち、非常な困難を潛つて居る人

民なるが、猶依然として遺つて居るのは何故であるか。是れは一に、豫言者が宗教的に其國民を敎育仕た結果なので、之が爲め國民の性質が容易に變らぬ者となり、又國民は一種の天職を有する者なりと信じて居つたに因るので其天職とはイスラエル人民が「吾々は此の天下の人間に宗敎の事を敎へる天職があると信じて居つた」とである。

豫言者の唱へた事に今一つ大切なことがある。其れは——其れまでは他にも神があると考へてもよかつた。唯だイスラエル國民は一神を信ずると云ふ考であつたのに——「天下に神は只一ッしか無い、而して其神は宇宙の神であり、其神は万國民の神である。且つ此の神は啻に道德上の神であるのみならず總べての事の神である」と云ふた。乃ヂ今日歷史を回顧すると、イスラエル國民は其神の豫言者となつて、神の大道を能く人に表すべき者であり世の中に述べ傳ふる天職を有つて居るに、イスラエル國民が宗敎上の功績は依然遺つて居つて、他の國民と比較す可らざる偉大な者があると謂はねばならぬ。

戊、神の性質

神のことを論ずるも其れは決して非理窟でないとは、前々から色々と辨明したので分ッて居らうと思ふ。ソレデ吾々は神を如何なるものと觀念するかと云ふに、是れも前に云ッた通り吾々は絕對的人格と考へるので其理由もまた既に述べて置いた

（百五十一頁以下を參觀せよ）

偖て神の性質は如何なるものなるかを論ずる基礎となるものは、即ち此の絶對的人格と云ふ觀念なので、此とは既に前に云ッて置いたけれども、一寸之を簡略に說明せば、人格と云ふのは、人間の性質を土臺にして拵へた者、即ち宗教上より出來た性質で、哲學上の考へでは宇宙の原因を推して之を絶對と見るのである。此二箇を合せて絶對的人格と云ふのが出來た。然らば此の絶對的人格と云ふとに就いては人間が殘す所なく悉皆考へ盡す事が出來るかと云ふに、其は一の疑問なので、之を說明し了る事は出來ない。と云ふと物理學者などは「宗教家は人間の智慧で解らぬ事を云ふから困る、理窟的ならざる事を說くから、吾々は宗教を信ずる事が出來ぬ」とあげ足を取る。併し物理學者は、果して然う云ふ權利を持つて居るか、物理學者が世の中を說き明す土臺として居る者は、彼の「アトヲム」即ち原子である。而して此「アトヲム」は分ける事の出來ない小躰だと云ッて、之を土臺として議論を立てゝ居る、此小さな躰、即ち分つ可らざる者を土臺にする論が、果して人間の智識に明らかに考へられるか……。私は「アトヲム」を二ッに分ち、又其れを二ッに分つた「アトヲム」を考へる事が出來る、けれ共物理學者は一番終の「アトヲム」は分つ事が出來ぬとして總の學說を立てゝ居る。ジテ觀れば彼等は嚴密な理論に據ッて立ッて居ると云ひながら、却て信仰を拵へ、其れを土臺にして居るのである。故に宗教家が說く所の絶對的人格も、明に辨明する事も出來ず、證據を立てる事も出來ぬが、併し斯う云ふ者があらねばならぬ」と信仰し、己の說を立てゝ行くので、物理學者の說と相違はない。だから物理學者も基督教の說には撞着があるとか、辨明が出來ぬとか云ふて、排斥する事は出來ない。要するに此世の中に在る學說は、哲學にしても世界觀にしても少許の自家撞着もなく、少許の不分明もない者は、決してないので、是は全く人間の已を得ざる所である。

私は此絶對的人格を土臺として神の性質を分類仕樣と思ふが、是は第一哲學上から來た性質、即ち絶對的性質、第二宗教の方から、人格的の性質が出來たので、前者は形而上的性質と云ふべく、後者は心理的性質と云ふべき事である。

イ、形而上的性質

今私は神は絶對的の者だと云ッた。乃で又神よりも強き者は無いと謂はなければならぬ。若し神より外に強い者があれが、神は絶對的でないので。例之「力」と云ふ事に就き云ふと自分が他の者より少しも制限を受けぬ事になつて來る。即ち萬能力を有つて居ると考へねばならぬ。又此絶對的な者に限があると考へる事は出來ない。然らば何に就いて限がないかと云へば、時と場所とに就いて限が無いので、例へば吾々人間には、過去とか未來とか云ふ事がある。總て吾々は此中に働いて居るので人間はドウ仕ても此以外に超然たる事は出來ない。今が過ぎれば過去に屬し、是か

ら爲さんとする事は未來の時になる。是は時の話であるが、場所も亦其通りで、同時に異つた場所で同じ人を見る事は出來ない。今私が日本に居ると同時に、伯林には居られぬ譯である、けれ共神に就いて絶對と云ふのは、時の制限に關しても、場所の制限に就いても、人間の如く限られぬので、此の時に關する無制限を永劫と云ひ、場處に就いての無制限を遍在と云ふのです。乃で万能とは如何なる能力であるぞと云へば、總のとをなし能ふ能力を有つて居る義である。乃で此吾々人間が觀る世界は何から出來た者であるかと云へば、即ち神が其萬能の能力に因つて拵へた者だと觀るので、而して此世の中に在る總の者は其万能力が支配して居る。故に神より他に能力多き者かあるならば、神は万能なりと云はれん。此の万能と云ふ事は聖書の中にも明に書かれて居る。神が最初に天と地とを造つたと聖書の開卷第一に見えて居るが、其造つた工合は、神が詞に因つて仕たので、即ち「神光あり」と云ひ玉へば光あり」とある如く、唯神の詞によつて世の中は造られた。或は聖書に神の命ずる事は悉く其通りになるとか、神が云ふた事は皆其通りになるとか在のも、同じ事である。若し人間がする場合なれば、器械を用ゐなければならぬが、神は自分の能力に因て爲し得るので、人間が言語を云ふには舌も要れば口も要る、物を書くには手も要れば筆も要るけれ共、神は左樣な手段に依らない、能力に因て成されるので、斯う云ふ理由なれば二箇の神がある筈はない、若し二箇の神があるとすれば、互に相侵して

能力の制限を爲し、妨碍を仕合うに違ひないが、其れでは全能な者と云ふ事は出來ない。

右の如き全能なる性質を、神が有つて居られるのは、宗教上にドウ云ふ効力があるかと云ふに、之に依て人間が神を信任する事が起つて來るので、私が人に助を求めるのは、其人の力を信ずる故である。勿論助を求めた時に果して助けて呉れるか、否かは他の問題であるが……或は金の無心をするにも、貧乏人にはせん。けれ共貸して呉れるか呉れんかは他の問題だが、兎に角借りたい時には相應の金力ある者に行かなければならぬ。故に神を信任するには、其れに適當した性質を、神が有ッて居るか、居らぬかを問はねばならぬ。其れが爲に「全能」と云ふ事は、欠くべからざる者である。

斯く神は全能な者であると云ふに當り、一箇の問題が起るのは、神は何でもする事が出來るから……譬へば二に二を合せて五にする事も出來るかと云ふに、其前に斯う云ふ事を考へねばならぬ。即ち神は智識的の者であるか無いかと云ふとである。二と二を合せると四になるのが法則ならば、神が智識的の者であるならば五には仕ない四にするが、併し若し神が仕樣と思へば、五にする事も出來るかと云ふに、全能の能と云ふ土臺の上に立ッ以上は、仕樣と思へば五にも出來るに違ひないが、然し神が智識的ならざる事を欲するか、欲せざるか、如何である。私共の考に

仍れば、神は是等の愚昧はせられまいと思ふ、神は一度法則を立て、二と二とを合せば四になる事を定めた、然るに自家撞着する如き事は仕ないに相違ない。故に二と二とを合して五にする事は、神の欲せざる所なりと謂はなければならぬ。爰に於て奇蹟と云ふ問題が出て來るので、宗教者の言に仍れば、神が特別なる法則を立て、宇宙の法則に反對するのを奇蹟と云ふので、果して神は斯の如き事を爲すかと云ふ問題が起ッて來るが、私の考では、神は二と二とを合して、五にする事をせぬ如く、奇蹟即ち己の造ッた法則に背く樣な事もしないと思ふ。全能の力で欲して成らざる事は無いが、左樣なとは神が欲せられぬ者と私は考へるのである。

神は非合理なとはなさらんが、無限の力を有する者であるから、復た之を尊敬するとも出來るので、宗教の上からは、神を尊敬すると云ふとは最も大切なとなので恰も天皇又は君主を臣下が敬するのと同じとである。

前の如く申すと、然らば神は全能の力を有する者とすれば、其神の外に猶神の如き者が在るとが出來るか、有限なる異躰があつて、獨立の作用を爲す事が出來るか、又神の行はるゝ事は、自分自身に定めて成さるゝのであるか、總て此世の中に行はれる事は、悉く神の所爲であるか、我は神以外に人間の樣な者があつて獨立で行ふ力を有するかと云ふ樣な問題が起つて來る。是は一箇の難問で、往昔より或は「然り」と答ふる者もあり、「否」と考へて居る人もある。凡神敎の如きは總て此世の中に行はれ

る事は、皆神が爲るのである。出來事の主となッて居る者は神である。假令人間が爲す事でも、其れは皆神が基礎になッて居ッて爲るのであると云ふ樣な考を持ッて居る。成程是は世に業をすると云ふとに當箝めて考へれば宜いかも知れないが、併し斯うすると吾々や諸君が見て「悪い」とする事、要するに天下の民衆が一般に見て以て「悪い」とする事柄をも神がするのであるかと云ふ樣な問題が起つて來ると、神も亦「悪い」業をする事に論結仕なければならぬので、甚だ不都合なとを生じて來る併し斯樣な問題は困難であるから之を衝突なく完全に解き了る事は、無論出來得ざる事で、到底永く疑問になッて居るであろう。けれ共亦神は絶對な者である故に神は其自由に仍て、其絶對の性質の或る部分を限り、他の者に割つて與へ、其者が若干自由に働き得る力を與へたと考へれば、差閊なく解く事が出來ると思ふ。

右の如き考を以て、疑問を解いた所が、其說に論理上の誤謬は毫末も無いか、否其れでは神は一方では絶對で、一方では絶對ならざるかの感想が起りはせぬか、絶對と絶對ならざるものとの兩者を較べて見たならば、絶對の方が絶對を缺いた者よりも、完全ではないかと云ふ議論が起るに違ひないが。是は二箇の國を例に取ッて考へれば、直に解けるであらうと思ふ。例へば茲に或る國があッて、其王は獨裁で支配仕て居るが、他の一箇の國では人民に參政權を與へた。即ち今日の立憲政躰の如き有樣を以て其國を支配すると仕たならば、兩國孰が高尙なるかと云ふに、成程君主

の勢力の上より考へれば、總ての事を獨裁で遣る方が、勢力は強いであらう、けれ共人間の品位を保つ方から考へると、獨裁よりも人民に政權を割與する方である。神の事も之と同樣で、若し神自身が天地を支配するに際し、自身の絶對の能力を、人に割き與ふるも、其れで神の品位が下ッたと云ふ者では無い。

凡て吾々が譬喩を以て世の中の道理を考ふる事は、免るべからざる者で、只成るべく其譬喩を高尙なる所より取らねばならぬ。故に神の性質を論ずるに當つても、然う爲さゝるを得ないのであるが、絶對と云ふ事を作用に關して云へば無制限(Unbedingtheit)となり、實在に關して云へば二箇の事がある。其事(ソレ)に從ッて神の性質も二ッに分れて來るので、存在は則ち時と場處とに關係仕て居るから、時と場處とに關係仕た、神の二箇の性質がある譯である。其性質は永劫(ewig)及び遍在(Allgegenwart)で、哲學を學んだ方は、皆御存知であらうが彼のカントが時とか場處とか云ふ者は、眞に在るのではない、吾々人間が世の中を觀る形狀で、時或は場處は客觀的に存在して居る者ではない。此時とか場處とか云ふ者は、恰も人間がかけて居る眼鏡の如き者で、人間の主觀に存じて居る、青い眼鏡をかければ物が青く觀える樣な譯で、此世の中を觀るのに時及場處と云ふ事に依らなければ、人間が觀る事が出來ぬ樣になッて居ると云ッて居る、けれ共吾々の話す事は、總て擬人的たるを免れざるものであるから、絶對を觀るのに、自己より推して考へる事は、己を得ざる所であるから、時間、空間の上から絶對者を見るも差支ない譯であると思ふ。

永劫(ewig)とは通例永い、永い時の樣に考へるので、宗敎家が云ふのも、普通同じく永い時を意味して居る。例へば朋友と長く離れて、再び相會した時抔に、互に長く逢はなかつた……と云ふのと同じ場合に之を使うので、一例を擧ぐれば、獨逸に或る王があッた、其王が牛飼を呼んで談話を仕た。其れは此牛飼は何でも答へる事が出來ると云ふ評判であるから其れを試すのであつた。乃で王が「お前は永劫と云ふ事を如何に考へるか」と問ふと、牛飼が「玆に金剛石から成れる大山がある。其山の上に百年に一扁宛小さな鳥が來て、嘴を以て山の頂きを啄いた、爲めに其山は遂に崩れて了ッた。併し鳥が來て其山を啄き崩すに、かゝた時間は、永劫中の只一秒時間である、斯樣な一秒時間が何程多く永劫の中にあるかと云へば、其れは天の星の數位である」と云ふた。此の話は、何人も能く知ッて、世俗に傳へられて居る話であるが、是則ち普通の永劫時に關する觀念を云ひ表はしたのである、眞に永劫を解釋仕たのではない、又聖書詩篇の中に「汝未だ地と世界を造り給はざりし時、長久(トコシナヘ)より長久(トコシナヘ)まで汝は神なり」と云ひ、或は「汝の眼の前には、既に千年も過る昨日の如く、又夜の間の一時に同じ」とあるが如きも、永劫を永き時間と考へたのである。併し此永劫と云ふ事は、單に時間を澤山續けて考へるのではない。哲學的に云へば、時を離れた事、即ち時に制限せられず、時の支配を受けざると、約言すれば時以上に超出

せるを永劫と云ふので、哲學上より無限を考ふるに當ッては、矢張時の形にして、考へるが爲め此の永劫と云ふとを考へざるを得ない理になる。又宗教上より云へば、神を信任する爲に、永劫は非常に必要となッて來る。若し時に限がある神ならば、今日は之を信任する事が出來るが、場合によれば信仰し得ざる事が起るであらう。故に時に限がない神でなければ、自分の信仰を强くするとが出來ぬからである。

次は遍在、即ち「神は遍く何處にでも在る」と云ふ事で「同時に彼處にもこの處にも居る」と考へるのが、遍在を想像する譯である。是れは存在の場所を限られて居らない換言すれば場處の制限を受けず場處の以上に超然して居る意味である。此遍在も亦宗教上神を信仰する爲めには必要なので、若し此處に在ッて彼處にあらざる神ならば、信仰する事は出來ぬと云ふ事が起ッて來る、のみならず又神を長るゝ點にも關係を生じて來る。私か幼少の時教へられた事に「お前が惡い事をすれば、牖を閉めても戸を鎖めても、神はお前の側に居るから何處でしても見て御坐る」と云はれたのを、今も猶記臆仕て居るが、是は神に對して敬む心を起すに必要なのである。此經驗は總の宗教を信ずる者が持つて居らうと思ふ。又場處に於て限られて居らぬとすれば神は物躰的の者ならざる事を考へて來ねばならぬ。若し物躰的の者であるならば、其者は場處に限られて居ねばならぬ理窟だから……、今一ッ起ッて來る問題は、若し神が以上の性質の者であつた時には、此世界は場處及び時の性質

を有する者であるから、世界に向ッて働をする事が出來るか、其は出來ないではないかと云ふ事である。之を解くには斯く考たら宜からうと思ふ。第一此世界は時間及び空間的に限られたる者なるや否や、是は未だ解き盡されぬ問題である。又神は絶對的にして此世界を造ッた、即ち時間及空間的の世界を造ッたとすれば、自躰は空間的でも時間的でも無いが、只造る能力を有せるが故に、空間及び時間的の者をも造り、其中に働く事が出來るとも考へられる譯である。

今形而上より見たる神の性質を表にして見ると次の樣になる。

萬能（＝無碍）
- 遍在（自在）
  - 時間に於て（永劫）
  - 空間に於て（遍在）

ロ、心理的性質

次は神の心理的性質であるが、此れは如何に見たのだかと云へば、前にも云ッた通り、神の人格と云ふ所から見て出來たのである。併し此の人格と云ふのは勿論比喩である。此の比喩を用ひざるを得ざる理窟は既に度々話して置いた。で完全なる比喩を用ふるか、不完全なるのを用ふるかの相違で、比喩は是非入るのである。其れで人格と云へば、智識及び倫理の二箇に關するのであるから、神の性質も矢張

同樣の點から見る譯である。此智識と云ひ倫理と云ふも、吾々が知る所の者は、人間のより外にないから、其性質を推して之を擴張し、以て神に當嵌めて考へねばならぬ。乃で智識に當嵌めた上から云へば二ッあるので、一ッは「神は總の事を知る」と云ふ事である。人間の知識は限られて居るが、神の知は限られる者でない事、今一ッは「神は聖(カシコ)通い」と云ふ事である。轍ち事を行ふに人間は其行ふ所が總の場合に適當する事を仕ないが、神は其智が多くして、如何なる場合にも適當なるとをすると云ふのが、神の智識の限ない事の説明である、第一のは全知と云ひ、第二のは全智と云ふのである。

次に倫理の性質を云へば、人間の知る所の者は、只善惡の區別に限ッて居るのであるから、此處では一ッの方即ち善のみを神に當嵌めるのである、神の完全なる倫理を「神聖」と云ふので、聖い即ち毫末の汚濁も混ッて居らぬ意味を表すのである。尙一ッは之を「愛」と云ふが、神の性質は此愛に至ッて極點に達して居る。神を愛と悟つたから、基督敎は完全な宗敎になつたと云ふ位であるが、之を獨逸語で云へば、種々な意味がある。獨逸語の「リイベー」(Liebe)と云ふのは、慈善と云ふ意味にも使う、即ち哀れな者を惠むのは愛である。或は親が子供を非常に愛する事にも「リイベー」の語を用ある。其れから所謂戀愛即ち男女間の愛を指す場合に於ても、矢張「リイベー」と云ふ字を使うので、此場合には大變危險な語弊があるので、男女の愛は或る場合には

道德的な事もあり、或る場合には不道德的な事もある。吾々が宗敎上に於て愛と云ふのは、左樣な男女の關係に於て云ふが如き者ではなく、純潔な奇麗な者を云ふのである。故に自分は「リイベー」と云はずして「ギイテー」(Güte)と云ふと思ふ。其れは語弊を矯める爲である。「ギイテー」と云ふ字は、日本で云へば仁の意味に當る。仁は五ッに別ける事が出來るので、其第一は「ギイテー」即ち仁術にして、今一ッは人に同情を表する事であり、尙一ッは「ゲヅルド」即ち忍耐を意味して居る。此忍耐も矢張仁に入れた者で、敎師が生徒を養成する場合抔には、忍耐がなければならぬ、是も亦仁の一である。モウ一ッは「グナーデ」にして是は恤と譯して居る。即ち惡を爲した者を罰しずば恤ではないが、之を宥すのが恤である第五には「リイベー」にして、是は惡い事を除けた所の愛と云ふ意味である。斯樣な神の性質は如何なる點より成立たかと云ふに、即ち人格から成立たので、人格は人間を土臺に立てるより外考へ得る事が出來ぬから、其資格を絶對なる者に附加へて、考へたのである、勿論絶對の全躰を說明してあるかと云へば、其は迚も出來ないが、其方向に於て神の性質がある事を示すに足ると思ふ。

偖て是れから神の性質に就き少しく細かに說明しやうが、抑も神の性質を論するに當ッ〳〵は、種々な難問が起ッて來るので、即ち神の神聖に對しては、人間の自由に働く事と、神が總ての事を知ッて居る事とは如何なる關係を有するか、又神の限な

き智慧と云ふ場合には、此世の中にある災害は之れと如何に關係仕て居るか。神は清淨なものとすれば、人間が罪を犯す事とドンナ關係があるかと云ふ難(ムヅカ)しく又必要な問題が起ッて來る。乃で之を善く考へて見ると、神の全知と神の智の限なき事とは詞は能く似て居るが、其意味には非常な差違がある。全知とは總躰の事柄、總躰の事實を知るの義で、是は知るとに關する事であり、全智の方は事を處するに當ッて、其方法を能く知ると云ふ事になる。一躰人間がものを知る有樣は、單に外面に現はれて來る出來事のみを知るので、尙進んで其土臺に如何なる者があるかを知る事は出來ない。然らば全く知る事が出來ぬかと云へば、總躰の事は知り得ざる者で即ち人間は直接に人間の內部の事を知る事は出來ない俗に云へば他人の心は知り難いので、勿論人を知るとか、或は人の心を察するとか云ふ事はある。げれ共是は直接に覺ッたのではなくて、種々外面に、現れて來るものを土臺として其人の心事を推察するに至ッたのである。併し神は靈であるから、其點より推して總躰の事を知り、又人間の心中迄も知り得る者なりとの論結をなすも差支ない。神は靈躰なるが故に、靈躰に直接し、其靈の能力を以て靈の事を知る事が、出來るので、是は決して不道理ならざる言であると思ふ。

右の如く論じ來れば、人間も亦靈を有ッて居るでは無いかと云ふ者もあらう。無論人間も靈を有ッて居るけれ共人の靈は場處に限られ、時に限られて居る者だから

兩個の朋友が如何に親密なるも、心と心とが出合ッて心を知る事は出來ない、是は心理の法則に徵するも明白である。然るに神は靈躰で場處に制限が無いから、直接に人の心を知る事が出來るのである。

神の全知と云ふ性質に就ては、斯樣な疑問が起ッて來る。其れは神と時間に關する事柄との關係は如何であるか、人間に於て過去の事は、神にも同樣に未來であるかと云ふ問題である。是は私が此前に議論せし如く、神は毎時(イツモ)現在である、之を哲學的に云へば、神は時間の制限を受けず、時間以上に超出仕たる者であるから、斯樣な事を神に當箝て考へるのは宜くない。人間には過去、現在、未來があるが、神に於ては此區別なく常に現在でなければならぬ、と云ふても吾々には想像が出來ぬ若し比喩で云へば一二三四五六等の數を橫に見たのは丁度過去、現在、未來を一度に見た樣なもので、即ち神の總て現在なるを想像仕た者である。併し是も譬喩に過ぎないが、先づ斯樣に過去も現在も未來も一緒に見なければならぬ。是は必しも基督敎の說を執る者のみでなく、哲學者も亦同樣に考へて居る。併し之に續いて一箇の問題が起るのは、神が總躰の事を知る性質と、人間の自由より出づる所の行爲とは如何に關係するかと云ふ事と、人間の自由なる行と、神の全智とはドウ云ふ樣に關係仕て居るかである。併し此問題は二箇相衝突仕て、解釋し能はざる者である。と云ふ理由は、爰

に二箇の容る可らざる說が出て來るからで、眞に人間は自由なる者で、自由の動作をするとせば神は總て人間の行爲の基礎即ち原因ではない、原因でないから人間の行爲に對し、神は責任を持ッ所の者で無いと考へて來れば、則ち人間の道德は始て生じて來るのみならず又道德上の責任を人間が持ッに至るのである。併し之に反して若し人間は自由な動作が出來ない者で、何事も皆神の規定せる所に因て爲さねばならぬとすれば、事々物々悉く人間の責任では無くなつて來る、例へば私が私の僕に何事かを命令し、僕が其命の通りに行へば、其責任は私が持ッのであつて僕には責任が無いのである。之と同樣に人間が自由なる動作を爲す者とすれば、其責任は吾々人間自身にある。乃で神の全知と云ふ事から推して考へると、爰に一箇の困難が起る。即ち神は總躰の事を知つて居ると云へば、過去現在は勿論將來の事も知ッて居るのである、然らば神の眼中には將來人間が爲す所の事が判然分ッて居らねばならぬ。分ッて居るのは定ッたると同じ事である。

斯の如く考へて行けば、神は將來の事を知れるが故に將來は神の知ッて居る通りに爲さねばならぬ、と云はざる可らざるに至るので、若し人が喧嘩をすると云ふ場合があれば、此場合は既に神が知ッて居るから、何でも仕なければならぬ、或は人を殺す事の如きも、若し神が知ッて居れば、必ず殺さねばならぬと云ふ事になる。されば其責任は神に歸するのである。之に反して人間は何事も自由に行ふので、將來す

る事も定ッては居らぬ、總の事皆人間の心から出た者であるとすれば、神の絶對を打破仕て了う譯になッて、其絶對の性質に反對するに至る。要するに此の全知と云ふ絶對を除いて了はなければ、人間の自由を許す事が出來ず、神の絶對を助けむとすれば、人間の自由を殺さねばならぬ、即ち一を殺せば一が活きると云ふ事になッて了う。併し自由を除ッた日には、人間の倫理を亡くして了うて、神自身が定めた樣に人間が行爲をするならば、人間には責任がない。責任が無ければ倫理が無くなる。然し其の代りに神の絶對は活きて來るが若し倫理を活さうと思へば、神の絶對が亡くなる。此理由があるから何方か一方に定めなければならぬ。之を定めるには其價値の有無に據らねばならないけれ共然うするのは、理窟で定めるのではない、人々の感情に訴へて定めるのであるから……

カルビンの如きは「神の絶對を除ッてはならぬ、神には總躰の事が知れて居る、人間の爲す事は明に神の眼中に定まれる者なれば人は唯其定められた道を歩いて居るのである」と論じて居る。併し其れでは倫理上人間の責任が無く成から、或はカルビンの說に從はない論者もあるので、私共は今一遍考へてカルビンの說も活し、倫理上の責任を人間に持たせる樣に爲し得ることがあるか探らねばならぬのである。

神の絶對と人間の倫理との兩箇を衝突仕ない樣に、都合よく解釋する道は無いか

と云へば、私は斯く解したら宜からうと思ふ、けれ共夫を確に證據立てゝ辯明仕て行く事は出來ない、唯人の精神の要求に從つて、之を滿足せしむるに過きない。之を哲學の詞に「ポスツラート」(Postulat=必需前提)と云ふのである。倫理は人間に取つて必要なる者なので、是れは是非共維持仕て行かなければならぬ。併し之を維持し成立せしむる爲に、神の絶對を破るとせば、其れは不都合で、其れでは絶對者を制限するのであるから、其處に一つの撞着を生じて來る。けれ共斯く論を立れば宜からうと思ふ。即ち絶對者其れ自身が自分の考慮に仍て、絶對に制限を附けたと云へば宜いと思ふ、若し之が他の者から要求されて神の絶對を限つたのであれば、即ち絶對者を限る他の者があつてする譯だから、絶對者自身が絶對に反對する事であるが、絶對者自身が自分の任意に由つて爲したのならば差閊ないと思ふ。是は前にも例に取つた事であるが、一箇の君主獨裁の王か在ッて、其方針で國を治めて居つたが、併し自己の任意で獨裁政治を廢し、憲法を布いて支配するのは毫も獨裁の大權を削り品位を墜せる者でなくて、寧ろ君主の德と謂はねばならぬと論じたのと同じ事である。

又全知と云ふ事に就いて云へば、神は全知だから世の中に起る事の全躰を知ると云ふ譯であるが、神が自分の自由で、己の全智を限つて居る所は知らぬ、と斯う考へたなら、差閊なからうと思ふ。併し之に就いて又疑問が起るのは、左樣に神を考へると、神は此世の中の支配を有つては居るが、人間が明日爲す事を、神は今日迄知らぬ

樣な事になりは仕ないか、と云ふのである。成程是は鳥渡考へると理窟らしいが、併し人間が自分は世界に於て大なる地位を占めて居ると考へずして、之を宇宙全躰から觀察すれば、自然は宇宙の法則に因て動いて居るので、其法則は神が定められた以來一定して替る事なく、運行するのである。此點から考へれば自由と云ふ者はない、世界は常時神か支配して居つて、其結果はどうなるか分つて居る。又之を動物抔の世界に對して觀ても、其働きは自然に定つて居るから、自由な場處が置てない。然う考へると宇宙の中に人間の一部分のみ自由の働があるとするも、是は實に小さな者、僅な部分と謂はなければならぬ。併し其僅少なのも神か前から定められたのではないが、前から知つては居ると考へられる。是の事は尙ほ解り難いと思ふから、譬喩に依て明に仕樣と思ふ。

爰に私が一人の朋友を有つて居る。此朋友は特別に懇意であるから、其心は能く解つて居るが、併し其人物は非常に憤り易い性質である。而して其人の知己があるけれ共其人は極く嫌はれて居る者だと假定せん。然るに其嫌はれて居る人が私を尋ねて來て、何事か憤り易い人に賴み度い事かあると話した。私は此人が往つて斯樣な事を賴めば、屹度彼の朋友は憤るに違ひないと推察仕て居ると、明日其人が往つて賴んだ所が、果して私の朋友は憤り出した。私は斯の憤る事を前以て知つて居るから、憤る樣には私か定して私の豫想通りに憤つた。斯く憤るのを私が知つて居るから、

めたのであるかと云ふに、然うでない。或は又私の想像か當らすして憤る性質の人だ一が、慣らなかつたと云ふ事も有得べき理である。是と同じ譯で神は人間のする業に就き、想像は附いて居るが、併し之を神が悉く定めた、而して其定めに從つて人間か仕たと謂はすとも宜しいと思ふ。或は神は緻密なる部分に迄も立ち入つて、人間の事を知つて居る。けれ共其大躰の外なる僅な事は、人の自由なる働に任せて居ると云ふても差支は無いのである。

斯の如く考へれば神の絶對も活き、人間の倫理も活きて來る事が出來ると思ふ。勿論是は絶對的の解釋ではないが、世人が神の性質を解する唯一の眞き仕方である と信じて居る。

是より神の全智と云ふ事に移つてお話をしやう。此全智は前の全知の性質とは異つて、或目的を行うのに、適當な手段、眞き方法を用ゐる事を知つて居ると云ふ義である。即ち神は此全智の性質から、世の中を統御する時に當つては、總躰の事を行ふ所の眞き方法を知つて居らねばならぬ。然るに此世の中は甚だ不完全である。たから若し此の辯明が出來ないならば、基督敎は倒れて了うと考へた論者は多いのである。なんとなれば若し神は完全なる事を欲しても、此世の中を完全に造る事が出來なかつたとすれば、神の力が缺けて居るのであるから全能とも全智とも云ふ事が出來ぬ。若し又神は完全に造る事が出來た。けれ共之を不完全に仕たのであると

云へば、神の慈愛は直に那邊かに沒して了はねはならぬ、といふ問題が起つて來るが、併し是は衝突の無い三箇の者が、神の性質上から來て之を調和し得るのである」。扨世の中には種々な害惡があるが、果して此は神から來た者であるか、若し然うでないとすれば、神の絶對は亡くなつて了はねはならぬ。ヘルシャの宗敎は之を解釋して、「神は此世界を完全に造つた、所が其處に害惡が這入つて來たのである」と云つて居る。若し此の說に據れば、惡は那邊から這入つて來たのであるか、神の領分以外の處から來たとすれば、或は惡の神があつて爲たと謂はざるを得ない、然らば其惡の神は那處から來たのであるか、若し神と相對峙すべき惡の神があれば、神は絶對と云ふ事は出來ない。故に二原論の此の解釋は棄てなければならぬ。乃で害惡があると云ふ事は或は絶對の神が無い證據になると論する者もある。併し斯く論するには、先つ第一に世の中に害惡なる者が有るか無いかを考へなければならぬ。是に就ては往昔より種々議論があつて、或は此害惡の實に論ずるに足らぬ事を擧げて害惡と神との問題の勢力を弱めむと仕た者もあり、或は之を音樂の破調に比して音樂は音聲が和して居るが、其中に時々破調のあるのは却て……音樂を美ならしむるの方法である。害惡は則ち此世の中の破調で、之が存在するのは、却て世界の完全なる事を表はしだる者なり。と說いた人もあつた。が彼のハルトマンの著述が此世の中は人の目に立つ程、不完全で害惡がある事を論ぜし以來之を言ひ消す者無

きに至つた。果して然らば害悪と神の全智とは、如何に調和仕なければならぬか、又其れを調和せしむる道があるかと云ふ事を考へなければならむ。

斯の問題は往昔から「テヲヂチェー」(Theodicee)と云ふ表題て論せられて居る。其意味は「此の世の中には害悪がある。其害悪を神が世の中に置いた罪は許す事が出來るか……」と云ふ義て、極く人間的の言てある。尙之を委敷云へは、「此の世の中に在る害悪なるものは、神の全智、萬能、慈愛等に障碍を與へす、都合よく之を說明仕得る者であるか」と云ふ問題てある。

成程此世の中には害悪がある、其害悪は神が造つたけれ共之を造つて行はれる様にしたには、又其理由かなければならぬ。然らば其理由は如何なる者てあるか。之を解するには先つ此害悪の種類を考へねはならぬ。人間が此世の中の害悪中、甚だ大なる者として居るのは罪てある。併し此罪を何故人間は行ふか、何故罪は世の中を害するかと云ふ事は、一箇の問題てあるか、之に答へるのは難しくはない、即ち神が倫理を此世の中に置いた事より說明すれば、直に解るであらうと思ふ。

抑神が道德を行ふ人間を造らうと仕たならば、之に自由を與へねばならぬ。無理に束縛して爲さしむる行爲は、倫理でない、故に自由を與へた。併し自由を與へれば其間に罪を犯す融通が存して居るから、自然罪を爲すに至るので、其罪が世の中に在るのは一つの大なる目的を持つて居る。其れは神が人間をして道德性のある者と

なるを得せしむる爲に置いたのである。併し其罪を人が是非共仕なければならぬ譯ではない。のみならす若し人間か之を犯さぬに至れは、實に幸福である……此の世の中には社會問題と云ふ者があつて、歐米では其解釋に隨分困難仕て居る……此の日本にはまだ其様な問題が起らないが、遠からずして來るであらう……其れ等の事も若し人間が罪を犯さぬ様になれば直ちに解釋し得らるゝに至るでせう。然し世の害悪の中には罪と何の關係もない者もある。例へは今支那の奥とか西伯利亞の僻偶とかに、饑餓が起つたとして、其人民を扶ける事が出來るかと云へは、中々助ける事は出來ない。何となれば、食料を送るのてすら困難であるから……併し其れは人間が悪いから、助ける事が出來んで害悪が存在するかと云ふに、然うではない否自然界の法則に據て然うなつて居るのである。自然界の法則は、人間が住まうが住むまいが、幸てあらうが不幸であらうが、其んなとは頓着なく自個有性の儘に働くので、其結果爰に一つの衝突を生ずるので、害悪が起るのは即ち自然が人間を顧みぬからで、換言すれば是も人間の自由なる行爲より、衝突を來したのである。何となれば西伯利亞の僻偶や、支那の奥に何人も住まへと命じた者はない、然るに人間が勝手に住むのではないか……或は又地震の起る所に家屋を建てるから、地震の災害が生じ、河の近傍に住居を定めるから、洪水が起つて人命を損すのである。併し尙此外に害悪があると云ふのは、動物社會の有様で、動物が相互に呑噬する狀態は、實